

30
126

村瀨米之助著

南日本及
韓半島旅行

雲烟過眼錄

長野西澤書店發行

頁	行	誤	正
はしがき	甲六行目	僻	癖
全	乙八		「歳の上」十「字」を脱す
一	十五		「おだやかに」の下動きを脱す
二一	九〇	〇都	京都
三〇	四	「有名なる	有名なる」
六八	一	大輪	火輪

雲烟過眼録

(南日本及韓半島旅行記)

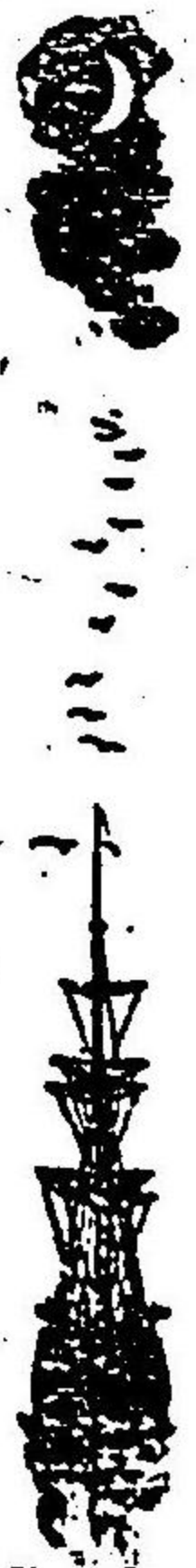


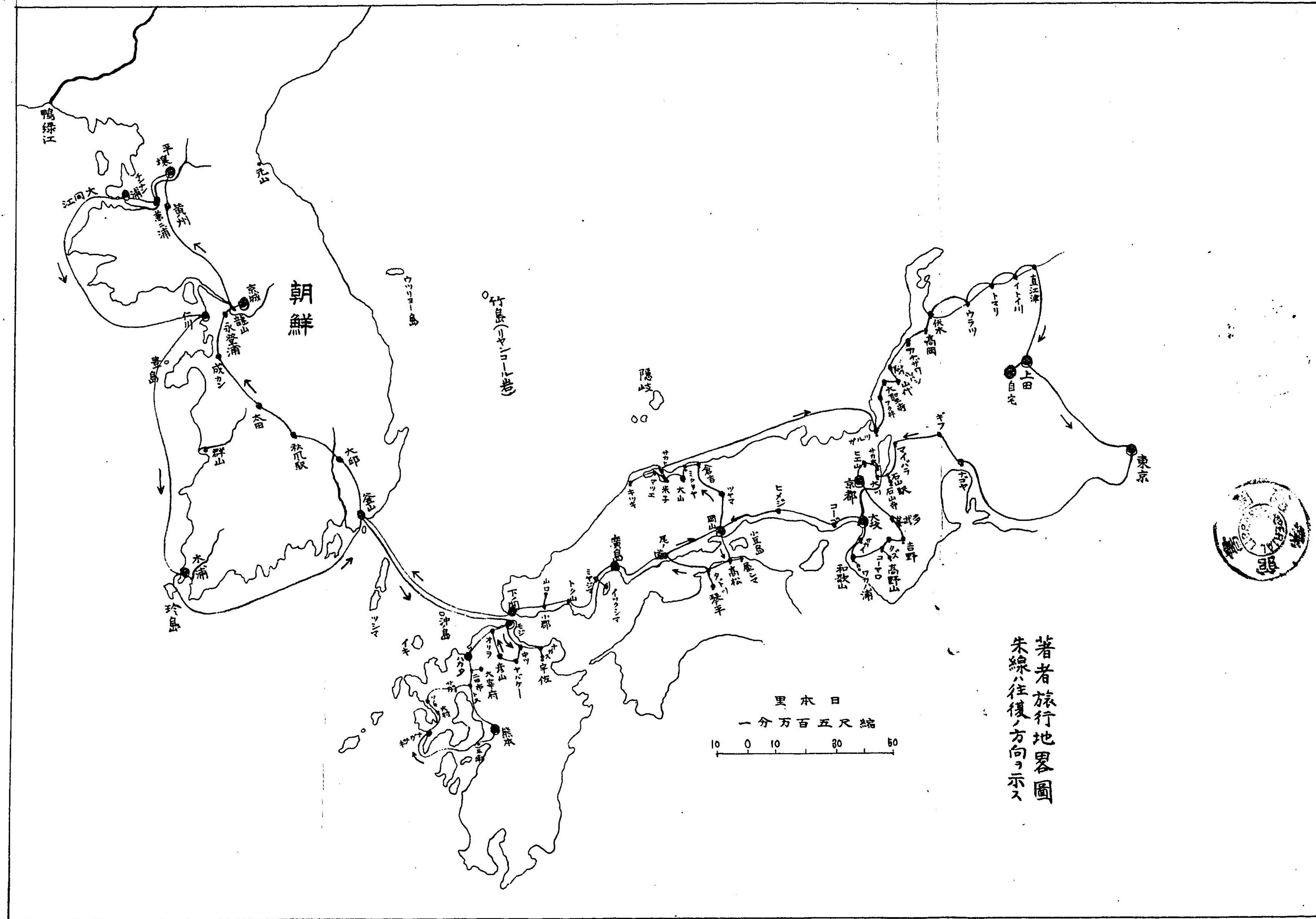
き

我嘗て聞へらく、秋津州理一片秀靈の氣の磅礴するものある、蓋しそが自然の山河に負ふ處多々なるべしと、閑を得ば一度此花綵嶋を跋渉し、「天地正大氣粹然鐘神州」所以を解せんとするや久し、人事意の如くならず、未だ其所志を果さず、曩ふ東方地方に職を奉じ、次で關東の平野に轉じ、鈴鹿山脈以東略足跡を印するの機を得たり、然も南日本に至りては、僅かに京坂地方に兩回漫遊の好期を會したるのみ、況や公私多忙眞に江山の美を貪収するの大快を專にする能はず、煙霞僻未だ全く嚮するを得ず、往昔今日に至る、去春病を得て故山に歸臥し目に青葉山郭公の閑日月、不圖此趣味深かるべき一年を空過したるも、國民真情の止を得ざるや朝夕耳にする事局の経過は、余をして幾度か快哉を絶叫せしめ、爲に病魔畧去て身神頓に壯快を覺ゆるに至る、是正に空前の好機、願はくは西南地方より更に滿韓の山河を踏破し、一に思想の一洗を期し、二には戦勝の余榮を乗する邦人發展の趨勢を見ばやと、是れ余が今回の旅行ある所以、然かも微々たる社會水平線下の一寒持大、財囊常乏しく、官途に糧を仰ぐの便なく知人の視察を助くるなし、獨立獨行、我感するまゝに感し、見聞するまゝに

見聞し、五里の行程可なり十里の健歩亦妨げず、餓て食し渴して飲む、只我意のまゝなり、歸來南窓に坐して過ぎにし旅程を考一考すれば、西南の山河歴々目あり、韓山の雲影豈我念頭を逸せんや、試み日記を清書して天下同好の諸士に酬愛せんか、日を経る事正に五十八日間遊ぶ所京畿山陰山陽四國九州北陸韓半島の大部にわたる、半は海軍汽船、半は徒歩、行程決して小なりとせず、北日本會遊の地を合すれば、正に足跡海内を普ねし、只憾む我は山陽の雄大なく蘇峯矧川子の灼爛なきを、觀察する處固より凡、諸子大に警戒して可なり、

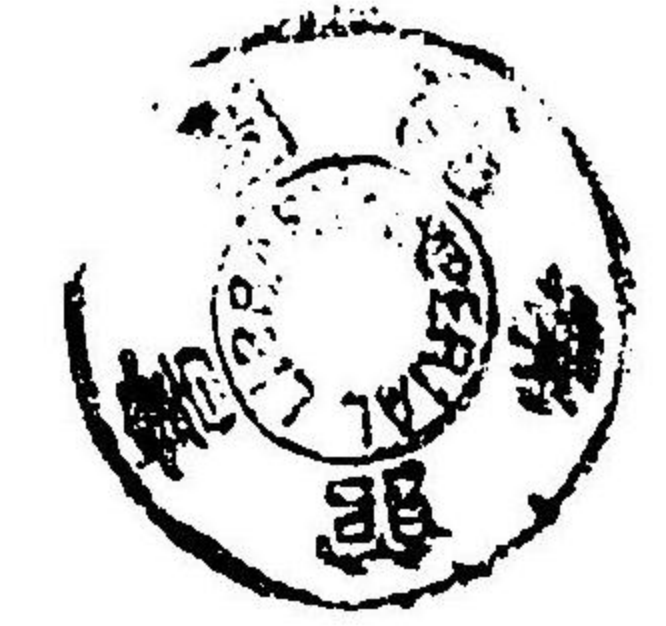
十歳漂流志未成、萍身時感故園清、回頭礫聲硝煙急、好我丹心事育英、
 滿庭春色闌清香、山徑染霞吟興昌、千里壯遊時正好、夢魂先渡渤海洋、
 全 上





著者旅行地畧圖
 朱線ハ往復ノ方向ヲ示ス

日本里
 縮尺五百分一



雲烟過眼錄

明治卅八年四月八日、晴

午前五時結束して旅程上る、親愛なる我が家族は余の前程を祝福してすこやかに歸り來らん事を祈れり、余は勇ましく亦何となく心嬉しく停車場へ急げり、午前七時半上田發の列車は其日午後早くも東都黃塵萬丈の内に余を安全お導びさ訖はんぬ、新橋停車場に近き麻屋旅舎に投ず、病後の初旅聊か疲勞を覺ぬいつしか夢の中の人となり

(約百哩)

四月九日、晴

朝來二三の所用を果し少しく閑を得て上野公園へ旅順攻撃のパノラマを見る、次で博物館へ新着のミラを見る、午後小川一真氏の催にゝる日露戦争寫真展覽會を參觀す、此夜知友兩三、我旅舎を訪ひ來る、不忍の池水肥えて柳初めて糸をかけ、忍が岡春満ちて霞暮只騷士の入るふ任かず、彼岸櫻正に盛ならんとして満都の人士酔へるに似たり、櫻雲一簇、忽當路誰在下風停紫窟(星巖)の光景や將に是れ、

四月十日午前晴、午後雨

午前六時新橋發西遊の途へ上る品川の沖、細漣おだやかに、汀鳥群飛して千聲遙かに

海煙の中、在る處、天末の餘霞紅未だ散せず、遠山醉へるが如く、近山醒むるも似たり、正は是好個の畫題、靜岡に着する頃停車場の櫻花滿を過す兩三日、天候少しく變ず、午後六時烟雨驟々の内、名古屋城眼前にあり停車場前大和館に投宿夜に入りて雨なほ止まず、(二百三十三哩)

四月十一日、晴

午前六時名古屋停車場發、午前九時朝來の霞全く晴れて洋々たる大湖は笑て我行程を迎ふ彦根の城、八幡の驛、車上よりの瞥見、はしなく思ひ出せるは

近江商人

各藩互に封境を鎖めて往來自由ならざる時に當て、千辛萬苦を冒してよく行商に従事し、天下足跡の到らざる所なきものを江州商人となす、八幡は天正十四年豊臣秀次の城を築く所にして、鶴翼山下に連なる一小市街なりと雖、元安土城下の山下町と稱へし所にして行商を以て顯はる、八幡商沽の忍耐と勇氣とは、南洋貿易より從事したるもの多く、今尙安南屋の屋號を存するものあるを見て知るべし其行商をなしたる何れの年よりなるや詳ならざるを寛永年中既と奥州南部領八戸港に行商し松前に渡りて漁場を開き、北陸地方に運搬を始めたる岡田八十次あり、又北陸奥羽地方へ行商し遂に松前に支店を開き、一代間四十餘度往復して蝦夷の産物を内地へ輸入したる西川傳右衛門あり、又鹿兒島蝦夷へ行商し巨利を博し、京都名古屋に支店を出し

彦根方言	アヤク
三月糰	ロシイ
返事	サイ
我意の折	ガナル
下婢の総	オキヨ
稱	ドン
よ加減	イワタ
と言ふ人	シ人
墨客及懶	ドロホ
惰人	イ
少女を呼	オシヨ
ふ語	オシヨ
唇尾	チシ
下され	クダシ
娼妓	ソープ
唇尾のよ	ホシ

て名を掲げし西川傳右衛門の族岡田小八郎あるにて其一般を知るべし、日野商人の行商は八幡より早く、或は言ふ安土城没落の際織田氏の下卒輩商估に變じ日野八幡地方に散居して行商をなしたりと云ふ、有名なる蚊蚋の如き其原料は、越後の産ありき、其忍耐勉勵節儉を守る驚くべきものあり、八幡は元天料なるに維新前尾州家が幕府に請ふて美濃の竹鼻と交換して領したるは畢竟富戸の多き爲なりと云ふ、の氣根の強盛なることなり封建の世に於て且然り況んや交通の利便なる今日四海に發展を試むる豈難しとせんや近江商人や、慥かに日本商人の氣根の試験石、午前十時石山驛に達す(行程八十三哩)こは是余が西遊の第一着下車驛なり、直ちに腕車に乗して

石山寺

石山村は、今膳所村の南なる大字北小路、鳥居川、國分、寺邊、南郷等を合同したる名稱にして、聲多川を以て栗太郡と相限り、西は音羽笠取山を以て、城州宇治郡と相限り、國分には國分寺趾あり、此地洞宮と稱する小祀あり洞の地名保良に通ず、蓋し孝謙帝離宮の地なり、石山寺は大字石山にあり天平中僧良辨開基、後僧觀賢中興して密教を傳ふ近世寺領五百石仁和寺に屬せり、花山帝の皇子僧都深觀は此寺の坐主となり給へるも後世門跡絶えたり承應二年回祿し賴朝公再興あり、天正年間荒蕪甚しかりしも秀頼母堂淀殿修補を加ふ今の堂是なり、本尊二臂如意輪觀音なり莊嚴頗る畏敬すべし、石山寺の額は行成卿の筆、鐘樓、多寶塔、祖師室、觀月亭あり亭は塔

の北、湖上の大景を貪取するに足る、豁眸亭とも云ふ、本堂の傍らに所謂源氏の間あり、紫式部籠居して五十四帖を綴りたりと云へ俗辨にして取るに足らず、建築亦後世の増築にて其非なること加茂翁の新釋を引く迄もなし、越中國官倉納教交替記一卷、延暦交替記一卷、佛涅槃圖一幅、光殿司筆其他數点近年國寶に列せらる、多寶塔一樓は特別保護にかゝる、

遊石山寺

石川丈山

僧房門外繫扁舟、高階翠嵐黃葉秋、一片山雲將雨去、千尋湖水鑿厓流、
飛樓疊磴眞山館、奇石怪岩皆鬼幽、紫氏揮毫記源氏、琅函亦人艷替不、

遊ふ、停車場より里程約二十町とす、ソードス、チーシの江州辨を耳ふして瀬多の川邊に沿ひ行けば道極まる所旅舎數個あり大門を入りて滑かに疊ゆる敷石より磴道數十階を登れば即石山寺なり郷里に消息したる西遊初陣の葉書の一節をかりて此寺内の記事にかへんか、

(前略)上坂本驛の一旅舎より啓上仕候朝來の雨漸く晴れ渡りて、日本のセチヴァ湖は眼前に展開せられ候、好し遠くアルプスを望むを得ざるも比真の殘雪は優ふ東洋の瑞西を賞するの價有之候、今年前十時紫式部にゆかりありと云なる石山寺に詣で暫し王朝時代の一人と相成申候、石山寺は名詮自稱石山寺に候、左れど大宮人の衣冠を見ずして本日は歐州婦人の兩三名の參詣者否遊覽者を見出申候は遺憾此事に候

石山寺は矢張紫式部の女性(然もひさし髪ならぬ王朝時代の)がふさはしく候、孤帆一片瀬田の唐橋のあなたに浮ぶ處近江富士の腰邊雲影たなびくわたり湖上の漣波や亦昔ながらの平穩なるを示す此際此景汽車はなくもがな、人力車もなくもがな、滋賀の都なれて湖上徒らゝ流船の縦横にまかすは没風流に候、余は殺風景なる此人類の發達とやらは茲のみは少しく御免を被らばやと存候、若し夫れ同寺の一端ある月見亭を訪ひ候はんか試みに想へ、中秋の明月一痕湖心よ昇るの夜ひさし髪ハイカラ式の女性將たコルセット流の婦人よりは十二單衣のやさすがたを配するの美を思はざる可からざるは寧ろ當然の感興かと存候石山寺の縁起は茲ふは略し申候(後畧)正午十二時老松の並木原、湖面の軟風爽かに、五十三宿の古道中夢にも人よ粟津野の影もさびしき義仲寺と木曾義仲の古跡を見舞ひ

膳所城趾

膳所は古の粟津市にて又膳所といへり膳所を轉して膳所となしぬ、山王祭に神供を献する由縁あるを以て見れば本來朝家に膳所を献進したる所なり城趾は慶長六年徳川氏が特に關西諸侯に謀役して之を築き疊壁樓櫓の壯麗湖上の一美觀たり近世本多氏六万石世襲の城府なりしも明治維新の後廢す、
を湖岸に眺め馬場を過て大津に入る湖岸に沿ふて發達したる市街なり思ひしよりは狭き街路人力車二輛を連ねんか既し行人の通行を妨ぐ、舊日本交通の面影を存する近畿

の名區多くは然り、脚絆甲掛編傘式の道中よして、バナマ帽、エンバチス系の街道を
らざるふ似たり、此地蓬坂山の北麓に在りて、西北は三井寺の寺域に屬し今分割して
兵營を置く、東に松本馬場の二字あり、幹線鉄道の車驛は即馬場にあり京都を去る三
里東北二道の咽喉にして中世大津關の名あり、慶長五年の役に京極高次大津城を以て
東軍に應ず南北日本の交通を遮断する要害の地たり、後此城を應所に移し仍代官を置
く、

大津代官

大津代官職は慶長五年徳川家康が關が原の一戦後大津に次したる時蘆浦の觀音寺
(住僧舜興)と十四屋(商人小野総左衛門)に命じて初めて其職を賜はりしが觀音寺
十四屋も其吏務を永く子孫に傳へず爾後諸氏交替して明治維新に至る
午後二時疏水運河(三井寺の東三保崎に開門堰門を設く明治)を見て

園城寺

一名三井寺と言ふ、三井は御井よて今園城寺金堂の側よ其古跡を存す、天台宗寺門
派の本山弘文天皇の子大友の與多王の創建し給ふ處、又大友村主の氏寺なり、貞
觀中僧圓珍(智證大師)中興し、延曆寺別院に列せしめ台教傳法の道場となす、圓珍
は最澄空海の二流を調和し役小角の修驗道を加味し盛んに一風をなす、之に因り山
門慈覺の徒と善からず、天元、正暦以降相分れ、寺門と號して大に之ふ當る、行慶
僧正(白河皇子)仁平二年を以て三井長吏となり、之を道慧法親王(鳥羽皇子)に傳ふ

後圓滿院、聖護院、寶相院、照高院の諸門跡ありて本寺を管す金堂は中院の中央に
あり唐院、三層塔、五層塔、大講堂、法華堂、大師廟、寶藏、經藏、鐘樓等之を繞る、僧徒
の住房其南に數宇あり圓滿院は北にありて兵營に接す法寶少なからず圓珍師の不動
及び其唐より携歸れる秘密佛書二卷傳へて同寺に存す、此寺中世火災毀壞にあひし
こと多く、史上に其例を見ること多からず、慈覺智證の兩門徒の分離するや永保元
年に至りて山徒三井に押寄せ舍宅一千四百九十三宇を焼失す治承四年以仁王の平氏
を討たんと謀り事泄れて三井の法輪院に逃れしとき平氏三井に放火し堂舍六百餘宇
在家二千八百余宇を亡し僧八百人を殺す、等凡千年間に十度の炎上を數ふ現今の建
築は豊臣徳川兩氏の助力になる

に至る湖畔風光の達觀自在にて、春潮満ち來りて碧、空を涵し、七十二峯鏡中に浮ぶ、を
賞するの快い蓋し此境内獨占の景なり大津兵營の柵内三井寺北院の龜岡に大友天皇の
御陵ありと言へど都合上參拜の期を得ず適たま、魯兵捕虜の寺域内を逍遙するを見る
天智帝時代韓山の形勢を追想して今昔の感ふ堪えず「漣や滋賀の都はわれあしをむか
し長等の山櫻花(千歳集忠度)の名歌に更に一段の感慨を來さしむと云へし滋賀大津の
宮址は南滋賀見世の西五丁許崇福寺の南東にあり漣村、町の北にあり想ふ皇紀千三百廿
七年東北開展の基地として大都を此地に定め給ふや韓山の風雲頗急に遂に唐兵新銳の
鋒あり難く屬邦を敵に委するの不幸を忍び給ひ内地の開発に全力を注ぎ給ひしも程

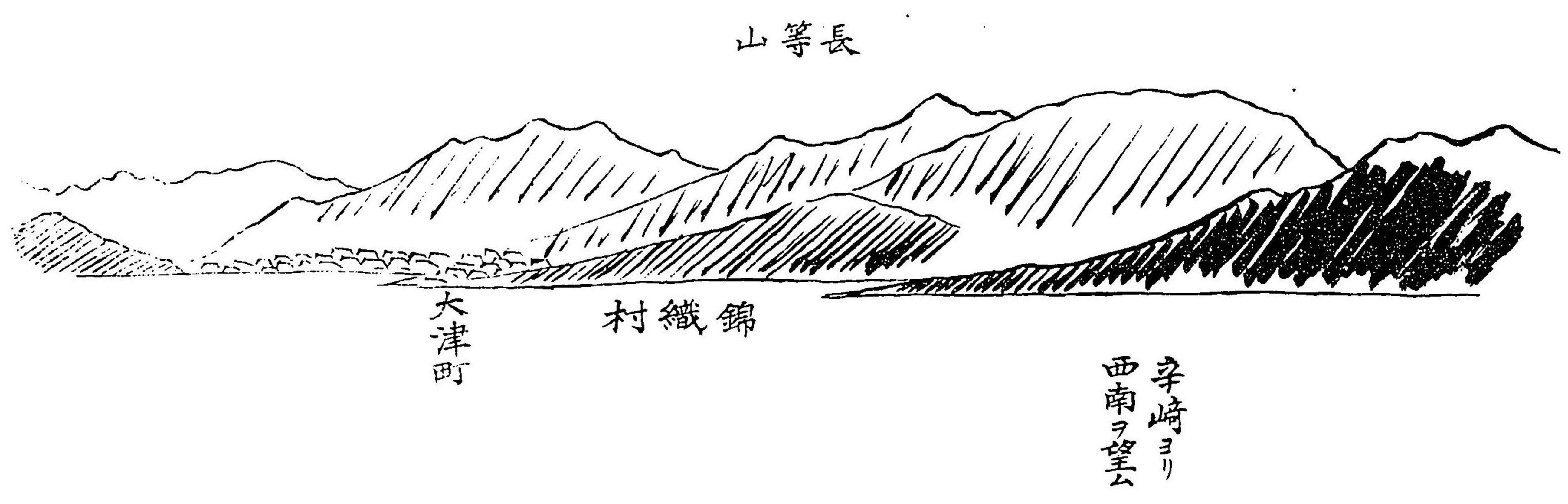
遠き昔の事なれ共其當時の情勢を遠察し奉れば天皇の御遺誠如何計ありしぞ乾坤茲に廻りて明治の今日はいさなくも韓は再び我勢力範圍に歸し魯軍大敗大津の軍營に捕虜を收容するに至る今昔の感何物か是に如かんや、長等山の櫻は年々歳々花と散り花と残りて古を忍ばしめ皇軍の全勝は帝の遺業を恢復するの聖世と接す國史幾度かペーデをかへて春秋の眺め同じからず寺畔の石苔むして千古桑滄の變をかたる、感慨無量、大津の地勢たる狭少にして固より大都會の發達を許さざるも、然も形勢上一市街の發達すべき處たり、大津を去て湖畔の勝區唐崎に至る、老松一株枝極婉々千古の翠色を海波に浸す、遠く望めは翠巒の如く、近く視れば蟠龍に似たり、傳へ言ふ天智の御宇に植ゆる處と現今の松は天正十九年新庄駿河守の植え繼きたるもの也と云ふ昔は枝極海中に垂れしも今は根幹培養の爲め廣く石垣を組上げて一段の平地をなしぬ好哉根幹の培養や、世間何物か根幹の培養より貴重なるものあらんや、只憾む所謂近江入景の勝地や是れ舊式小規模の一黒点なり寸地分區を畫して絶景を歌はんよりは何を琵琶湖の大觀を謳はざる、

楓葉蘆花灣亦灣、雨餘雲歛夕陽間、湖光一片明如鑑、照出文君黛色山、(梁星巖)

琵琶湖

鴻の海と稱す中世以降の事なり野州郡邊保津の名より出づ、元祿年間供御瀬鹿跳澗を開鑿して排水を爲さん計畫ありしと云ふ、近年大坂敦賀間の運河を豫想する者あり其説に水面は今海上八十六米突の位置を保ち二億千三百万坪の積を有す水深は最

(2)



長等山



大津町

錦織村

辛崎ヨリ
西南ヲ望ム

(2)

遠き昔の事なり其當時の情勢を推察し、大津の御遺蹟如何計ありしを、乾坤柱
 に通じて明治の今日に於て、其地を再興し、其地を大津の軍營に補遺
 を收容するに至る、今昔の感何物か是に如かんや、長等山の櫻は年々歳々花と散り花と
 残りて古を忍ばしめ、皇軍の全勝は帝の遺業を恢復するの聖世に接す、國史態度か、ヘトナ
 をかへて春秋の眺め同しからず、寺畔の石苔むして千古桑榆の變をかたる、感慨無量、大
 津の地勢たる、狹少にして固より大都會の發達を許さざるも、然も形勢上一市街の發達
 すべき處たり、大津を去て湖畔の勝區唐崎に至る、老松一株、枝極醜々千古の翠色を海
 波に浸す、遠く望めば翠樹の如く、近く視れば蟠龍に似たり、傳へ言ふ天智の御宇に
 植ゆる處と現今の松は、天正十九年新庄駿河守の植え置きたるもの也と云ふ昔は、枝極海
 中に垂れしも、今は根幹培養の爲め、廣く石垣を組上げて一段の平地をなし、好哉根幹の
 培養や、世間何物か根幹の培養より貴重なるものあらんや、只懐ひ所謂近江八景の一
 勝地や、是れ舊式小規模の一黒点なり、寸地分毫を蓄して、絶景を歌はんよりは、何ぞ琵琶湖
 の大觀を臨はざる。

楓葉散花湖亦瀾、雨餘雲散夕陽間、湖光一片明如鏡、照出文君黛色山、(梁星巖)

海のほとり中世以降の事なり、野州郡保良の名より出づ、元禄年間、伊御廣慶、廣間
 を開墾して、井水を爲さん計書ありしと云ふ、近年大阪敷置間の運河を掘り、其地
 より、其地に水面は、今海上八十六米、尖の位置を保ち、三萬三千三百平方の積を有す、水深は最

深八十米突もあらんか故に水深四十一米突を減し標高四十五米突に至らしめば一億六千万坪の陸地を得べしと故原田博士曰く本邦には土地構成の結果として本邦地形は並行して生じたる裂罅数多あり其越前より九州築紫の海に至る一大裂罅は深く凹落して地學上所謂地溝帯をなせり、此湖即ち其地溝帯の一部に水の滞留して生じたるものなりと故に其淺深の度も彼の霞浦の如く均一ならずして諸所に暗礁の突起するあり又湖中竹生島多景島白石島沖の島の諸島嶼あり野州郡木濱村及滋賀郡堅田村以南は三尋乃至五尋なり此最深部は西岸に接近す其以北の最深部も西岸に近し高島郡石田川口を距る事東方一里の沖に凡七十尋の處あり是れ湖中最深の部分なりとす而て東岸は大抵淺なり湖中東岸にはエビ、ホテの類多く又春夏の候フナ、コイの産卵場たり、西岸一帯水草乏しくフナの産卵場は適せざるも亦コアラの放卵する處なり竹生島附近は夏期マスの栖息所なり

北方沖の島長命寺山の海波漂渺の内一抹の薄墨色を眺め西方四明岳高く雲霄を磨す南東方大津の埠頭に黒烟の上を見る、囑目數里眞個に氣宇の廣濶なるを覺ゆ午後三時坂本村に向ふ此日晴大幸崎より流汗背にゆふる徒歩する約二十丁坂本日吉神社前一旅舎竹安に投す坂本の地たる大字穴太は天文年中足利義晴の薨所たる萬松院址あり穴太の西には高穴穗宮址あり下坂本の松林の濱には天正十年明智左馬助の事蹟を以て有名なる坂本城址あり想へ天正十年の六月「二の谷」の名兎大鹿毛の駿馬白練は狩野永徳が書きたるてふ雲龍陣羽織志賀の浦風に立つ波を蹴立々々て唐崎の松を目當に泳がせしとき大湖の光景や正に一幅の活畫圖、史上の舊跡一々指點するに暇あらず幽

静閑寂汽笛の聲を絶ち遊客三五時、春色駘蕩の期、際して社前を賽するのみ比叡山に登るものは此地よりするを順路とす旅舎の裏亭翠綠濃かにかすかに湖上の景をかいまみること足るのみ大津より辛崎まで五十町唐崎より上坂本迄廿町比叡山根本中堂まで五十町京都まで約一里の行程とす傳教大師降誕地生源寺は此旅舎の附近にあり宿泊者余一人地獄釜の据風呂、終日の疲を洗ひシンとしたる一室、早くも睡魔の生捕となり終れり、

四月十二日、晴

午前九時人夫一人を賃して上坂本を發す西面して登る處比叡山頂に達する大道ありとす大鳥居を過ぎて登るふと數丁右側の溪谷に向ふて進めり

日吉神社

山王權現社と曰ふ横川谷の水、祠前を流る、大宮川と名づく此神は延暦寺建立以後僧徒の奉ずる所となり地主にましませし故山王と號せしめ種々の附會を爲せり平安京のとき山門の寺僧事あれば毎に神輿を擧げて公家に通る之を神輿振と稱し京師戒懼甚しかりき元龜二年織田氏山徒の暴横を憎み寺中を放火し山王に及ぶ天正十九年豊臣氏再興明治維新の際山王權現の號を去り官幣大社と列す祭神は大宮二宮五坐を配祀し之を七社と曰ふ主神は大山咋神にて二宮は鎮坐大宮は三輪の大物主神を祭る山王の使者を猿なりとする古語は此山は猿多かりし故にや申日に祭禮ありし故に

や不明

あり恰かも翌日は祭典の事とて村内準備にいざがはしく有名なる日吉の七神輿も既に社前に装置せられ居たり大社の前より左に取りて少しく登れば

比叡山

南は滋賀山に接し北は遠く比良山に連なり山勢峻絶頂を大嶽と言ふ海拔八五〇米突花崗岩の峯巒起伏して方五十餘町に盤距す大嶽の東傍延暦寺中堂あり海拔六八〇米突大嶽の南に四明峯無動寺あり大嶽の西北は西塔の峯勢北走して大原魚山の嶺となる横川嶺は大嶽と一縦谷を隔て、東北に横亘す水流は西面高野川に注ぎ東面横川谷に瀝し大宮川となる此山は延暦寺の寺界にして堂塔諸所に散在し幽邃の勝を占めたり山上凡四嶺に分つ東嶺(中學及坂本南嶺)無動寺、西嶺(西塔青龍寺)北嶺(横川安樂律院)是なり坂本より無動寺まで二十五町無動寺より白川へ六十八町無動寺より一乗寺へ六十三町坂本より根本中堂まで二十六町中堂より西塔の釋迦堂まで十二町西教寺より横川中堂まで三十五町横川より八瀬まで三十八町とす又東塔中堂より無動寺へ行くには八町西塔より横川へ回るものは三十八町なり大古より既に史蹟を止めたる偉境にして古事記に「談海之曰枝」とは即ち是、速須佐之男命の子大年神、大年神の子大山咋神此神は「近談海」の曰枝、坐すを見たり大山咋神の子は即ち山城加茂の神なれば其勢大や想見するに足る、平城京の時藤原武智磨山中に禪室を構はたる等既延暦寺開山以前より着手せしものあるを知るべしの本道に合す五十二だんの石階を登り花摘社に出ず道遠からずと雖も頗る急峻なり途中山上食物野菜を運搬するものを見る醬油味噌より豆腐こんにやく類まで毎日此峻坂を上下して供給すこと右側要の宿より坂本より約廿町として右方林中慈覺大師

の廟を見る五智院を経て東塔山上に達す鬱蒼たる杉林盡猶暗く境内幽邃眞個に理想に耽るゝ足る総持坊教王院龍珠院の南方左側は他宗生寄宿所あり其南方に天台宗大學校あり文珠樓は一段高き處にあり根本中堂は東塔境内中の窪所恰かも「すりばち」の底にあり大講堂戒壇其傍あり後醍醐帝行在所舊跡、出世大黒天、大塔宮護良親王舊跡蓮如上人舊跡本願堂、等附近に散在す一言して延暦寺と言ふ然も東坂本の宗務廳のあり所より西高野村より北は横川より南無動寺七曲「見はらしの茶屋」に至る迄廣さ二里餘長さ二里餘に散在する堂塔伽藍を総稱するものにして其規模の大なる流石に延暦年間以來の盛況を想見すべし

延暦寺

天台宗大本山にして山門と稱す延暦七年僧最澄(傳教大師)開創、初め一乘止觀院と曰ふ後堂塔増加し東塔院西塔院の二となり弘仁十四年嵯峨天皇敕して延暦寺の號を賜ふ天長元年僧義真を本寺貫主とし天台宗座主とす文徳清和の朝に圓仁(慈覺)圓珍(智證)並に入唐傳法して宗風を振ふ弘仁帝の哭澄上人の御製は青蓮院門跡に傳へ澄上人の將來目錄一卷羯磨金剛目錄一卷は本寺に所藏し並に國寶に列す根本中堂本尊は藥師如來(澄自作)なり堂の構造豪壯偉大其用材の雄一驚を喚す紫宸殿の模造なりといふ天台密教の特相たる秘密道場の構造にして内陣本尊の周圍は普通の佛殿に見る修彌壇の如く高からず堂奥一面約二間の底面にありて暗黒なる階下より本尊の壇

を据へ付けたり故に僧侶の修法成ならずや凄愴の氣と冷氣とは交々人よせまり陰暗幽妙の光景をいろゝ修法の高尙なるを思はしむ

東塔を去りて行く事數丁道稍下る處納骨堂あり暫くあして辨慶水の在處に至る清冽掬すべし千手堂より小徑をたどりて四明嶽絶頂に登る海拔二千七百餘尺花崗岩の大塊二三の外四面快濶眺望雄大、千手堂より頂上迄八町とす西方京都市の全景を臨み東大湖の全觀を貪取す南方一帶山中越無動寺七まがりの細徑を下瞰する處宛然一の大ベネラマ無動寺 中堂の南十町標高六百米突東に下れば穴太村白鳥坂西に下れば修學院白川村雲母坂と曰ふ殿堂は大乗院不動堂辨天堂等あり東塔の別所にて相應和尚開基とす

横川 東塔の正北一里横川谷を隔つ西塔よりも迂回して至るべし行程一里、横川中堂を楞嚴院と曰ふ慈覺大師開基とす

飯室 横川塔の別所として寶滿寺と云ふ安樂律院不動堂慈忍堂等あり安樂律院は源空(惠心僧都)の隱所として往生要集の編著は此處に於てせり

さうして千手堂の道に至りて西塔に向ふ淨土院あり傳教大師終焉の地なり行くと五六町にして釋迦堂相輪塔等のある處に至る総稱して寶幢院と云ふ天台坐主第二世圓澄の天長二年に建立する處、人夫は茲に別れを告ぐ、翠影重なる處行手はのくらき急坂を下る十丁にして黒谷に達す四隣閑として白雲深し眞個に幽寂の別乾坤なり行厨を開きて一懋す黒谷は青龍寺と稱し延暦寺の別所なり往年圓光大師(法然)此地に來り淨土教の

研究をなせり寺内に大師の畫像あり世は黒谷上人と云ふ寺院取て廣からざるも庭内瀟洒纖塵を止めず澗水潺湲として屋後薄くあり幽境更に一段の邃を加ふ午後一時急峻四十度内外の勾配として然かも小石まじりの坂路を下る十八丁にして山城國愛宕郡八瀬村に達を願れを四明峯高く背後に立てり此方面よりしては延曆寺境内の一部だも望見するを得ず由來叡山は湖に面して立つものと云ふべし思へらく寺院所在の山頂に多きは日本人自然崇拜の感念に基くの理由もあるべしと雖も必竟幽寂高潔の境界ありて自然と同化し去るの便將た超自然的理想を得るの便宜を得んと理由の存するも亦争ふ可からざるの情勢なり而して山岳が深く人心に影響する所由を考ふるに山の彩色や多くは青綠色にして心理上積極的に人心を昂むるよりは勿論消極的に人心を鎮むるの力あり其表示する處の感情や冷靜なり安慰なり寂寥なり次に來るものは沈思なり瞑想なり幽渺名け難き一種の潤色を與ふ平和あり慰藉あり世は輕浮活動執着煩悩あらは山は是れ多く其反對の感情を作る山の峻險や既凡俗の卑さ對して高尚なり山の高潔なるや人界の汚濁に對して既に出塵の妙を見る高妙は壯美は雄偉の感起り崇敬の念生ず人間事業は山の大自然を共に小なり人間の經營は一瞬なると共に永久なるものは山なり人間として神たらんと欲せば須らく峻嶺大岳の絶頂を攀つべし偉人が位置を下する何ぞ其間に相感の理なからんや加ふる坂路峻險軟弱漢の登攀を許さず勢は非常の熱心と非常の困苦とを以てし漸くして清淨無垢の幽境に至らんか佛陀の光明は八

方遍照して室内既異香あり呼吸漸く我を歸りて合掌瞑目せんか人界の葱鬱盡く去て身は既に天上雲深き處にあり五大の微必竟云ふに足らず自然は山岳の雄大豪壯なるが如く大なり一種微妙の消息は既に名僧の化導をまたずして至らんとす此時に際し徳望一世にあまねき善知識の珊瑚の珠數つまより來りて優婉微音穢濁の色界を説破し來るや人間何人か永遠なる希望を彼岸の淨土に懸けしむるの妙理を想はざらんや而して是正に優者の哲學思想涵養所として下賤凡俗平民的なるもの、盡く味ひ得る所以のものにあらざる平民佛教が市街の雜踏中にある即ち此理に外ならず天台宗眞言宗の本山が深山幽谷の間にありて新淨土宗本願寺の京都七條もあるもの豈偶然ならんや午後一時半八瀬の街道へ出づ八瀬と言へは何となく京都的なるが如きぞ面白き、否詩的現象たるを見る、聞き及びたる八瀬や大原や果して如何、八瀬一は矢背村といふ村民世々禁宮へ出入し行幸の時には、駕輿丁を勤仕して今代に至る村民言ふ延元の亂の後醍醐帝の叡山行幸を警護し奉りて山門へ入ると幸福なるかな八瀬の民人雲上の人と僻村の土民万乗の君と率土の民此は八瀬に於ては遺憾なく調和せられたり八瀬や大原や一種の風韻の存する蓋し因て來る處より高野川一名八瀬川村内を流る柔軟なる水靜かなる音、茅屋三五梅枝花疎なる處炊煙一抹鈍き曲線を畫して揚る淋しげに亦長閑お物置小屋の傍に家鶏一群空寂を破りて時をつくる、下流三里京に入り油の如き加茂川とある「春雨のふりはへて行く人よりは我先づつまん八瀬の川岸」(六帖)、此地方の

女子常に京に出で、薪材を賣る、其薪や小作りにして品よく彼等の身拵へ亦一種の装ひ、紺飛白の前垂(普通の前垂を三個程体の前後に綴り合せ、合せ目には赤色のへの字形の布片を付く)を掛け、頭上手軽く薪材を戴き、新たなる手拭を頬より冠り下げ、潤花一枝、被薔正に清香煙るが如きを折添へて、くる木召せと呼び歩く、其呼聲や鄙びたる様にて、古雅に其容姿風流にまだうら若き、藪鶯の谷の戸出で、嬌音を弄する誰か清新なる詩趣を観せざるべき古より京の町の一雅興所謂小原女是なり、「小原女や野分にむかふか、へ帯」(りの女)人力車まで少し無風流なれど、京都に向ふ午後三時半三條橋通り京都館へ投宿す京の町や既に再三の知己格別珍らしからねど幾度來るもあかぬ所は京都あり言ふ勿れ神社佛閣多ふ故なりと紅燈籠酒意のまゝなるが故なりと、あらず、人豈斯の如き俗的の理由よりせんや千里鶯啼て緑紅映するの光景や山村水郭酒旗の風、賑やかに花やるに俗腸亦樂まざるゝあらざるべし、ゆつたりしたる東山、油の如き加茂川の水、春風麗外花を賣るの聲、如意峯頭一輪の月、日は昇る三竿の高きも四條橋上人影稀なる處、しめやかま物靜かに詩腸湧かざるゝあらざるべし、然も余の京都を愛する唯一の理由は、然り理由と言ふの殺風景を許せし、具体的美に潜める理想界の美の持相にあり、此夜午後五時より祇園新地歌舞練場、於て京の名物「都踊り」を見る蓋し此見地よりせしもの、「都踊り」て京都美の縮圖なり京都を知らんとするものは一度「都踊り」を見ざる可からず冷靜なる頭腦を以て、沈着なる態度に於て、余は東京の所謂江

戸子性の美的發動なるものを見、若し余の用語にして誤謬ならしめ、「嘆美」「感動」等の名詞を以て表はすべき男子的美ありとするものなり此男子的美が女子を通じ、て表はせられんか袈裟御前式となり靜御前系となる女子に現はれ來るも均しく男子的形式を帯ふるを思ふべし、東日本や間々「の谷」「小次郎」「千代萩」「千松」の如き男子に顯はれたる女子的優美の現象なきにあらず然も眞の優美は眞の女子ならざる可からず京都の自然や曲線的の山河にして關東火山岩の折線式直線的と異なり、生理學審美學の教ゆる如く眼線が此曲線の變化を尋ねて調和的運動をなす處に美的快感の起るとせ、京都の女子の形体の美も同一の理に原因せざる可からず而して其表出の美運動界の優美が「程よき」「やさしき」「愛らしき」事を要素とすべき物とせば、都踊りや正に眞に「優美」の代表なり云ふべし、東京の美は壯美なり、京都の美は「優美」なり是れ冷靜なる比較論なり

都踊り歌詞(大日本三の神垣)

「ときしらぬふじのたかねも君が世の年たつけさはのどかまつもる雪さへあきらかにあふぐも高きすかたかな
 「御國の花とみにしおふ櫻もかくやますらをのたけくをしくらみ山をこゑて見たりて外國もちるもかをるもへだてなく君につかふるまをるを神もめづらん幸ふらん
 「八幡の山の峯たかくみいつあふきてわけのぼる山路よさける女郎花つゆのかんさした

をやかにすがたなまめくたな人はまねくをはなのうなづきてをしき風よなびくらん
三の韓國まつるひし昔のみいつ今も猶かはらぬみ代のめてたさよ

「さぞ鹿の聲もまぢかき春日野の一の鳥居にさしたてし神の枝もさかるゆく神の恵みの
いやひろくいらしむるうのかすくよてらすともしびてるもみぢなるをあらそふひま
もりてみゆるこのまの藤かつら永き代かけて榮えつゆかりの色の色あせすとときはか
きはの神杉や

「万代と三笠の山ろよばうなるあめの下こそたのしかるらめ

「四つの御社もろともみかどを守る大神のしつまりぬます千木高く廊門かけてふりつ
もる雪のひかりは白にぎてまはゆくみゆる回廊は赤るよぎての御てくらかたよとあ
ふく春日山

「天の岩戸のひる前の昔ゆかしき神樂殿まうつる人はみあこゝに神樂を奏しみけそなへ
大麻こよみいたきて家の守とまつるらん

「梅をかざしてにこやかにみまへよつごふ乙女子が舞の手ふりふかきあはす六のをこど
のねを清みかざす輪神さかきばのしりゆげ高き笛の聲

「なびく旗風かぎりなく夜はともしびともしつれ万代うたひよきはしくわたる宇治橋打
わたりみいつをあふく神路山島路の山をこるゆけは

「伊勢の浦わの浦つたひたてる岩はの御しめ繩きよくもかゝる白波のひけはひかたのま

さぞ路よよりてかいあるかすくのかひやひろはん玉くしげ二見の浦の朝日かげくも
らすのぼるみひかりは外國ひろくてらすらん

げよもたふとき神垣の光かさねし大みいづかしてみあふぐ三山のたかねの櫻しき島の
大和心の色みせていく千代までも勝國をいはひてまゐる万づ民草』

歌詞に伴ふ舞臺の變化純日本的江山の遠景左右ならぶ歌ひ方樂器方同一の服装同一
の手ぶりシメトリ、コントラスト、アイデンチター、ハーモニーあらゆる優美の
發現なるもの悉く此舞臺は表はれ来る只今春の都踊りが聊か「きはもの」風の俗臭を帯
び所謂武裝せし都踊を見たるを遺憾なる美を發揚して京都の内容を照會せん何ぞ世
情に頓着するに及ばんや美を美として價値を問ふ絶對的の立脚地に據らざる可からず
然れ共觀客は千差万別なり然く品位と神聖と懸念せば開催者の目的に違ふや否や余
は門外漢なもろは固より知る處にあらず滿州の平野に人間壯美の極上を示し内に這般
の優美を示す日本人亦餘裕あるかな若し夫れ人間向上心の指す方向にして眞善美の
三点にありとせば日本人は慥か其三分の一を實現しつゝあるものなり知らず眞理を
たどるもの善に向つて進むもの如今正に如何なるかを、

四月十三日、曇午前少しく雨あり午後晴。

京都滞在午前は前年訪はさりし紫野の大徳寺（赤松則村一室を造り僧妙超を置ける以
來臨濟宗一派の大本山となる一休、深菴等の名僧を出す）九條の東寺（延暦十五年桓

武天皇の東鴻臚を捨て、東寺とす。等を遊覽す午後京都博物館を參觀す。の貴品多かる中、特余の注意を惹きしは西本願寺法主大谷光瑞氏の出品にかゝる中央亞細亞殊ふ東トルキスタン地方より將來の佛像土偶等なりとす。是等の佛像や美術家の所謂健駄邏式なるものありて印度固有の形式を離れて希臘式を混せし痕跡を明かにし希臘佛敎式の面影を止むるものにして一覽の價値充分なりとす。夫れ印度固有の佛像は佛典に所謂三十二相を具足すとせば、正其儀範に準據せざる處多きものなり。即ち印度式は其面飽迄形式的にして螺髮肉髻整然として排列せられ手足圓滿厚脣平趾右は祖き衣は左肩より斜に半身を掩ふに過ぎず殆んど全く文裝なし然るに健駄邏式は多く普通の佛像を見る所の螺髮の優美なるちりれ髪となり顔面は表情豊富なる希臘風を帯び衣は左右の兩肩を掩ふて其文褶極めて自然に近し此見解よれば大和法隆寺金堂に安置せる釋迦三尊全金堂壁畫の西面入口の南側の釋迦像等は最も明かに兩肩被覆の特質を表せりと云ふ(高山氏に據る)午後三時清水寺に詣で

京焼

寛永年間京師の陶工野々村仁清といふもの始て之を製す仁清は京師の近郊仁和寺村に住し清兵衛といふ約して仁清となし以て名とす其製器に仁清の印あり陶窯を栗田口(元和寛永之際九右衛門なるもの専ら西洋風を倣て陶器を作る是れ栗田焼の)御室、清閑寺(又音羽と云ふ始なり錦光山、寶山、對山、東山など云ふは窯の名にて工人の名にあらず)を以て



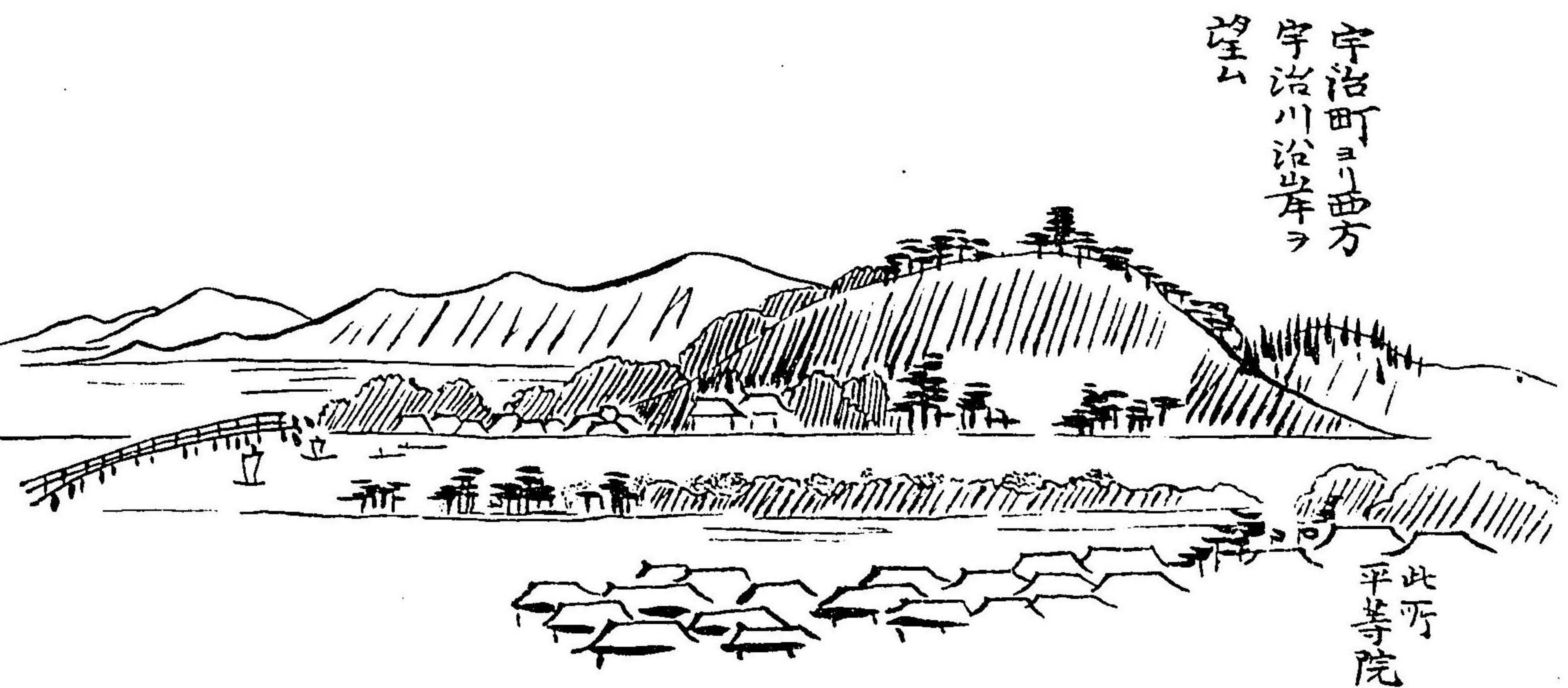
宇治町より西方
宇治川沿山岸
の望

此所
平寺院

其天皇の東渡願を遂げて、東寺(東大寺)等を遊覽す午後京都南御館を參觀す(その)の貴
 品多かる中(その)特(その)余の注意を惹きしは西本願寺法主大谷光瑞氏の出品に於ける中央亞
 細亞(その)殊(その)東(その)ト(その)キ(その)スタ(その)ン地方より將來の佛像土偶等なりとす是等の佛像や美術家の所
 謂(その)佛(その)教(その)式(その)なるものありて印度固有の形式を離れて希臘式を混せし痕跡を明かにし希
 臘佛(その)教(その)式(その)の面影を止むるものにして一覽の價值充分なりとす夫れ印度固有の佛(その)像(その)は佛
 典(その)上(その)所謂(その)三十二相を具足すとせば二は正(その)其(その)儀(その)範(その)に準據せざる處多きものなり即ち印
 度式(その)は其(その)面(その)飽(その)迄(その)形式(その)的(その)にして螺(その)髮(その)肉(その)髻(その)整然(その)として排列せられ手足圓滿厚眼平趾右は祖
 き衣は左肩より斜に半身を掩ふに過ぎず殆んど全く文裝なし然るに健壯(その)瀟(その)灑(その)式(その)は多く著
 通(その)の佛(その)像(その)も見る所の螺(その)髮(その)の優美なるものれ髪となり顔面は表情豐富なる希臘風を帯び
 衣は左右の兩肩を掩ふて其(その)文(その)禮(その)極めて自然に近し此見解によれば大和法隆寺金堂(その)主(その)安
 置せる釋迦(その)三尊(その)金(その)堂(その)壁(その)畫(その)の西面入口の南側の釋迦(その)像(その)等は最も明かに兩肩被覆の特質
 を表せると云ふ(高山氏に據る)午後三時清水寺に詣りて

京 燒

寛永年間京師の陶工野々村仁清といふもの始て之を興す仁清は京師の近郊仁和寺村
 に住し清兵衛といふ別して仁清を名とし其(その)製(その)器(その)に仁清の印あり(其(その)製(その)器(その)を栗田口
 元和堂本の陶光右衛門なるものより西陣屋に傳へて陶器を作る是れ栗田口(其(その)製(その)器(その)の)御室、清閑寺(又(その)其(その)製(その)器(その)を)三浦
 氏より傳光山、栗田口、對山、栗田口など云ふは其(その)製(その)器(その)の)名に於て工人の名にあらざる(其(その)製(その)器(その)の)



宇治町より西方
 宇治川沿山岸ヲ
 望ム

此所
 平等院

燒のなり初まる後分れて二
耶兵衛より初まる岩を村井吉兵衛此名を馬けり三は他勤作所・勝としお初まる後分れて二
派とあり瓷器は則則釉澤軟滑彩畫描金の製ありて傳へて栗田焼に存ず磁器に畫くもの
清水焼にして其他磁器には乾山焼永樂燒樂燒等あり製産額合計七拾万圓全國産額二
百四十六万圓に對し三割五分を占む原料は主として陶土と稱し成分は硫酸アルミニ
ウムにして多少のソジウム、ポツタシム、カルシウム等を含むす即ち京都附近花岡
石の風雨に暴露して崩壞し其内の長石は徐々に分解して白色の細粉となり水に溶解
せざるが故に堆積せるものなり其他の原料は多少其質を異ふす

二三を購ひ更ふ平安神宮に詣す恰かも好し其祭典に會し王朝時代の舞樂を見て歸宿す

○ 都 方 言

ソヤサカへ(左様であるから)ヨンベ(昨夜)ソードス(ソーデス)シンキナ(チレツタ
イ)オトツアン、オデーサン(父)ヒキズリ(駒下駄)オツカキ(十能)オトコシ(僕)ボン
チ(稚子)カツマイ(癩病)ナガタン(庖丁)ゴロ(嘔)ホタヘル(フザケル)シンドイ(疲)
オカー、オツカサン(母)チビツト(少ない)メカチン(一目砂)ミツチャ(痘痕)ヨージ
(雪隠)ギョーサン(澤山)子キ(傍)クンド(ケレヒ)クナルイ(羨)ソーオシヤス(左様
シナサレ)オクレヤヌ(下サレ)ソイヤアリマセン(左様ではありませぬ)

四月十四日、晴

七條より瀛車に乗して宇治に向ふ宇治の名稱や余は何となく涼しくきてゆるぞうれ
しけれ此日黄蘗宗本山萬福寺を訪ひ隠元禪師の跡を尋ねんとして果さず同寺は宇治大

宇五箇莊大和田にあり再遊を期して過ぐ宇治の地や流石に本邦茶園の名所滿眸一碧茶園ならざるなし嘗て聞く摘茶の候小女の三々五々として園中にある處亦一種の趣味ある光榮を現出せずんばあらずと或は然らん宇治茶は綠茶にして製法に宇治法と釜熬とあり宇治法は摘取りたる茶葉を蒸籠にて蒸し上げ焙爐に移し手にて揉捻して漸次乾燥せしめ篩上て上茶及び粉茶を區別す輸出品は器械を以て揉捻し針狀仕上ぐ輸出物は横濱神戸等より外國人の所有する再製場あり乾燥を充分ならしめ色澤を美にし形狀を均一にし加之各種の茶を混合して輸出向に適する様再製す又着色の爲に乾燥中も藥品を加ふ

綠茶審査法

- 一、形狀二〇〇% 二、色澤一〇〇% 三、水色二〇〇% 四、蒸熬一〇〇% 五、香氣二〇〇%
- 六、味一〇〇% 七、貯藏一〇〇% 但玉露は形狀を一〇〇%をし味を二〇〇%とす。

午前九時十分宇治停車場に着直ちに宇治町を経て宇治川畔に

平等院

宇治橋(孝德天皇の御宇大化二年道脇の造る所)の南二町に在り宇治川其東畔を流る此川水流比較的急なり近時理學者の言に水力電氣を此川に起さば大坂全都に電力を供給して余りあらんと(此地初め左大臣源融の別業にして長徳年中藤原道家買得し

て山莊となし富家殿(藤原忠文舊宅)と共に之を子頼通に傳ふ頼通永承七年修理して寺となし平等院と號す佛殿を鳳凰堂とす本寺は中堂兩翼及び後尾より成る中堂三間二面装飾あり屋根入母屋(二重)瓦葺なり屋上は銅鳳を置く此銅鳳今取外しあり構造の工みなる風も從て轉ず明治卅一年特別保護を加へらる明應中修補し豊臣徳川二氏亦修工を加ふ明治廿七年米國市伽高世界大博覽會の際本堂の模造を出品す本堂は古の豊樂殿より左右栖霞露景の兩樓あるを模せるものか堂傍を扇の芝と稱し源三位頼政の自刃したる所と傳ふ本尊は文六阿彌陀如來の坐像にして周圍に小像五十餘軀あり何れも佛工定朝の作なり扉背觀經九品の變相並に壁面釋迦八相圖は繪所長者宅麻爲成り手よして扉銘觀經九品の文は源左府俊房の筆なり彫棟彩梁七寶を鏤め螺鈿を填む今は大方剝落したれ共藤原氏榮華の有様をしのぶに充分なり今本尊天蓋の一部は幸ひも取外しある爲充分の觀察をなすの便あり

を見る清くして勢よき宇治川の流れ堤上に咲きみづれたる櫻の並木の間より小形の渡舟兩三上流より漕ぎ下るを見るあたり敢て多く人工を加へされ共亦池あり難き一種の遊園此河の水の流れ、て亦歸るを眺め、扇の芝に諸樹くつるさ埋れ木の花さく事もなきの跡に残して消へ行きし源三位頼政の最後や如何なりし目のあたり見る心地して不思議を費せり平等院は當時再建中にて不幸にも全部の鳳凰堂を見るを得ず寺傍の寶物縦覽所に入りて其一部を見るを得たり午後二時〇七分再び汽車にて櫻

井より向ふ奈良附近は會遊の地なれば省略して前行多武峯を指す午後五時卅分櫻井驛に達し(京都櫻井間三十八哩十五鎖)直に腕車にて約一里を走り夫れより徒歩して多武峯の山間へ進む櫻井驛を距る拾數丁多武峯神社の一の鳥居あり(高さ二丈八尺本社まで五十町)多武峯村と稱する狭少の區域約一里に亘る(木津より櫻井を経て多武峯の南に及び上市連なる所謂葛城山脈の兩側り如きは子午線に並走したる數多の地構線によりて地体の起伏をなす)太古記の山敢し奈良平野の如き攝河、泉、平野の南部の如きは陷没地たるは一見して其確然たるを知る)太古記の山敢て高からず景象必ずしも偉ならざるも溪間の水色昌明にして杉林山を覆ひ淡雲時、道を遮りて遙か、人聲を聞く清新の氣自から襲ひ來る幽趣亦賞するよ足るものあり道傍見る所風俗又特獨のものあり大なる袖無し羽織を纏ふたるよ少年老女の區別なきが如きは是れ絶頂に達せんとする頃より陰森たる杉林頭上を壓し左らぬだに薄暮明か、人顔を辨せず辛ふして談山神社の傍なる紅葉館に投す此地猶もみぢ屋あり旅舎らしきものは此二戸とす暗淡たる内に所謂「關西の日光」をかいまみ取敢ず一浴し終りて寢につく氣候頗る冷なるを覺ゆ

多武峯

古はタムと呼びしを中世以降タウと云ひ又談武となす澗水北流きて倉橋川に入り寺川是なり齊明天皇嘗て離宮を造り給へり

談山神社

峯上北面より大織冠藤原鎌足を祭る初め鎌足の墓所につき其子定惠寺塔を建つと史家之を疑ふ藤原氏の盛大を極むるや崇重益加はり供奉頗る厚し徳川氏の時尚寺祿

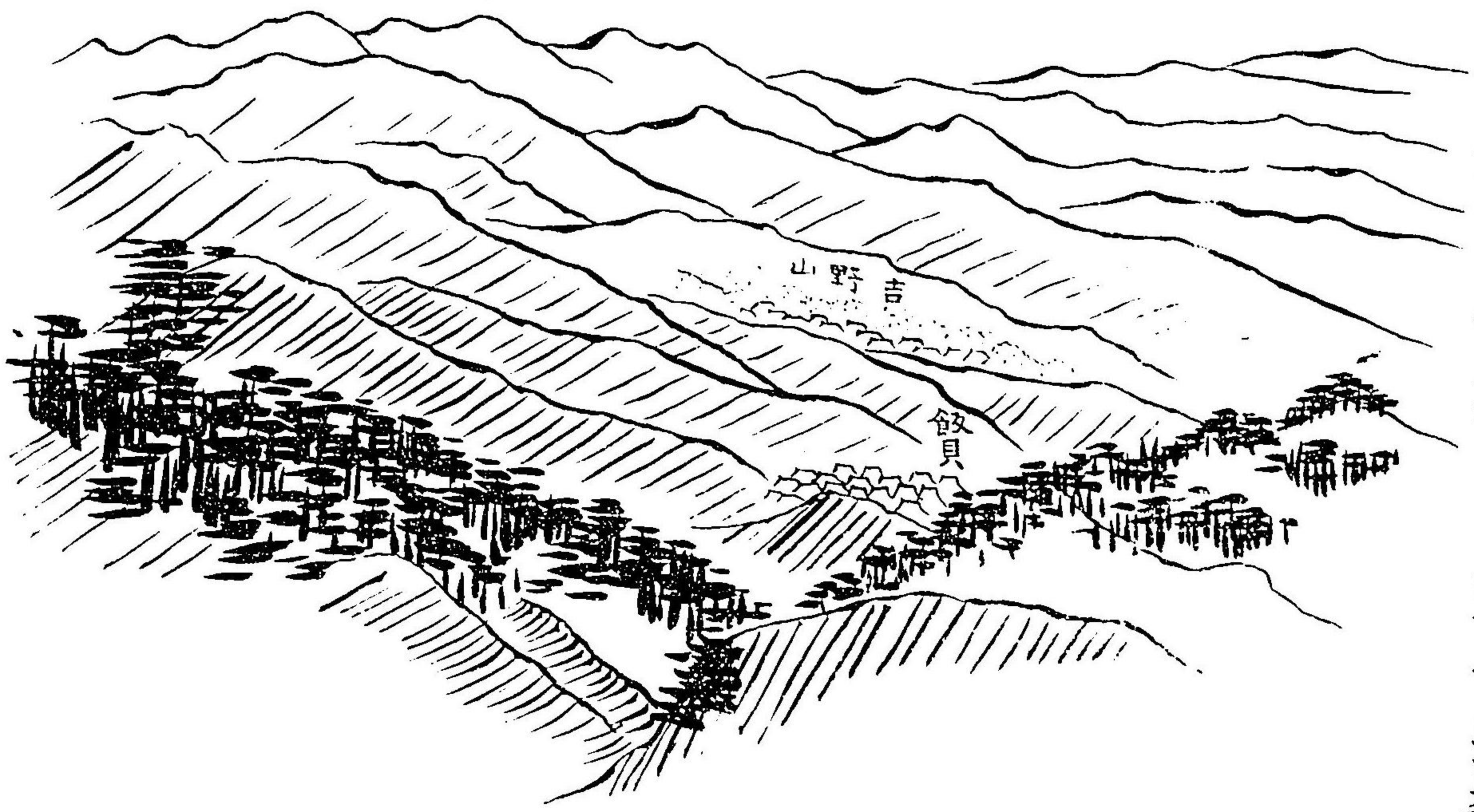
三千石あり祠廟は嘉永二年重修したり大塔は古時の遺構十三重あり特別建造物とす

四月十五日、晴

早起談山神社へ賽す本社は南面して山腹に在り東方の山脚より大橋あり次て東門と多武峯小學校とあり一小溝に架せる橋を渡りて二の鳥居あり北面して數十階の石段を登る右側に紅葉洞あり若し夫れ秋氣清き時杖を此地に曳かんか錦繡地に満ち紅葉窟を埋めて路無らんとす鎌足公の偉業や金碧の廟廊と共、此光景を映發して眞個、關西の日光たり磴道登り盡せば樓門あり神殿竝に立つ西一丁ふ十三重の古塔あり近時の改築よかる其他秘殿給社等小社殿五六神社を廻る境内よりは遠距離の眺望全く不可、西して坂路を上る事數丁吉野口西門あり「來て見ればこゝも櫻の嶺つゝ吉野初瀬の花の中やど(飛鳥井雅章)此日未だ櫻雲のたなびくを見ず蓋し吉野より後るゝものか旅裝整ふや直ちに吉野より西門を出で、杉檜天に參て春日黒き處を東するよと約半里吉野郡龍在村「雲井の茶屋」に至る此地や吉野道上市へ出づる峠の梢下りたる處にして前面は東より大峯山の連嶺波濤の如く幾重の翠巒々々又峻々を窮極する處を知らず眼下三里を距て、銀糸一條の南北に隠現するものは是れ吉野川なり豆人寸馬の往來する小徑を越えて一群の人家を臨む、の正、御具村と知らる飯具の上邊萬葉の櫻雲横はるもの言はずして知る芳山南朝の遺趾なるを、羊腸たる坂路を下る約二里半上市村に達す途上圓顯

黒衣の一群に遇ふ蓋し芳山を訪はんとするもの墨染の衣の身にも陽春の櫻の花は忘られじとにや青入道の吉野詣でいさよか、ば少しは趣味も有るべきに心を讀まば大俗の凡夫の遊山悲しむべし上市は吉野川の北岸にあり飯貝と水を隔て、相望む戸數三百小水驛なり上流吉野川上の森林地を控へ山間にありて頗る繁盛の小市街なり吉野川や水量多く碧湍深淵決して山間の小流にあらず蓋し上流有名ある吉野森林あり凡そ森林内空氣の温度は常々外野より低きを以て假令水蒸氣の質量同一あるも尙外野より濕潤なるの理なり况んや葉面の蒸發作用は常々多量の濕分を供給して止まず從來の經驗によれば林内は外野より對比濕度の多き事全年の平均に由るも尙百分の三より多きは百分の十に至れるを知る豈亦多濕ならずや故に若し暖濕なる空氣森林に向て吹來るときは林内の寒冷なる空氣に逢ひ忽ち其温度低減し飽和點に近からしめ其空氣已に飽和點に近づきたるものは忽ち飽和點に達し雨滴となりて下降し易し是れ森林は雨量を増加する所以なり雨量の増加や水量の多々なる所以森林業なるかな森林業なるかな吉野に於ける杉林の收益は百世年の伐期として利率を五朱に計算すれば一町歩に對して六千五百四十六圓余の純益あり(望月林學士の調査)生産力亦歐洲に勝り之を四十五年に伐採すれば一ヘクタール(一町廿五歩)に付六百六立方メートル(乃チ千九百七十六尺)の材積を得年々平均一四、六六立方メートルを生長するの割合なるに至つては豈亦夥多ならずや必竟氣候の溫暖と濕氣の多量とは這般の結果を來したるもの林業經營や今や急

吉野郡龍在村雲井茶屋より南方飯貝吉野ヲ臨ム
 雲井茶屋ハ多武峯ヨリ南方ニ下ル半里程ノ地ニアリ





吉野郡龍在村雲井茶屋より南方飯見吉野山麓
雲井茶屋ハ多武峯ヨリ南方ニ下ル半里程ノ地ニアリ

墨衣の一群に遇ふ蓋し芳山を訪はんとするもの墨染の衣の身にも陽春の櫻の花は靡ら
れじとてや宵入遊の吉野詣でり番よか、ば少しは趣味も有るべきに心を願まへ大俗の
凡夫の遊山悲しむべし上市は吉野川の北岸にあり飯見と水を隔て、相望む戸數三百小
水驛なり上流吉野川上の森林地を控へ山間にありて頗る繁盛の小市街なり吉野川や水
量多く碧濤深淵決して山間の小流よあらず蓋し上流有名なる吉野森林あり凡そ森林内
空氣の温度は常々外野より低きを以て假令水蒸氣の質量同一あるも尙外野より濕潤な
るの理なり况んや葉面の蒸發作用は常々多量の濕分を供給して止まず從來の經驗によ
れば林内は外野より對比湿度の多き事全年の平均に由るも尙百分の三より多きは百分
の十に至れるを知る豈亦多濕ならずや故に若し暖濕なる空氣森林に向て吹來るときは
林内の寒冷なる空氣に逢ひ忽ち其温度低減し飽和點に近からしめ其空氣已に飽和點
に近づきたるものは忽ち飽和點を達し雨滴となりて下降し易し是れ森林は雨量を増加
する所以なり雨量の増加や降雪の多々なる所以森林業なるかな森林業なるかな吉野に
於ける杉林の收益は百世年の伏期として利率を五朱に計算すれば一町多し對して六千
五百圓十六圓余の純益あり(望月林學士の調査)生産力亦歐州に勝り之を四十五年に伐
採すれば一ヘクタール(一町廿五歩)に付六百六拾立方メートル(乃チ千九百七十六尺)の
材積を得年々平均一四、六六立方メートルを生長するの割合なるに至つては豈亦多
らやや必竟氣候の溫暖と濕氣の多量とは道般の結果を來したるもの林業經營やや

吉野山

二六

務中の急務なりと云ふべし。吉野川上流に巨万の富を積むものあり、悉く林業より來るもの貧富や慣習や氣質や風俗や皆因て來る處あり、觀察者の種類は千差万別なれど漫遊の要茲にあり、若し夫れ漫遊と法學の如き一見其因縁の深からざるが如きも、大和吉野郡に於て立木一代限の約を以て山地を賃借する習慣の如き法學者にして是を聞かば、民法解釋上の參考とする敢て利なしと云可からず、旅行必ずしも詩歌を弄するのみならず、經國の要務は蓋し地方の内情に明かなるにあり、上市より櫻の渡を經て吉野村、大字、飯貝に出づ、日本書記云ふ神武天皇の東征せらるゝや、吉野に至るとき、人あり井中より出づ而して光あり、天皇問ふて曰く、汝何人ぞ對て曰く、國神井光と即ち吉野首部始祖にて此地其遺趾たり、拾遺丁として芳山御舟山麓「七曲」下千本は足下にあり。

吉野山

北は吉野川を界し、南大塚山に連なり、一帯の小丘南々東より北々西々連亘、東方塔の尾山と一小溪を隔て、西亦六摺驛に注ぐ一小流を隔て、他の連嶺に對す、長さ約二里の小丘上は即ち吉野の勝區なり、吉野道三ヶ所あり、「梅の渡」「柳の渡」「櫻の渡」是なり、柳の渡は大坂及奈良地方より六田に至る所にあり、柳の名所とす、六田の渡より一の坂に登る是を吉野の本道とす、これより一丁毎に石標をたて、其道程を知らしむ、吉野宮迄拾四丁、天王堂迄三十余町なり、神武天皇東征のとき、此山に入リ給ひ、應神天皇、雄略天皇、聖武天皇、天武天皇、持統天皇、文武天皇、元正天皇、各臨幸あり、帝郡山城に遷り

玉ひて後も此山は朝野文人騷客の羨望する處たりしは古今集以下勅選歌集に四百首に垂んとするの多きを見て知らるべし源平の時代義經暫く茲に忍び南北朝に至りて所謂南朝の中心となり後醍醐帝は遂に此地に崩御まし〜けり

落花滿地雪の崩るゝ如きとき遠近の人々の群り至るや言ふも更なり春盡て蜂戀獨り哀禽を友とするのとき深夜よ起て獨行し月を踏で山陵を拜するもの亦無からずやは只に花ありての吉野のみならんや興廢三朝一夢の中是れ正懐古の好資料也吉野や山勢敢て奇抜なるふあらず峻嶺の嵯峨たるものあるふあらず平易なる小丘温和なる溪流櫻花の満開や敢て碧流に映する隅田川畔の光景あるにあらざる展望の快憫なるものあるにあらざる而かも吉野や天下幾万の士女をして低徊去る能はさらしむものあるに何ぞや觀客の半ばは只何となく賑としき爲訪ひ來るものなり其殘部の半數は觀客の如何なるやを觀ん爲訪ふものなり残り四分の一として初めて吉野を訪はざる可からざるを慮識するものなるべし此種の者は店頭に敢て微醉を買ふもの、みにあらざるなり櫻雲千里を見ては詩腸をしぼる文人のみふあらざるなり古今の史乘に参照して今まのあたりの落花の繽紛たるを見る人界の優美は萬葉の櫻雲と競ひ史上の壯美は遺址の古色と其感興を戰はす、想へ「落花の繽紛たるのとき源朝を想ふて靜女羽衣を舞ひ」在朝五十七南風競はす萬樹春深かして復香しからぬ處小楠獨り血涙をよるふて如意輪堂のほとりに立つ時「夕陽殘紅」決して潜龍空しく劍を按するの刹那「錦旗影かすかに微驅思ふ

ふ足らず、藏王堂邊香雲の内、忠魂の消へ行く様、自然の美を極盡し、人工の美を極盡し、靈界の美を極盡し、萬古に冠絶したる芳名を刻むもの、是や吉野の忘るべからざる所以、若し夫れ單に花のみを見んか小金井向ふ島亦競ひ難きよあらざ下千本櫻は多武峯より來るもの、入口にあたる七曲を登りて大橋に至る擬室珠に慶長九年十一月豊臣秀頼再修の趣銘刻せり次で黒門即ち總門あり是より市店兩側、連なりて其數四百余と云ふ銅の鳥居は町の中あり聖武の御宇建立高二丈五尺柱周一丈一尺額面「發心門」と題し弘法大師の筆なり進むこと少時仁王門あり藏王堂あり天平年間行基の創立金剛藏王權現及役行者の遺像を安す(明治卅七年迄千七百七十二年)元弘三年兵火あかり延元年中再建更ニ貞和五年兵火あかり康正元年再建天正廿年大修理を加ふ(明治卅七年迄四百五十年今特別保護建造物となる本尊二丈六尺堂は南面十八間四面高十一丈二尺柱の内に神代杉あり長三丈一尺周一丈三尺躰木といふあり長三丈一尺周一丈八尺余四本櫻堂前にあり元弘三年閏二月一日大塔宮最後の御酒宴場なり四本櫻の南側に南門趾あり村上義光戦死の場とす是より南へ行くと事敷丁東に向て別に一小丘の突起するあり是を吉水院(現今吉水神社)後醍醐天皇の行宮たりし處南朝五十七年間の帝都たり文治年間義經も亦茲に籠る文錄三年豊臣秀吉公觀花の時の旅館たり今は昔の殿を其儘に神社とす當時の玉坐跡亦残り同所より源義經腹巻一領延元帝の祈文一通を保存す並に國寶と列す再び舊道にかへりて山口神社袖振山(天武帝行幸のとき神女降りて舞ひきと云は此山)

の邊に出づ村上義隆の墓は茲より西南方拾數丁賀名生道にあり丘側を東南に進めば一の大壑を隔て、塔の尾山後醍醐帝陵のある處に至る山腹に登る數丁重ねて櫻雲萬樹の中に入る中千本是なり恰かも満開の期に際す多幸此上やある如意輪堂小楠公誓塚碑茲にあり「有名なるかへらじと」の扉は取外して寶物陳列所内より鏃の痕跡細けれど讀下するに堪ゆ余は何故か落涙數行禁ずる能はざりき時恰かも一行脚の壯漢あり僧服をまどふ自ら曰信州人なり一茶亭頭微醉を帯びて朋々吟し出す小楠公の一曲聲調敢て佳妙らざるも余や瞑目多事感慨無量、後醍醐帝の塔尾陵は石階數段の上より兆域周圍百廿五間余下に世泰親王の墓ありこは後龜山第一の御子なり

月はいざ花の吉野の櫻山世に得ぬ春の獨りなりけり

吉野山々にし昔のしのばれて花の露よぞ袖ぬらしけり

史の跡よ思ひいりてはなかくは花ちるもうしみ吉野の山

小休憩の後更よ山口神社にかへり竹林院を訪ふ曰藏上人(三好清行の弟)の住せし處庭園は細川幽齋の好み明治廿三年の春皇后陛下御登山御一泊の舊跡なり登る事數丁水神社あり延喜制大社と列す慶長十九年豊臣秀吉再建特別保護建造物たり其道側に横川覺範首塚佐藤忠信戦死場あり此東邊を上千本といふ是より南方山勢稍急峻青根峯を経て大峯に至ると云ふ余は是より引返して順路下千本に出で舊藥師堂趾に村上義光墓を訪ひ官幣大社吉野宮(明治廿二年創立後醍醐帝を祭る)に賽し長峯數丁を下る時に病兵

の轉地療養として人車數十輛を連れ来るよ會す古今人情安ぞ異ならん此人々にして此地に入らば感慨夫れ幾何ぞ一の坂を下りて六田柳の渡に出で腕車を走らして吉野口停車場(葛驛)(行程四里)に達せしは正に午後六時半なりき午後七時半高野口に向ふて發車五條橋本等を経て午後九時〇二分高野口(名倉驛)停車場前葛城館に投宿す(汽車行程約十六哩)

吉野懷古二首

梁川 星巖

今來古往事茫茫、石馬無聲杯土荒、春入櫻花滿山白、南朝天子御魂香。

不知何處古行宮、飄警春空羅綺風、今日誰爲奉陵者、夕陽僧掃落花紅。

此にても雲井の櫻をきにけりた、かりうめの宿と思ふに 延元帝御製

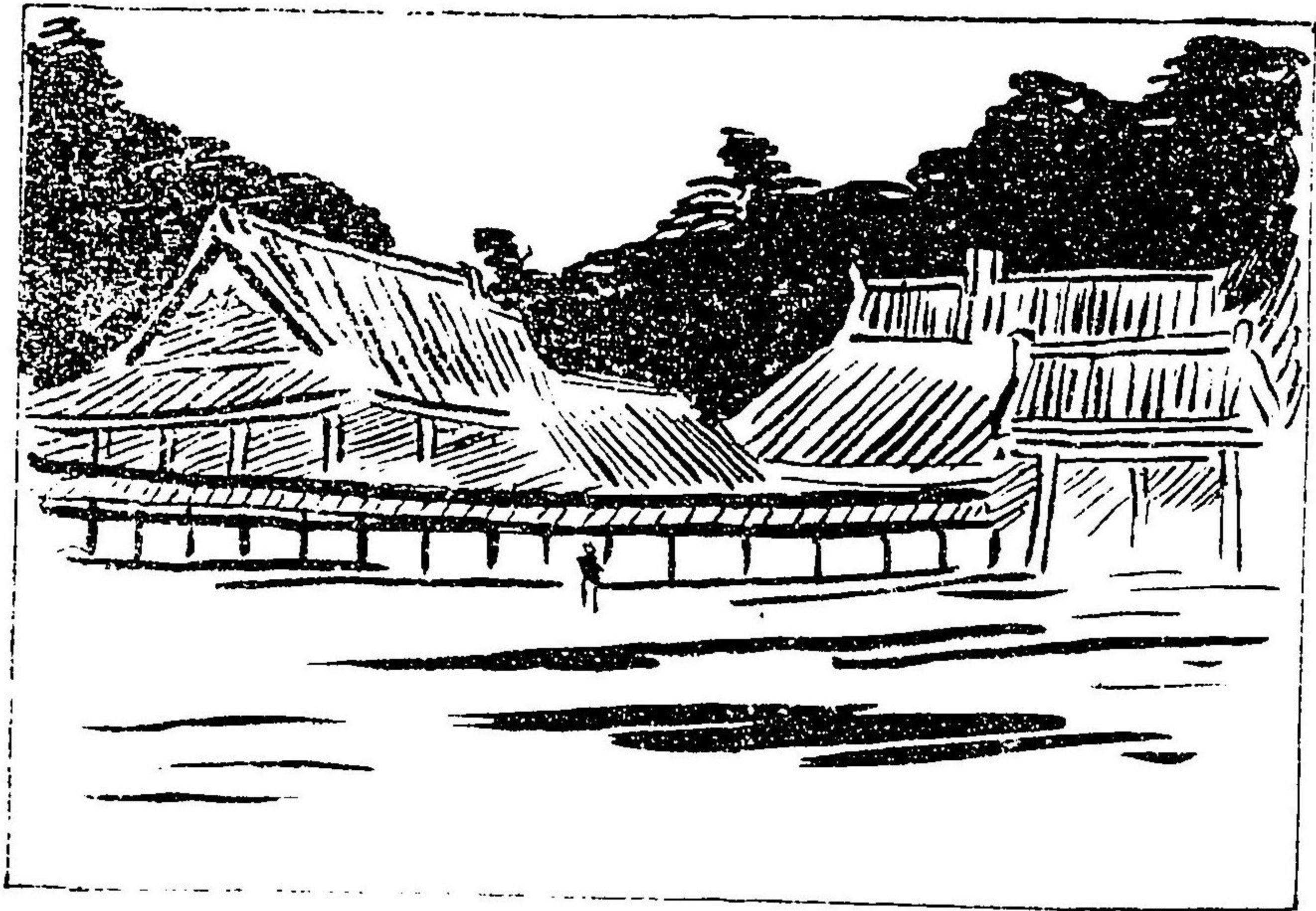
みやこだにさびしかりしを雲われぬ吉野の奥のさみたれの空 全 上

四月十六日、曇

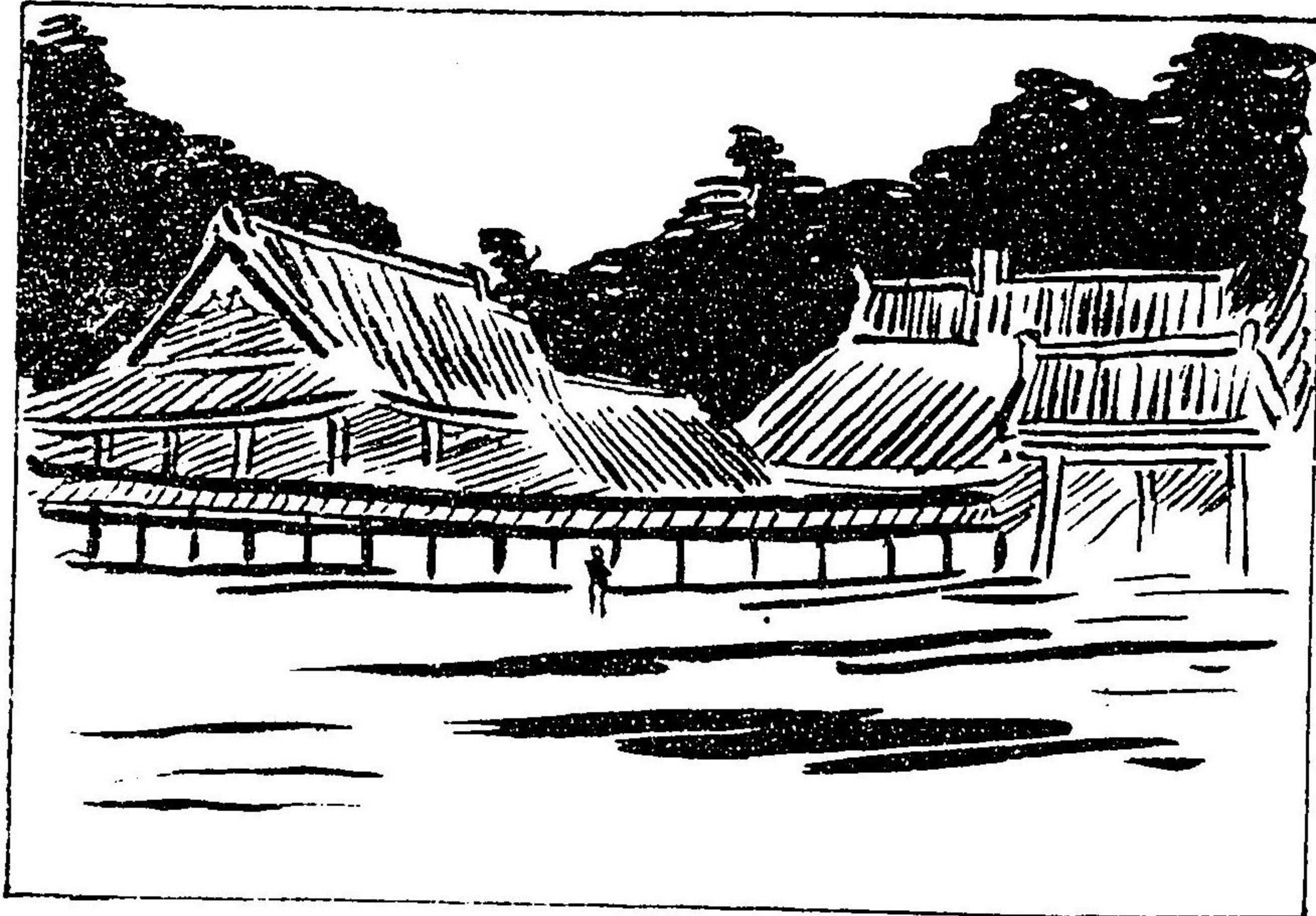
前夜來高野詣での旅客數組投宿して雑沓を極む内よ東京辨男女混合の一組あり夜の十時頃より宴を張り多辨饒舌能く舞ひ能く歌ふわたり携はず器々喧騒を極むる其意氣天を衝くの勢あり此元氣にて高野見物をなす其佛徳や如何就中女子二三人有髯男子を驚倒せしむるの酒量あるもの、如し斯くて翌期午前三時に至る爲よ熟睡するを得ず頗る困却す東京辨は即ち東京人なるが如く東京人としては其公徳心は皆無なるかの憾あり午前八時出發紀伊川を渡り九度山回を経て道漸く險五歩に一憩す歩よ一休行程約一里

右方に高野山より引出す扁柏、杉、金松等の材木運搬の爲輕便鉄道の敷設せらるゝを見
 る羊腸たる山路崔嵬たる道程老弱男女織るが如し山中にあるの思をなさず約二里にし
 て神谷村に至る山間の一小驛なり多く旅舎のみ水田數頃を見る花屋は一憩して更に登
 ること半里「極樂橋」に達す事實は是より眞の地嶽なるが如き其名稱とは相反せり是れ
 余の俗腸險易の外に樂地を見出さるゝに因るか是より不動坂四十八曲を登り不動坂や
 敢て長からざるも崎嶇嶮峻余輩山地に生活するものも猶且避易逡巡する處漸くにして
 清の不動に至る不動坂の頂上よりありて二間四面の堂なり更み進む五町にして岩不動あり
 り袈沙掛櫻稚子が瀧花折坂等を過き舊女人堂に達す高野街道數路あり此道程を最短距
 離となす行程約三里なり女人堂は明治五年三月迄女人の入るを禁せしより周圍の入
 口毎に皆此堂を設け傍らに菴室を結び參詣の女人を宿泊せしめたり近世之を取こぼち
 しも此堂のみ残り女人堂前に丈六の銅像露坐せり更み二丁を進めば參詣人取調所あり
 一山各寺院より役員詰め居り案内して所縁坊につきしむ余は由來何坊に附屬すべき
 かを知る程の信心家にあらざりしも前夜宿泊の旅舎より蓮華定院とやらへ特別の案内
 状を持たせ來りたれば入口左側の今院に入りて一休息を請ひぬ一山の内建築最も壯麗
 なるもの一なりと云ふ赤漆塗の梯子段金唐紙に花毛龍薩摩の茶器に名も知らぬ珍味
 の菓子海氣の坐布圍滑かに四十恰好の下働き一女子もあらざりと十四五才の小僧とは
 慇懃余を遇する有様余を何と見て斯くやはする、如何に自惚るゝも華族の片端と見

蓮 華 定 院



蓮華定院



右方に高野山より引出す扁柏、杉、金松等の材木運搬の爲輕便鉄道の敷設せらるゝを見
る羊腸たる山路崖鬼たる道程老弱男女織るが如し山中にあるの思をなす約二里にし
て神谷村に至る山間の一小驛なり多く旅舎のみ水田數頃を見る花屋は一憩して更に登
ること半里「極樂橋」に達す事實は是より眞の地獄なるが如き其名稱とは相反せり是れ
余の俗屢險易の外に樂地を見出さるゝに因るか是より不動坂四十八曲を登り不動坂や
敢て長からざるも崎嶇嶮曉余輩山地に生活するものも猶且避易途巡する處漸くにして
清の不動に至る不動坂の頂上よりありて二間四面の堂なり更ふ進む五町にして岩不動
り袈紗掛櫻稚子が瀧花折坂等を過ぎて舊女人堂に達す高野街道數路あり此道程を最短距
離となす行程約三里なり女人堂は明治五年三月迄女人の入るを禁せしより周圍の入
口毎に皆此堂を設け傍らに菴室を結び參詣の女人を宿泊せしめたり近世之を取こぼら
しも此堂のみ幾れも女人堂前に丈六の銅像露坐せり更ふ二丁を進めば參詣人取調所
り一山各寺院より役員詰め居り案内して所縁坊につきしむ余は由來何坊に附屬すべき
かを知る程の信心家にあらざりしも前夜宿泊の旅舎より蓮華定院とやらへ特別の案内
状を持たせ來りたれば入口左側の今院に入りて一休息を請ひぬ一山の内庭築最も壯麗
なるものなりと云ふ赤漆塗の梯子段金唐紙に花毛氈薩摩の茶器に名も知らぬ珍味
の菓子海氣の坐布圍滑かに四十恰好の下働き一女子もあらずと十四五才の小僧と見
據ると余を遇する有様余を何と見て斯くやはする、如何に自惚るゝも華族の片鱗と見

ゆる、管、なし、容、貞、亦、左、程、に、品、位、あり、とは、思、は、す、要、は、矢、張、懷、中、の、相、談、余、の、肥、滿、せ、る、体、格、は、
は、し、な、く、囊、中、の、ハ、ロ、メ、ト、ル、の、温、度、高、き、を、豫、想、し、所、謂、紳、士、か、豪、商、の、部、類、に、属、す、る、一、假、令、
も、然、る、目、な、き、も、少、な、く、と、も、其、系、統、に、属、す、る、雜、兵、の、一、人、と、誤、認、せ、ら、れ、し、結、果、な、ら、ん、か、茲、
の、高、野、山、長、居、は、無、益、と、徐、々、牽、制、策、を、講、せ、ん、と、せ、る、程、も、な、く、忽、ち、並、ぶ、山、上、の、珍、味、一、山、海、
の、珍、味、に、あ、ら、ず、一、不、思、空、腹、の、爲、め、平、げ、終、り、た、る、ぞ、是、非、な、け、れ、

高野山

山上宛然大市街を成せども其大多數は寺院にして現存寺院の住職あるもの百三十四家を數ふべし然も是堂々たる一寺院にして單獨に是を見るも優に普通の寺院以上なりとす山内堂塔の重要なものを列舉せんか

不動堂、一心院谷ふあり特別保護建造物とす本尊不動明王佛師蓮慶の作なり此堂の構造四隅異様なり傳へ言ふ工匠四人隨意に造り合せし故なりと

波切不動尊、五室谷の南院にあり大師唐土の惠果和尚より傳へたるものと云へり

荊萱堂、筑前荊萱莊加藤左衛門尉重氏の事蹟のある所

五輪堂、駿河大納言忠長公墓當境内第一として高さ二丈八尺基石一丈五尺四面凡そ八邊形玉垣は十間四方なり

弘法大師廟、壇上より三拾七丁の東にあり幽邃寂莫の靈地なり承和二年三月廿一日寅刻中院において結跏趺座して入定す五十日を経て弟子六人輿を昇て

此所遷す此月廿五日仁明天皇勅使を賜ひ嵯峨太上天皇使を以て賻及弔書を賜ふ

聯合大學、壇場の裏横本中院谷にあり古義真言宗唯一の大學林なり

東塔、(天保年間焼失)、三味堂、大會堂、(大法會の時一山の大衆此堂に會す)愛染堂、

金堂、壇場の中央にあり拾四間四面二層の樓殿楓材銅瓦を用ふ弘仁八年創建本尊の建立
藥師如來金色坐像大師の自作あり創建後焼失五回今在る所は万延元年九月

西塔、四面七間高九丈真然僧正創建、文化二年再建す

六角經藏 六角六面二層の輪塔なり後鳥羽天皇一切經を寄附し此經藏を建立し給ふ天保の大火に累焼し明治十七年再建輪轉の構造とす

初め高野は天野祝の祭れる丹生神の領知にして高野社ありしを空海之に就きて開拓し修禪場となせるなり寺域六十七万余坪真海内の巨刹たり女人堂より東南に向ふて一心院谷に至れば茲に波切不動、東照宮、金輪塔、心字池あり東すれば一五の室谷あり内は光嚴院あり豊臣秀次の墓ある所南して「六時鐘」の鐘樓に至るや東は金剛峯寺あり内に秀次自殺の間あり西すれば大會堂愛染堂大塔跡金堂等あり此邊を壇上といふ其他小字を西院谷、南谷、千手院谷、小田原、蓮花谷等に別ち寺院此間を點綴す蓮花谷の東に一小流あり「一の橋」を架す是より奥の院に至る道の左側より中の橋御廟橋に至る迄柳川仙臺宇和島を初めとして日本の三百諸侯悉く巨大の石塔を立て追善報恩の爲

御廟橋



此所遷す此月廿五日仁明天皇勅使を賜ひ嵯峨太上天皇使を以て購及甲書を賜ふ

聯合大學、壇場の裏横本中院谷にあり古義真言宗唯一の大學林なり

東塔、(天保年間焼失)、三味堂、大會堂、(大法會の時一山の大衆此堂に會す)愛染堂、

金堂、壇場の中央にあり拾四間四面二層の樓殿椽材銅瓦を用ふ弘仁八年創建本尊の建立

西塔、四面七間高九丈真然僧正創建、文化二年再建す

六角經藏、六角六面二層の輪塔なり後鳥羽天皇一切經を寄附し此經藏を建立し給ふ天保の大火に累焼し明治十七年再建輪轉の構造とす

初め高野は天野祝祭祭れる丹生神の領知にして高野社ありしを空海之に就きて開拓し修禪場となせるなり寺域六十七万余坪真一海内の巨刹たり女人堂より東南に向ふて

一心院谷に至れば茲に波切不動、東照宮、金輪塔、心字池あり東すれば一五の室谷あり

内は光嚴院あり豊臣秀次の墓ある所南して「六時鐘」の鐘樓に至るや東は金剛峯寺あり

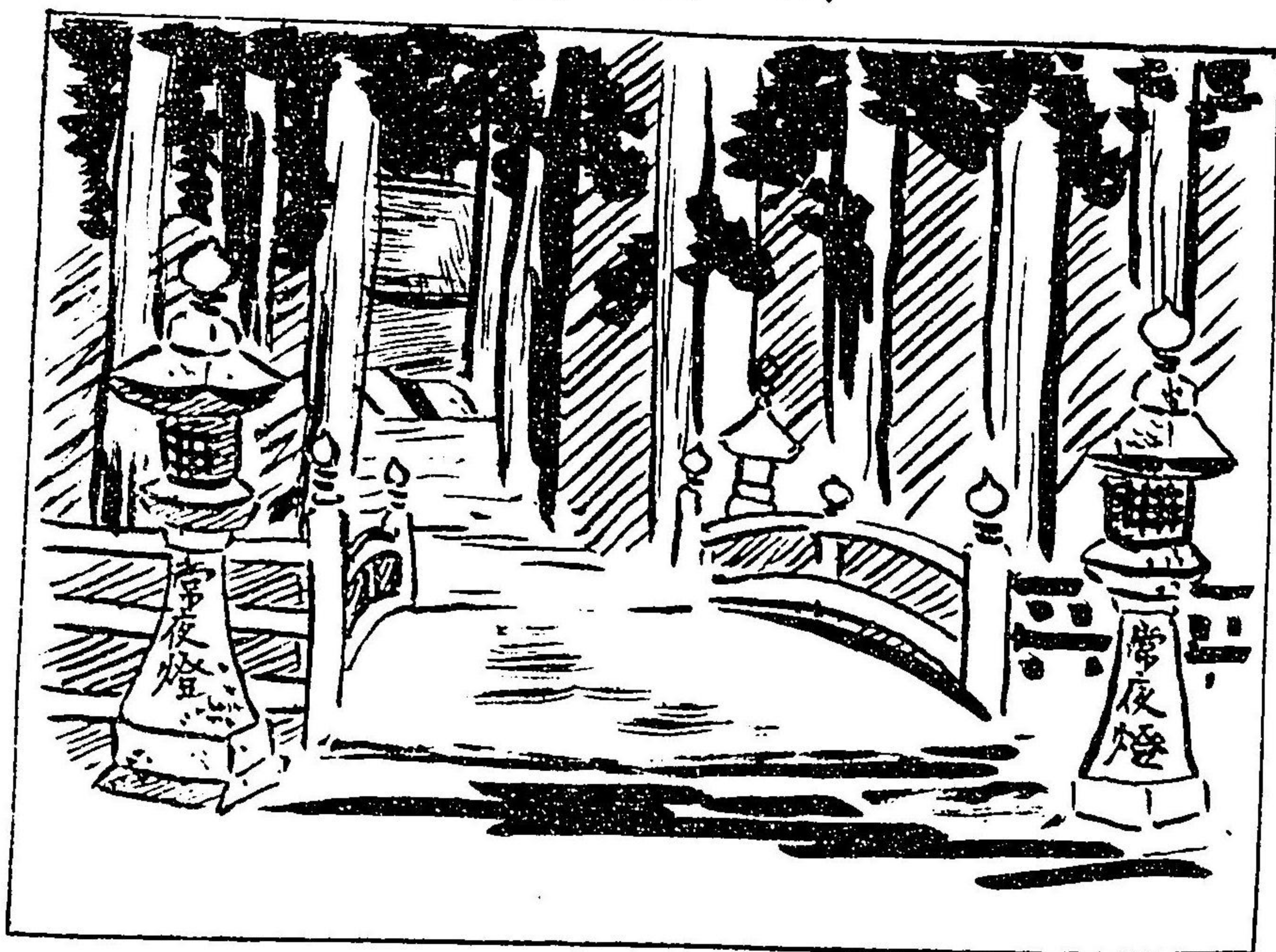
内に秀次自殺の間あり西すれば大會堂愛染堂大塔跡金堂等あり此邊を壇上といふ其他

小字を西院谷、南谷、千手院谷、小田原、蓮花谷等に別ち寺院此間を點綴す蓮花谷の

東に「小流あり」一の橋を架す是より奥の院に至る道の左側より中の橋御廟橋に至る

迄初川仙臺宇和島を初めとして日本の三百諸侯悉く巨大の石塔を立て追善報恩の爲に

橋 廟 御



建碑するもの蓋し境内の一偉觀たり其間十八丁の間とす奥の院は燈籠堂、御廟、骨堂
一切經藏等あり各寺院に藏する室物類に至りては積りて山をなすといふ余が宿せる蓮華
定院に豐臣秀吉畫像(眞田昌幸筆)十一面觀音畫像(兆殿司筆)あり南院の波切不動(弘
法筆)光臺院の額面(白河天皇宸筆)三社説宣(後陽成帝宸筆)普門院の勤操僧正肖像(弘
法筆)普賢院の不動明王(智證大師筆等)一々屈指に暇あらざ蓋し眞偽の鑑別容易なら
ずと雖も又史料の見るべきもの多々、嗚呼是れ一個の空海の遺跡なり六尺の体軀少
りと雖も教會偉人の勢力亦大なるかな今や各寺院徒らに旅人を宿泊せしむる旅館と一
般大師の高風を繼ぐもの、有無を知らずと雖も慥かよ一の靈境たるを失はず想ふ心界
の開拓や今日學術の攻究に待つを得べし豈特に寺院あるものを要せんや然も世人皆哲
學者たる能はず悉く自力によりて宇宙の神秘を開くを得ず人間何時の世か宗教なる
んいつの世か偉人の崇拜なからん學者の研究と經世家の具解と差ある處この世にあり
後五時天正に雨ふらんとす下山の困難を思ひて匆々歸途よつき神谷に至り花屋に一泊
す

四月十七日、雨

早起空を眺むれば暗晴將よ大雨來らんす即ち結束して急速山を下る午前八時卅一分の
列車に乗込を得たり雨漸く來りて四願涼々車中伏見より來れる婦人連の遊覽者一組あ
り奥様風ありたかみさん式あり姫君系より首すじの白き人黒き人手先のやはらかなる

人指ふしの高き人千差萬別玉石混淆階級を分たず吉野高野より和歌山大坂を経て平民的修學旅行をなすもの内某といへる好漢一人あり是を一群の世話役をなす其するに正に伴隨院長兵衛の如し談話頓智口を利いて出す時の移るを知らず世は只貯ふるのみを知て散するを知らざるものあり軍國多事の此間にありて此余裕あり京坂人や前途多望なるかな和歌山に至る頃細雨濛々遠近を分たす市中の見物を後ふして先づ腕車を飛びして

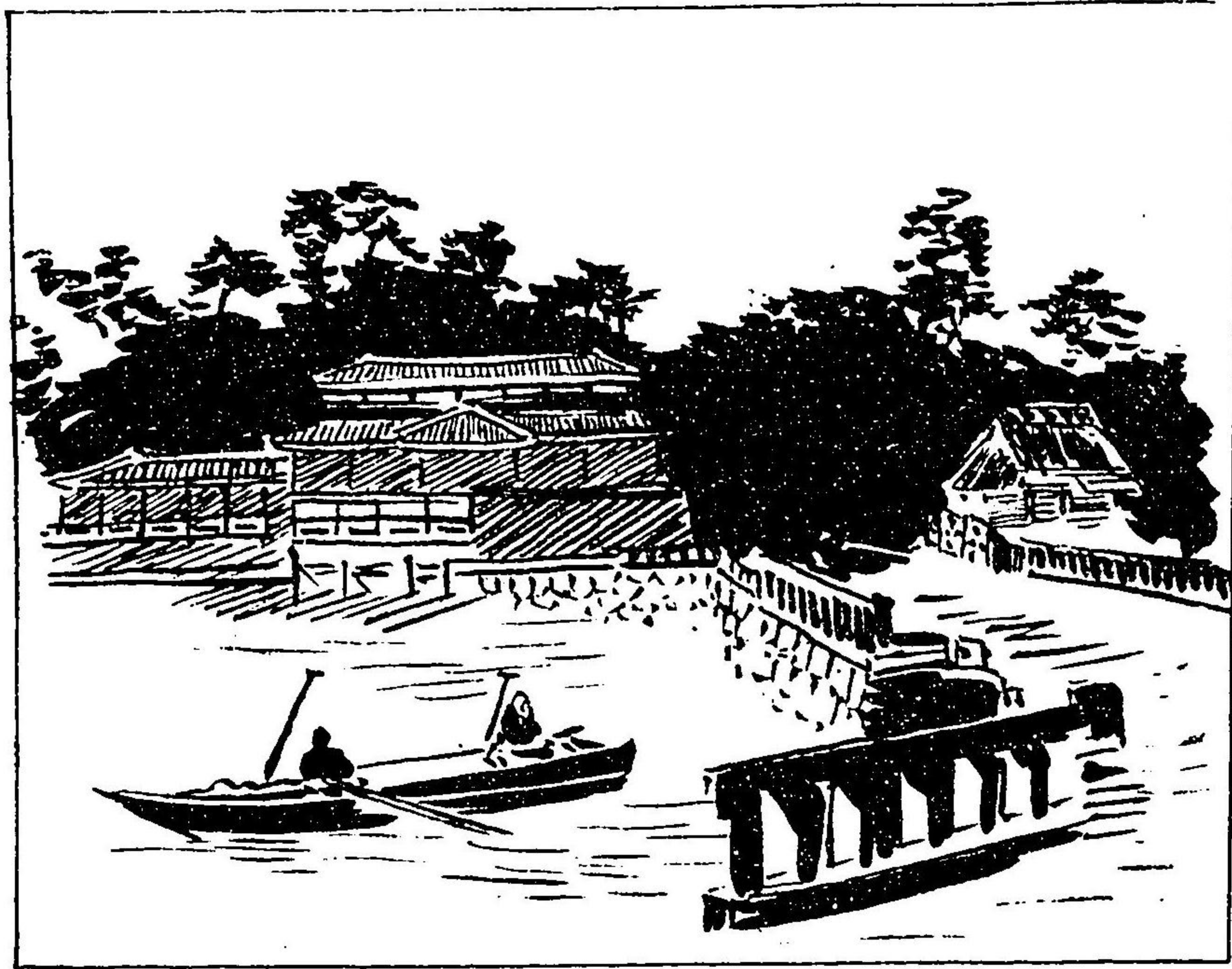
紀三井寺

和歌浦東岸名草山の西端ふあり金剛寶寺護國院と号す石燈二百余級を躋りて山門に達す本堂、十一間四面二層塔開山堂大師堂觀音堂等あり本尊十一面觀音木造立像以下三軀國寶と列す寶龜八年唐僧爲光の開山とす
に詣ず細雨霏々たる天のとばりは漸く開いて明光浦一帯岸中に映し來る春の汐しゆかにてかすみに遠き和歌の松原瞬一瞬み灰色は黒色は黒色は綠色に變し來るの光景は紀三井寺よりして先づ旅客の感謝を償するを認識せしむ、時正に正午に近きも空腹のまゝ飽まで此風光を賞味しやがて鹽田のはどりを縫ふて和歌浦旅舎葺邊屋に投宿す

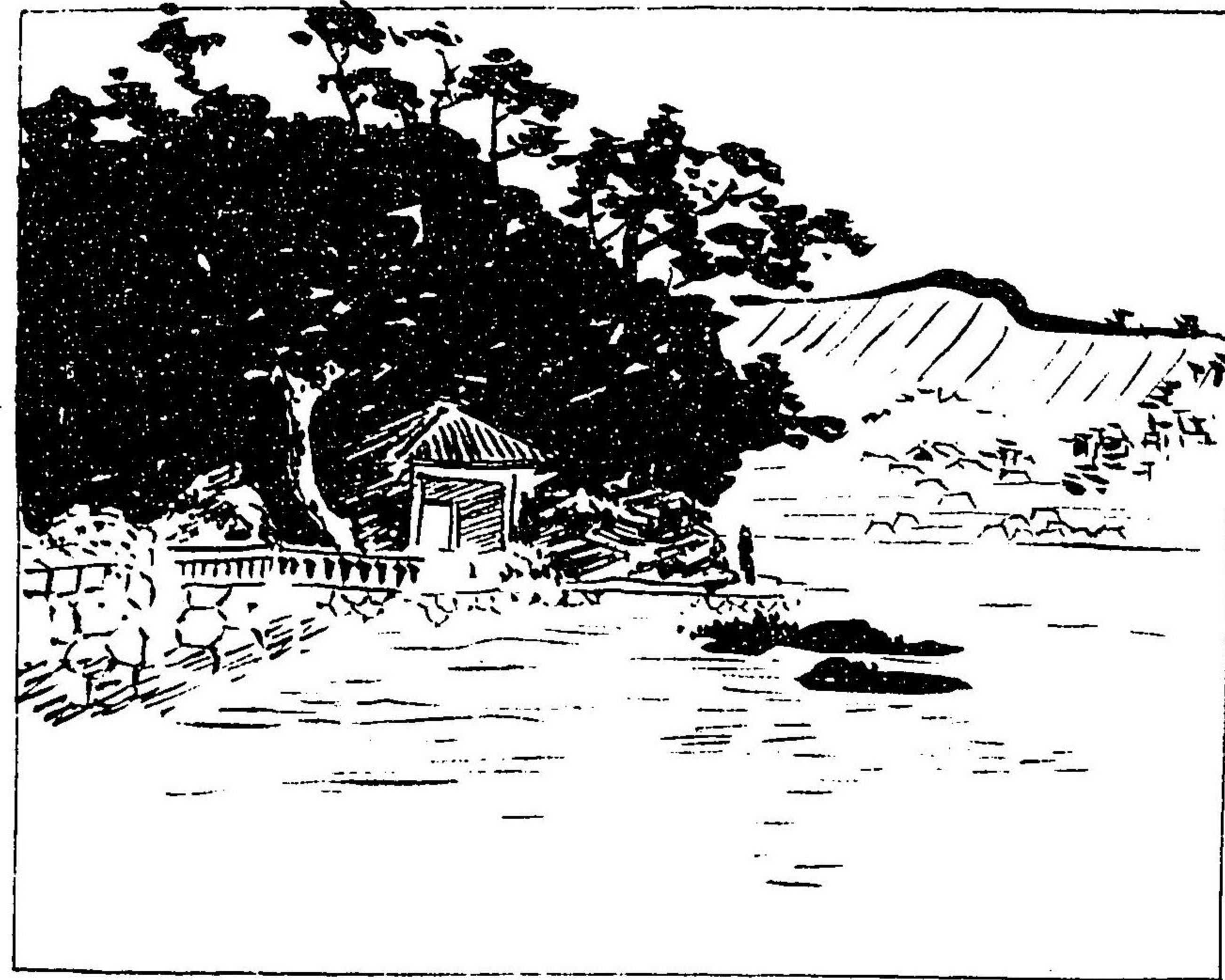
和歌浦

雜賀崎より毛見崎まで和歌村三井村の紅海を云ふ一に明光浦に作る和歌村の南方は沙嘴あり南に延伸する二十町出島あり保松原等と其地形を同じくす蓋

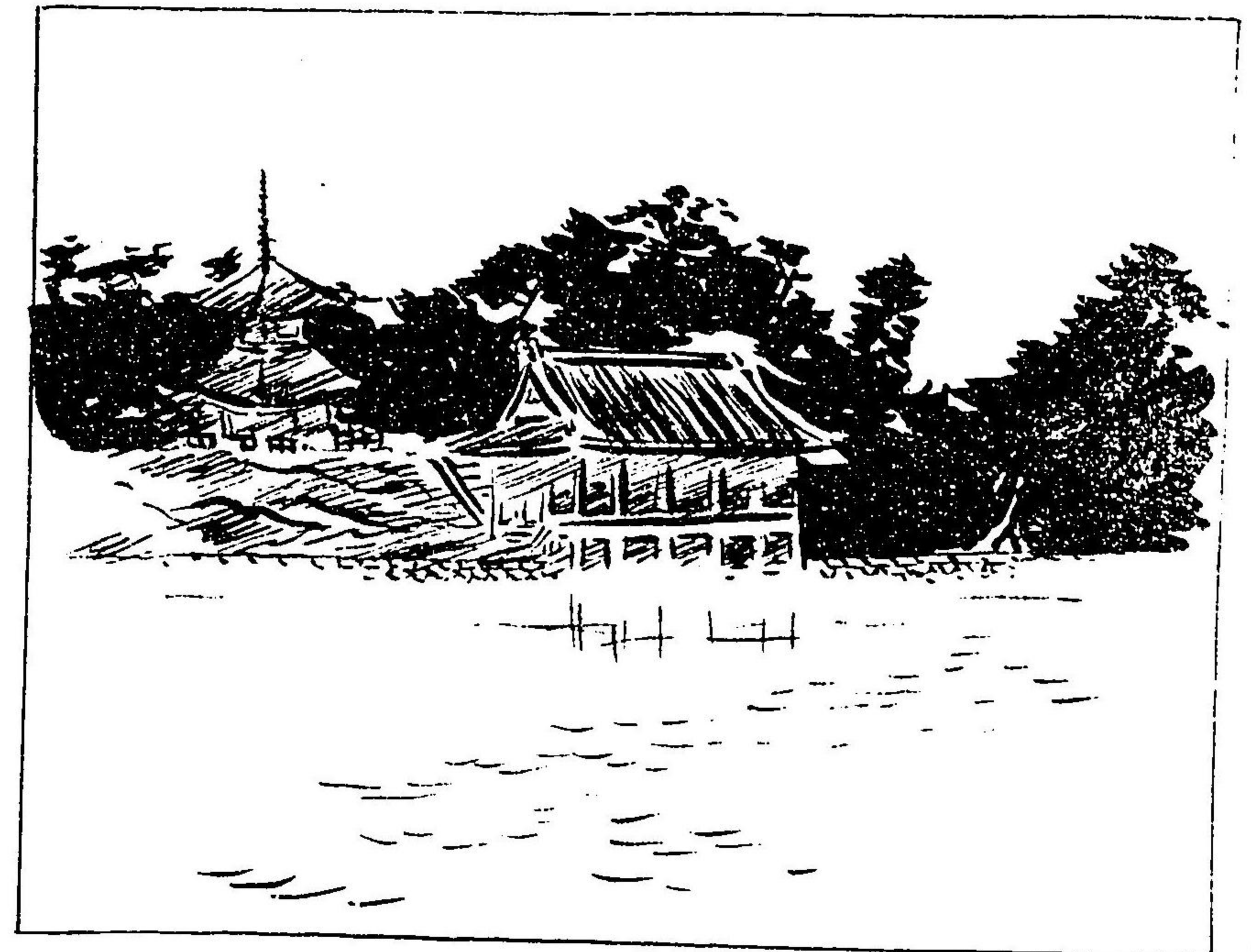
屋邊芦



妹脊山三井寺望



和歌の浦観海樓



所謂橋立なるものは内流外海と共に一道の砂濱を煽ぎ出したるもの駿河の田子の浦
に一の橋立式あり同一の源因より成る洲の東は小紅海をなす紀の川の分流和歌川
是にそく

我が宿所なる芦邊屋は不老橋の西より徳川頼宣公時代より茶亭の御用を蒙りしと稱
す不老橋を渡りて妹背山の麓に全家の別荘あり潮湯を設けて旅客の便に供す一浴して
單衣のまゝ觀海樓のほとりに出れば海風徐るよたもとを拂ひて清涼云べからず老松枝
榎、海に臨む間より東方遙かに紀三井寺を望む潮水銀波金波をもみくだき玄鷗一聲
蘆荻岸裡を飛過し去る何等の好景ぞ、樓姿塔影の間孤帆一片靜中動を配するの妙あり
あかぬ光景を賞する多時更ふ歸宿して三層樓上飽迄眺望を専らふす午後四時例の伏見
の一行余の宿所に投す數丁以前よりにはか音ごの聲高くごよめさ渡りて入來り三層樓
上獨占の客間は二層樓上五十よ垂んとする多數客の雜沓の爲言語も通せずなりたれを
あたら惜しき眺望の好位置を辭して別室に左遷の恩命を蒙りたり夕食後更ふ玉津島神
社鹽釜神社現權社等を遊覽し午後十時寢所に入れり

四月十八日、曇、

午前八時和歌浦出發郵便局に立寄り小荷物一個を郷里に送附す磯馴風すがすがしい
並木原を通りて行程一里和歌山市に達す瞻上れば三層の天主閣巍然として翠松の間よ
簗ゆ四ち城内本丸のある所なり先づ城趾を訪ふて天守樓上より和歌山全市の大勢を瞰

下し當時陳列中なる戰利品及び市内有力者の出品ふかゝる寶物を見る城の位置たる市の中央特起の岡阜上に立ち北の方紀伊川を望み雜賀川(紀の川支流明光浦に注ぐ)の水を引きて城壕となし初秋の頃紅白の蓮妍を闘はし風景頗佳壘壁高く形勢雄大なり四面の曲輪は八重垣をなし岡山南に連なりて老松蒼鬱たり縣廳市役所は北麓西汀町にあり中學校師範學校其南にあり公園地亦城内の西南にあり

和歌山市

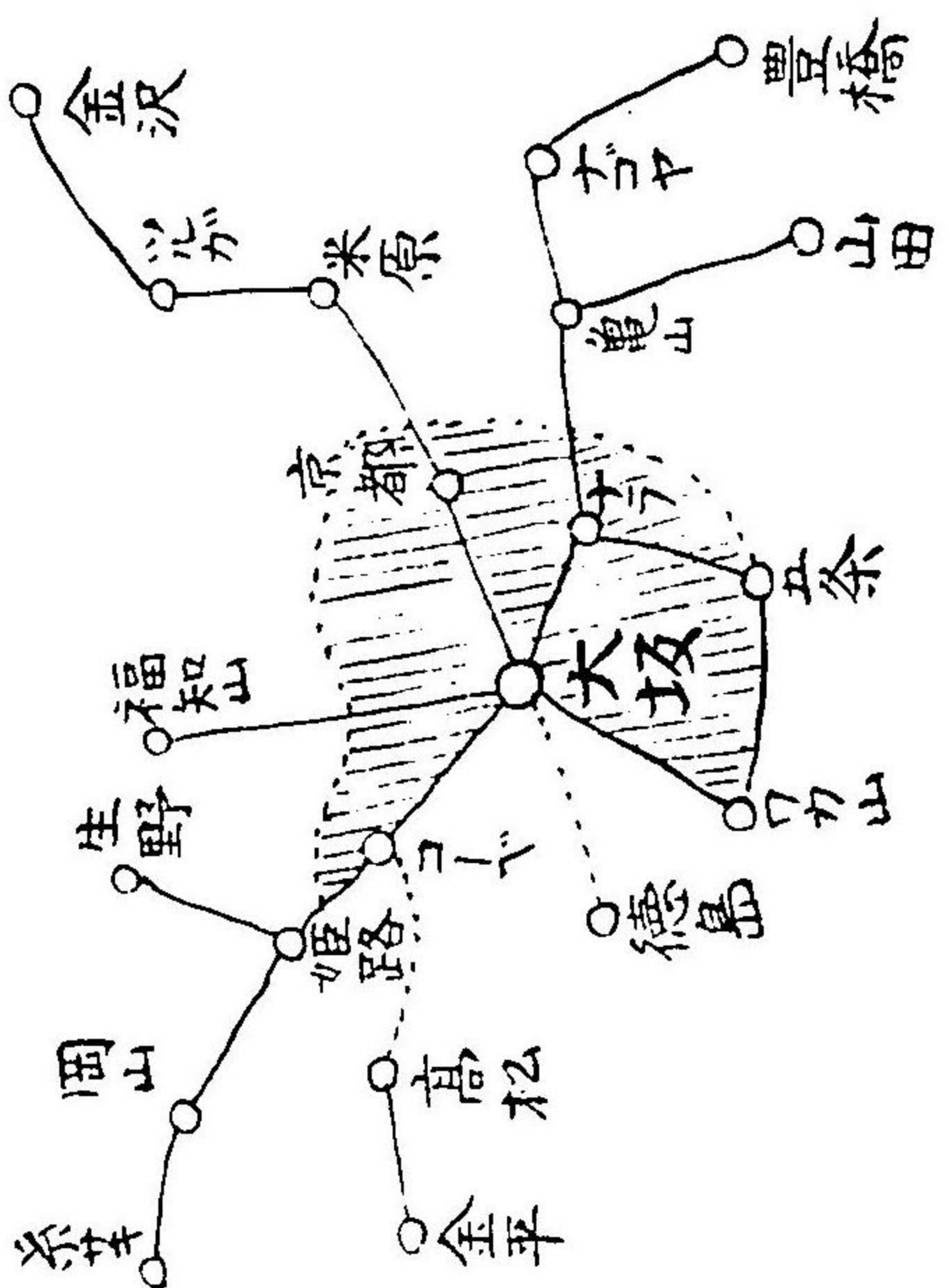
東西廿町南北廿八丁人口六万四千餘明治廿年頃には僅かに五万六千を數へたり以て其膨脹力の大ききを見るべし大坂を去る十七里商工業頗盛大夙に紋羽織の製造盛なりしが市人瀬戸十助氏綿フランネルを發明してより今は其製織甚だ盛大となる漆器製造亦盛なり奈良漬砂糖類亦名産とす古の雄の水門吹上濱の地にして天正十三年秀吉本州を平定し秀長に封す其將桑山修理亮吹上の岡に築く慶長五年東西軍起るや修理亮東軍に應ず戰後淺野幸長入部(封四十万石)幸長大に城中を築き面目一新す二十餘年を経て淺野氏安藝に移り徳川常陸介頼宣入部(封五十五万五千石)即紀州大納言南龍公是なり大坂城の監視役一朝事あるときその後役頗重要な城市たり和歌山市の東北を宇治と云ふ其西を鷲森と曰ふ鷲森別院あり雜賀孫市の教如上人を奉して陣場隔をあしたる處今大駒と稱して之を傳ふ石山合殿後の別業地たり和歌山港は紀伊川口にあり良好の錨地と稱すべからず此市附近には紀三井寺の南坂路を隔て、有名なる

黒江塗の漆器を出し和歌山市と共に百三十万圓に垂んとする産額あり按するに天正十三年根來寺の廢滅するや僧徒四方に解散す其髹漆に工なるもの此地に來て起業せしを初とすと云ふ本縣下の漆器はあまり貴重品の製造なく輪島會津と共に上中下日用飲食器を製すること大なり上等飲食器は勿論東京、金澤、能代、名古屋、黒江の順序なり本縣産は所謂濫地物にして今其製造者につきて其製法をきくに漆器の漆地は通常木質にて樟、桐、枹等を主とし稀に竹網代又は紙の壓搾したる物を用ゆ用材は能く乾燥したるものを宜しとし昔時は切て三年板に挽きて三年枯して用ひたりと云ふ下地は四種あり漆地濫地膠地糊地として前二者を堅地とす堅地は一刻(一)二木固め(三)引込(四)布着せ、五堅地六切り子七地堅め八踏(九)墨引(十)中塗(十一)中塗磨(十二)等(十三)順序手敷を終りて后本漆を掛るなり粗製品に至りては刻(一)草をなし第二の木固めをなし其上に通常の半紙を貼り下地を掛るなり下地は膠と地の粉と墨とを混して塗り其上に澁を引くと云ふ本塗は蠟色は全色漆赤色は朱漆青色は青漆を塗り其上に磨き漆を掛け角粉にて指頭を以て磨き其上に磨漆を掛るなり

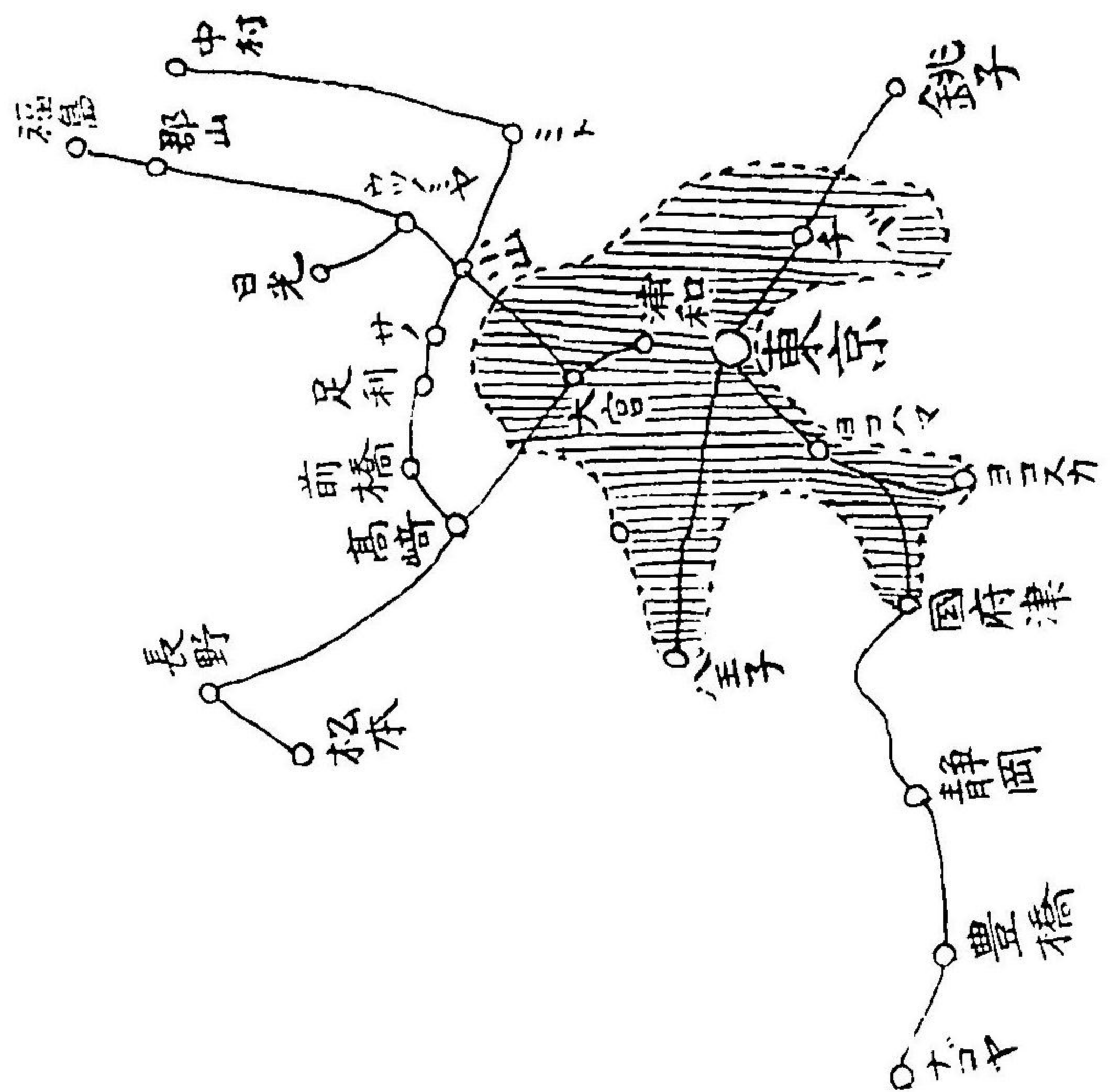
和歌山市や氣候順適寒暖の差甚しからず最生活によるし紀南風物真奇絶到此唯疑天地別、十月牽牛猶有花八旬老媪不知雪(廣瀬旭莊)とは真に此國の實狀なるべし市中を徘徊し終りて十一時和歌山市停車場に至る南海鉄道にて大阪に至らんとするなり驛員頗る叮嚀懇切他の會社と異なり發車二十分前より種々の注意を與へ其動作言語頗る乘客

を懇待す蓋し營業の眞面目なるもの午後十二時十六分發大坂より向ふ途上岸和田より岡部子爵の大々的經營たる朝鮮の移住策を思ひ不圖夢は飛て韓山の前程より落つ忽ちよして濱寺公園ふ着雑沓の聲に驚き腥れは同地捕虜收容所のうはさ取りくなり濱寺や面積反別四十六町餘岸には數千の老松蔚然として林をなし濱は一面の眞砂にて細漣常より汀を洗ふ西方遙かに淡路島薄墨の畫の如く北より須磨一の谷の連峯を見る風色絶佳宛然一幅の大パノラマなり昔大雄寺といへる古刹ありし故の地名とどほごなく堺の曾遊地に至る鳥兔匆々早くも三年の以前とありぬ内國博覽會の大坂より開かるや此地水族館の所在地たり困難なる雨中を凌ぎて市中を徘徊したるもはや過よし夢のあと午後二時五十分分早くも瀛車は難波に着しぬ和歌山より約四十哩なりとす

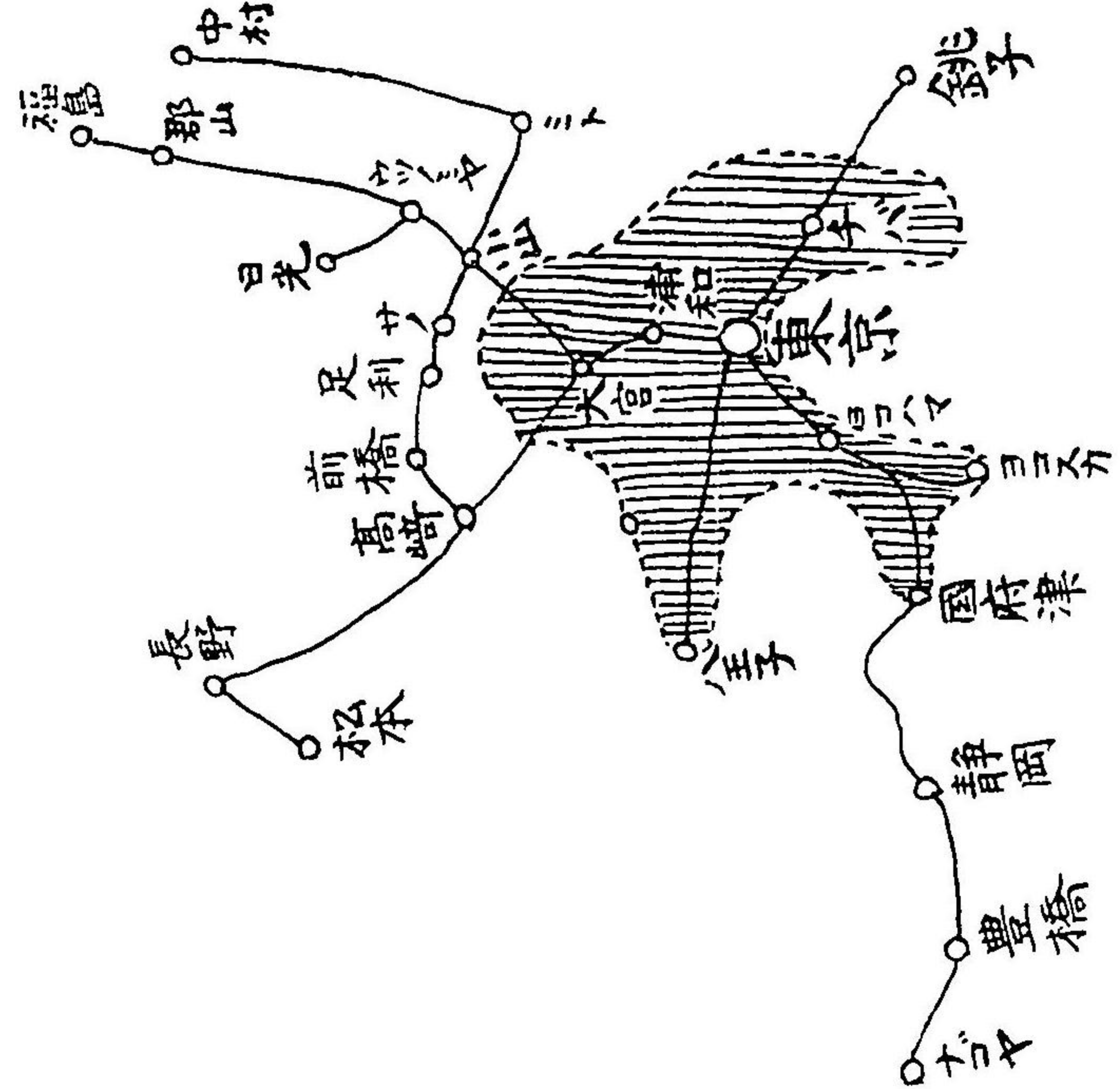
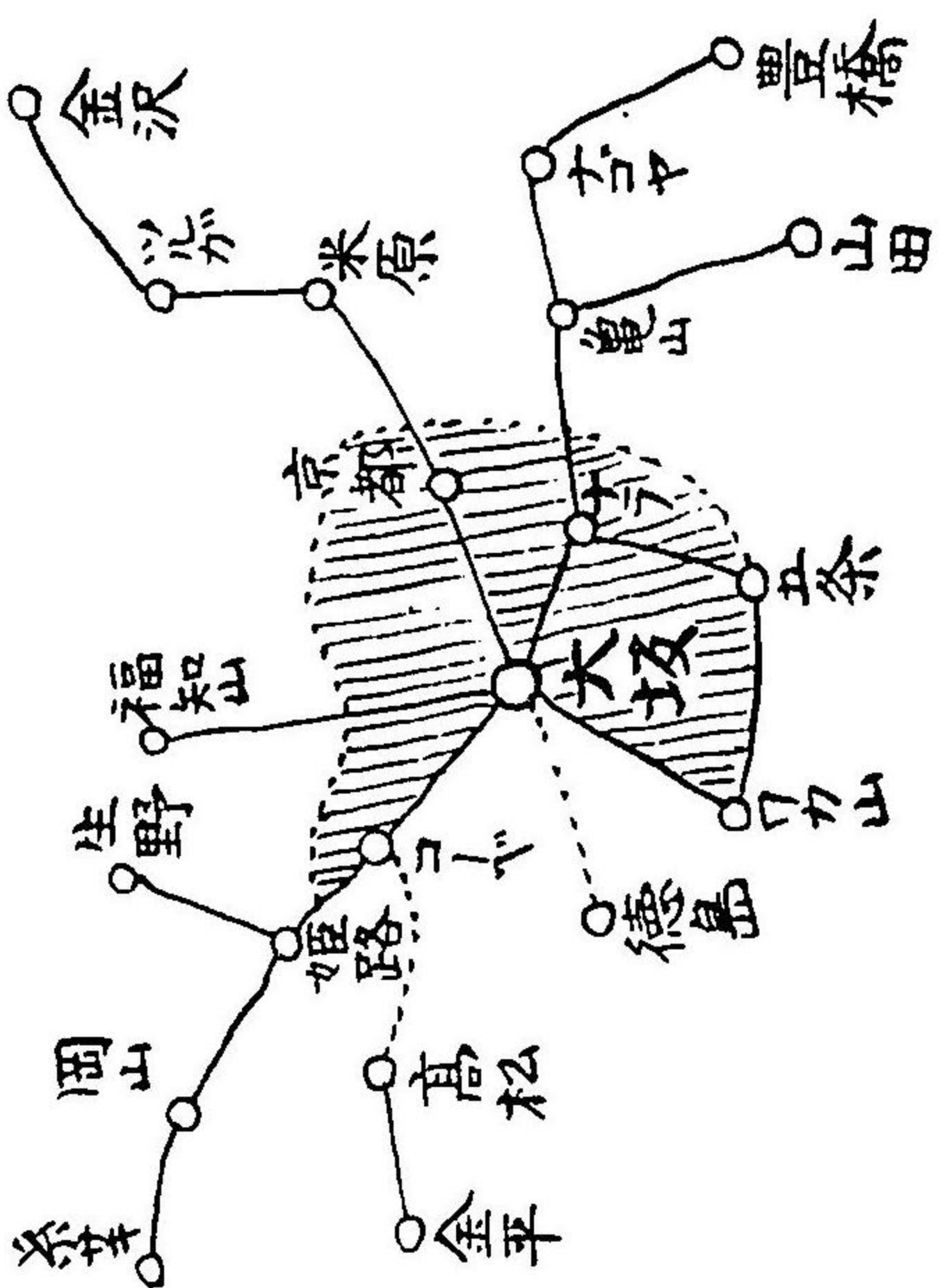
大坂につきて記さんとするには事余り大なり宜しく特別大坂論を試むべし只余の西遊の目的を關係する事のみを記さんか大坂が富を以て日本の西方大中心点の位置を占むるは人の知るところ然も大坂が南日本の主府として其任務を果すには如何なる方向に發展すべきか想ふよ日本の文化の發達や西南より起りて東北に延び遂に北海道の拓殖となる東京や横濱が東方諸國を卒ひて大平洋に對するが如く大坂神戸は西南を卒ひて滿韓支那の大陸に對す明治廿七八年の日清戰役や日本國勢の中心点を東京より大坂に引致するの趨勢を示せり明治卅一年の北清事變や再び日本文化の大勢をして東北に向はしめずして西南に逆戻りせしめたり試みに神戸横濱人口の多少貿易の多寡を比



41



を期待す蓋し營業の眞面目なるもの午後十二時十六分發大坂より向ふ途上岸和田より岡部
 子爵の大々的經營たる朝鮮の移住策を思ひ不圖夢は飛て韓山の前程より落つ忽ちよして
 瀧寺公園に着難香の聲に驚き醒れは同地捕請收容所のうはさ取りくはなり瀧寺や面積
 反別四十六町餘岸には數千の老松蔚然として林をなし濱は一面の眞砂にて細漣常より汀
 を洗ふ西方遙かに淡路島海壘の畫の如く北より須磨一の谷の連峯を見る風色絶佳宛然一
 幅の大パノラマなり昔大雄寺といへる古刹ありし故の地名とをほどなく堺の會遊地に
 至る鳥兔勿々早くも三年の以前とありぬ内國博覽會の大坂より開かるや此地水族館の所
 在地たり困難なる雨中を凌ぎて市中を徘徊したるもはや過よし夢のおと午後二時五十
 三分早くも流車は難波に着し和歌山より約四十哩なりとす
 大坂につきて記さんとするには事余り大なり宜しく特別大坂論を試むべし只余の
 西遊の目的を關係する事のみを記さんか大坂が富を以て日本の西方大中心点の位置を
 占むるは人の知るところ然も大坂が南日本の主府として其任務を果すには如何なる方
 向に發展すべきか想ふよ日本の文化の發達や西南より起りて東北に延び遂に北海道の
 拓殖となる東京や横濱が東方諸國を率ひて大平洋を對するが如く大坂神戸は西南を率
 ひて濠洲支那の大陸を對す明治廿七八年の日清戰役や日本國勢の中心点を東京より大
 坂へ引致するの趨勢を示せし明治廿一年の北清事變や再び日本文化の大勢をして東北
 に向はしめずして西南に伸展せしめたり試みに神戸横濱入口の多少貿易の多寡を比



較するものは必ずや此形勢を觀破するを得ん而して日魯戰役や三度日本を西南的ならしめたり日本の富は西南に散し日本の事業や西南に興り日本の中心や再び西南へ移動せんとす昔時大開滿韓支那に意あり先づ大坂に城きて天下の機を見たるもの豈今日の形勢と類せずや異日大阪遷都論の勃興せすとも限られず今や交通頗る便、十里二十里の距離は大なる市街の一部と見る可なり都京奈良大阪神戸等の如き其交通の便利よりすれば是を一地方廳の支配下に合轄するも敢て難きにあらずるを見る試みよ大阪東京二中心点より二時間以内で達する小中心点と十時間以内で達する小中心点とを比較せんか其中心点が何れの大中心点に附屬して其影響を受けつゝあるかを見るを得ん時間の遅速は文明發展の遅速なり日本の將來は滿韓地方支那地方と交通の頻繁なる層一層なると共に大阪が南日本の中心点としてのみならず恐らくは日本の中心点として活動するの期あらざるか大阪の築港事業の規模の廣大なるは優に大中心の港灣たるに足る東京や如何に横濱や如何に僅かに一ミニソクタ號の入港に狼狽するの設備よして將た滿韓清に對する自然の地位上の優劣よりして能く大阪を對抗するの準備あるや如何事實は議論より雄辯なりとせば請ふ現實の形勢につきて知るべし人は言ふ大阪は東洋のマンチニエスタールなりと只マンチニエスタールたるのみならずや亦ロンドンたりパリールたるを得ん

東京を洋服すがたのハイクラスの書生と見立つれば大阪と地味な懐中の温るき商人なり

とすべし東京にて洋服高帽八字髭虚勢を驅つて宿につけ、其待遇や懇篤を極むし其懐中の冷却し居る事只に氷点以下なるを問はざるなり大阪は然らず洋服のはのさく所にあらざる虚勢の成印する處にあらざる其旅客が果して如何の系統に屬し如何なる知己朋友の照會あるやを知悉せざらんか如何に空室あるも先づ投宿謝絶の憂なきに陥らず是れ余が前年來遊の際實驗せし所なりとす炭煙八百八街をこめて紅塵黒埃盛なる處を経て先づ築港の現況を見更に踵を轉して直ちに梅田に向ふ大阪神戸間電車の連絡あり鉄道と共に坂神間の交通も便なり目下の現況を聞くに一日の平均收入千六百四十二圓通行税百卅七圓を差引千五百五圓なりと云ふ前途頗る多望なるかな余は汽車にて午後七時出發神戸に向ふ此間へ何となく心せはしき感ありしは但しは場所柄の然らしむるにや午後八時神戸着停車場前吉田屋に投ず

神戸市

人口二十一万市内廣袤東西一里南北一里十八丁横濱以上繁盛なる互市場たり慶應三年開市港口南に面し深き満潮のとき八匁余生田川は東界たりしも近時益々發達して生田川の東「中尾」「筒井」に接して熊内通旗塚通等數町を増加す西は湊川を以て境界としたれ共是亦湊山の南西避病院の東北「石井橋」より西々南々通路を變し遠く兵庫の西部新湊川に落さしむ舊兵庫は舊湊川より新湊島北方運河の入口までよて此運河

は北ふ通して鉄道線路に至り更西入口よりして東に出で兵庫港正面新川の運河に通す鉄道は神戸の東より同市中央を貫通して縣廳の東南に三の宮停車場あり更に西して神戸停車場湊川神社の南ふあり一部の鐵路海岸を通す是より兵庫を通して同市北西部監獄分署の北ふ山陽鐵道會社あり柳原停車場即ち兵庫停車場なり市内の重なる場所としては東部生田川の上流山麓に有名なる布引温泉布引瀧あり雄瀧北にあり高十五丈幅十三尺雌瀧南にありて高七丈三尺幅二間三の宮停車場の東北四五町に生田神社あり官幣小社祭神稚日女尊、神功皇后の凱旋せらるゝや務古の水門に泊して創建せられしもの即是、社后の森を生田森と稱し壽永年間源平の古戰場として彼の梶原景季の籠ふ梅が枝を挿みて血戦せし處古の生田川は其東隣を流れしもの今埋立て宅地とす諏訪山公園之山本通にある一丘にして訪諏明神あり老樹森々たり地甚だ高からざるも神戸の西北にありて眺望遠大なり山中炭酸泉あり源浴ふ供す湊川神社は湊川の東北五町多聞通福通の間にあり別格官幣社なり水戸黄門光國修史の志あり儒臣をして海内を採訪せまむる所あり楠氏墓所の荒廢を慨して碑石を立つ高さ十尺自筆「嗚呼忠臣楠氏之墓」と題し碑陰明徴士朱之瑜の贊辭あり本港の外國貿易額が昨年長大足の進歩をなし即明治廿五年以降三十七年迄十二年間輸出入價格に於て五倍強噸量に於て三倍強入港船舶に於て噸數二倍の増加を呈せしは注意すべき現象なりとす加之積返品回漕品等本港輸入品よらざるも取扱上一旦

税關波止塲は陸揚して税關統計に上らざるもの亦甚だ尠からず此數量二十七年中一十八萬四千九百十五噸あり又石油火藥の如き波止塲を経由せずして港外一定の貯蔵所は直接運搬せしむるもの石炭れ如き其需用地に轉送し港内は陸揚せざるものもあれば是等を控除したるもの石炭れ如き其需用地に轉送し港内は陸揚せざるものも八十三噸一日平均六千七百七十七噸餘の巨額に上る殊に近年の膨脹速度は益激甚となり卅五年以降三箇年に於て一躍五十萬噸を増加し三十七年の如き其戰時なるに拘らず反て空前の盛況を呈し前年に比し實に三十萬噸以上の増加を示す之を以て向後三四年の貿易額を推測せば三百萬噸以上に及ばん事少も疑を容れず本港の將來や知るべきなり

神戸港や如今正に繁榮の寵兒幸運日に汝に幸ひするものあれ共讎て是を慶應三年開港當時の形勢を見よ兵庫開港なるもの如何に日本重要の大問題たりしかを幕府の外交日に切迫して新將軍家慶喜公は此新舊文明の一大過渡に處せざる可からず時よ英公使にパークス氏あり鹿兒島砲擊馬關攻襲以來薩長の士人と交を通し天下の大勢を洞察して幕府の到底與に語るに足らざるを看破し日本をして開明の域に進ましめて英國の爲る貿易交通の利益を謀らんには薩長が友として朝廷維新を助くるに若かずとし幕府よ對する頗る冷是に反して佛公使ロシュー氏は當時那破崙皇帝の東洋政略を心み跡し幕府を助けて内訌を鎮定せしむるは今日の得策なりと機に至る毎に暗を裏に干渉の途を

覓むるに汲々たり英公使は幕府の兵庫開港を約の如く成し能はざる可きを見て是に乗せんとし佛公使は此意を察して幕府若し違約の事あらば忽ち他國の爲に乗せられて幕府衰亡の禍を惹起すべきに由り百難を排しても兵庫開港の決斷あるを如何かざるを説き万一開港の爲に内訌破裂するが如きあらば佛國は飽くまで幕府に聲援を與ふべしと幕閣や天下の形勢を知らず違約の爲に外患を招くが如きは皇國の興廢に關すと茲に修約の背く可からざる開國の己を得ざるを論じて兵庫開港の勅許を奏請するに至り朝廷亦國家の一大事「先朝よ對せられても御沙汰よ及ばれ難き筋に付尙諸藩の見込をも聞召され候間篤と再考可仕」との御沙汰あり將軍家よりは再度の奏請となり諸藩主の上京とあり五月廿五日には「誠よ止を得させられず御差許相成候事」との結果を得るに至りしこそ如何に兵庫開港が難産の兒なりしかを知るを得べけれ、時勢は急轉直下して茲よ今日の隆運を見る眞に隔世の感ありと云ふべし

午前七時旅宿を出で、先づ湊川神社に詣り此地開港前途は一面の田圃にして元祿四年光國公の建設せし一基の碑石僅か古松の下に立ちて忠臣の名残を留むるのみなりしふ今や其碑石は境内にあり社殿巍然方二町餘の社地繞らす練堀を以てす餘は多年此地を夢想し神戸や正に紅塵萬丈の地なるべし黄金万能の地なるべし俗悪なる物質的地なるべし然も其間一の湊川神社あり盛夏左帝金を鎔すの時練瓦石造の家屋物質欲よ汲々たる神戸人も此神社や一点清涼劑を投するの地靈界の高風は俗悪なる下界の汚

濁を去て人間亦神の子たるの感化あるを思ひしなり然り余の湊川神社は理想の湊川神社にして事實の湊川神社たるの感化あるを思ひしなり然り余の湊川神社は理想の湊川神社境のあまりの神化せるを感みたりきわまりに社殿を金碧燦然たらしめあまりの境内を町家風ふしあまりの油こき建築に俗衆を喜ばしむるは余の遺憾とする處なりき神戸人は何故ふ然く興味を索然たるものか余の想像するまゝならしめ庭の樹立の森々として將た亭々として天を摩するものあるを欲せしなり一陣の涼風吹き渡るとしなり清泉ゆるく密林の間をめぐり閑寂の間断碑一片和田岬頭に楠公決戦の昔を讀ましむるの境を欲せしなり楠公の事蹟や事實の楠公には聊か人間たりし裏面の消息なきにあらざるも世人の信する楠公は歲月てふ鎔鑪に投せられて今只美化したる楠公を鑄出したるのみ三田の福翁の物質論は惻惻なる神戸人士を動かして斯くも殺風景なる社境となり終らしめしか楠公は成田不動にあらず金比羅社にあらず日本人理想の權化なりと知らずや眠れる夜より起きて未だ此世の神戸ならぬ朝まだき冥想一過南北朝時代を眼前に髪髻せしむるの余裕なきか、夫れより福原町荒田町を経て北の方石井橋を渡り監獄署の左より夢野に至る此地平清盛が離宮を建てたる趾にして後白河法皇を奉したる半御所跡あり東は湊山より湊川を界として西會下山に至る間自然の一區畫たり東西十町南北六町の間なり今山麓に内裡跡と稱する處あり北は所謂朝越なり夫れより

會下山麓を南より回して西すること拾數町皿池と稱する小池を歴西野に至る此邊稍廣潤吉田東伍氏は此地域を福原の都趾とするもの近時大森學士の説あり蓋安養寺山(湊川神社の北)より夢野の邊と爲すが如し更に淺井氏の論あり兵庫一帯を都趾とし新造内裏を寺山の地とさすが如し暫く疑を存す次で腕車をかつて再び諏訪山公園に至る再度山崎通路の東よりありて神戸市の全景眼下にあり和田岬遠く西南に突出し燈臺及和樂園其岬頭より通ふ千鳥の淡路島山煙波漂渺の内よりあり東は税關防波堤三井棧橋郵船橋を臨み中央港頭を面して川崎造船所あり大艦巨舶輻湊して眞個に關西の大貿易場なり午後二時五分神戸出發岡山に向ふ兵庫鷹取の二驛を歴て須磨より着す下車客多し悉く勝區を訪はんとするもの須磨、塩屋、垂水、舞子此四驛間は所謂水碧沙明幽雅の地、須磨や元來アイヌ語の「白」の義武庫山摩耶山再度山鉄拐峯の連嶺悉く花崗石「みかけ石」の名稱や神戸の東「御影」に出づ一の谷二の谷皆花崗岩致盛の墓石亦然り是れ白沙多き所以海岸一帯翠陰清く波に伏し霞を漕ぎ入る海人の釣舟、遙かに淡墨の島一つ、南にはのみゆる處金波銀灘砂子を洗つて磯馴れ松風膚を吹くのと源九郎義経の武者振りや如何なりしか無官大夫致盛が駒を波間へ追入れて亦立なほす須磨の浦風、源家の白旗平氏の赤旗あなたこなれよ驪る其光景や正に一篇の詩篇、二十餘春夢一空豪華吹散海曠風(皇殿)と一の谷の落城や自然の崇美なる光景は梶原が梅が枝致盛の最後、熊谷の發心、等と互ひ映發して何れか一種の美ならざる余源平の古戰場を臨訪するに悉く風

光明媚の地思はず恍惚として我を忘れずんばあらず此間にありて銚を交ゆ緋威の胃青葉の笛源氏の白旗平家の公達優なり婉なり媚雅なり人間安ぞ美化せずしん已まんや由來皇國の歴史合戦酣ならんとして生死の境に出入しつゝ猶も人道の勃發人情の暴露其光景をして美化せしめ活劇上の壯美は優美なる深奥の源泉に觸れて茲に一種の詩美的現象を映發し來る箱根山上に於ける新羅三郎月前の篇、安倍貞任源義家の「衣のたてははこるびよけり」の歌、玉虫御前と那須與一、數へ來れば日本史上の活劇が一種の特相の内に濫熟し來るは天下何人か是を認識せざらんや誠や我郷江山の美は人事を染色して這般の結果あらしめしもの偉なる哉自然の感化、惜むらくは今此風光の名地をして黄金の魔力の爲め俗了し終らまめし事を、少しく景の賞すべきあれバ忽ち畫して某の別荘某の所有地となす別荘を設けて獨專の快樂をむさぼるを文明的行動となす彼等は美は衆多と共に樂むの美なるを解せざる俗物のみ夫れ繪畫音樂の人類の快感を與ふる所以のものとは同時に數多の觀客を満足せしむればなり是れ公園の天下に流行する所以にあらすや彼等何すれぞ公德心を欠くの甚しきか行くく舞子に亂松白沙に映する處を詠め明石城趾(松平慶憲八万石の城下、我中央標準時線)を翠巒蒼海の間に望み白鷺城下(姫路、酒井忠績、十五万石)

姫路城は都合上實見の運びに至らざりしも通過の際窺かに其形勢の大に勝れたる處なるを知れり是を今日兵器の進歩したる時代將た内地に敵國を見出さざる事情より

考ふれば其効果の一半を殺き去らるべしと雖も封建時代守勢の位置を取るものとすれば優に大敵の接近を防ぐに足るべし即ち東約三里を隔て、寺家の北方増田山より加古川其右方を流る其西約一里に阿彌陀驛あり驛の南東生石山あり曾根山小宮土山其西ふあり姫路の東約二里阿彌陀驛の北は高御位山、雜郷山、福助山登りて市の東方は平原間是等の小丘大山點在する爲一朝敵國の攻撃を受けんか是を利用して防禦線を設くる意のまゝなり北は香海山、置足山、廣峯山、但馬生野地方よりの自然の藩屏たり西は青山川の西方一帶南北に亘るの小丘連なり遙か西方那波驛の山谷國境の舟坂峠等にて其行通を遮断し得べし南は一帶平野にして約一里に飾摩津あり固より今日の大規模なる戦争は如何あるべきも一時敵勢をくじくの地勢たるは此地を通過する者の認むる處たり然れ共平原の配布より見れば中心点一處に集注せず稍散漫の欠点あり附近の小藩の分立を許すも亦止を得ざる處なり

龍野(醬油産地、脇坂安斐五万八千九百石)等も車中勿々よそ見して船坂峠のトンネル(長六百間)夢の中を過ぎ備前國岡山に達せしは午後七時なりき停車場前山佐旅館に投宿す

(梁川星巖)

須磨浦上吊王孫、芳草斜陽古寺門、忽被山僧勾引去、一枝湘管認啼痕。」
 半夜潮聲撼石磯、龍宮鳳闕夢依稀、一輪漁火船頭月、曾照君王赭色衣。」
 四月廿日曇、午後雨

岡山市

舊池田氏(徳川末路茂政)三十一万五千二百石の城下にして東京を去ること百八十九

備前地方

方言
 ナエン、用に立たぬ
 イノ、歸らふ
 アシタ、あなた
 ナナゴ、女又下女
 ナラサン、兄さん
 ナヨ、何々等の意
 シントイ、疲勞
 シンドイ、呼吸が切れる
 ナトサ、父
 ナ、此レハ彼レ
 ナ、ハのハ岡山にては用ひ
 ナ、出掛
 ナ、私娼
 ナ、男
 ナ、母さん

里大坂より海路四十三里池田氏は清和源氏右馬允源泰政後胤紀伊守源恒利の後なり
 天正元年の頃浮田直家岡山に徙り同五年自ら國主と稱す豊臣秀吉の西伐するや直家
 歎を入れ其封疆を保つ全九年直家卒し子秀家嗣く關が原の役秀家西軍の元帥となり
 兵敗れて出亡し八丈島に謫死す徳川氏小早川秀秋を本國及美作に封し秀秋卒して國
 除し慶長八年池田輝政の子忠繼を分封し其弟忠雄に傳へ寛永九年子光仲の時因幡に
 徙る光仲の從兄備前少將從四位松平新太郎光政代りて本國に封せられ岡山よ治し備
 中五郡の内を併領す

岡山城は天文の頃金光某の築く所天正年間宇喜多直家金光を殺して此地を領し大に
 城郭を造營す然れ共今舊時の觀を存するもの只一の天守閣のみ「烏城」は此城の別稱
 たり市の人口五万七千市役所を字東中山下置く土地平坦にして田圃四方ふ連なり
 爲め、眺望の快を貪る能はず只東旭川に接し水便あるも時々大水の害を受くるは蓋
 中國地方水源地近く山深からざるの致す處とす縣廳は弓三町あり其西に裁判所師
 範學校中學校あり内山下ふ第三高等學校醫學部及病院あり市中重なる處を城隍後樂
 園、岡山孤子院宗忠神社等とす

後樂園は市の東隅城北にあり日本三公園の一として旭川の清流に隨て一區をなし東
 西最も長き處百九十七間南北最濶き處百十七間面積二万七千〇十三坪を有す舊藩主
 池田綱政(勝三郎信輝の子)の創設にして貞享三年其臣津田永忠に命じて工事を監督

せしめ同四年初めて工を起し數年を経て落成す爾後池田氏世々修補を加え元祿年間
 更ふ區域を擴めて多く樹木を栽培す明治四年後樂園と名く岡山市宇出石町よりの入
 口を鶴見橋と云ふ鶴鳴館北門の右方あり延養亭は第一の建物にて古へ近國諸藩主
 及び其使節等を延きて饗應せし處聖駕玉坐の設けあり望湖閣は延養亭の西北にあり
 花葉は西門に通する園名なり樹木の稠密此境を第一とす茂松庵は舊藩主の茶室廣さ
 廿二坪餘藤池軒南門に近き處園内の勝を望む第一の場流店は八ッ橋の北十二坪餘の
 樓閣梅林は流店の東南利休堂を三室に分ち第一室に利休の像を安置せしより名づく
 花交の瀧は梅林の西、唯心山は中央の丘陵島の茶屋唯心山北の池中の島あり新亭
 園の東北隅楓樹數十株あり以上の諸名勝は一日七八十錢より十錢以上相當の厩料を
 拂ふて使用するを得べし

岡山孤兒院、有名なる「石井十次」氏經營の孤兒院なり理事、折田彦市、香川真市、
 ゼー、エツチ、ペター、エフミユラー、コルナチ大原孫三郎、田村新吉、徳富猪一郎、
 菅之芳、河本乙五郎、の諸氏あり全院最近の財産目録によれば有償證券七千七百七十
 三圓八十一錢地所家屋二万三千五百四十四圓十五錢九厘外部運動用品千五百六十二圓四
 十五錢諸預ケ金一万七千五百五十六圓十九錢九厘活版部勘定二千二百六圓五十三錢一
 厘金銀百二十一圓四十九錢二厘計金五万六千六百九十四圓六十四錢一厘也現在生徒男
 百九十二人女百十四人合計三百六十六人出身者現在教師二人學生十一人農三十三人商二

十四人靴工二人大工一人活版職四十三人鉄道員十一人寫眞師三人兵士十三人看護婦四人下女二十人米國移住者八人朝鮮移住者九人結婚せし男子十三人結婚せし女子二十六人なり

宗忠神社、備中濱衛道の南六七町許り神道黒住教會の本社なり安永の頃本村に黒住宗忠あるものあり父宗繁に繼ぎて郡内今村の今村宮に神官たり嘉永三年死明治九年

神道黒住教の一派を許さる全十二年本社を創立す、此地物産として注意すべき物は蓋し花苳なるべし廣島福岡大分香川等多少の製出ありと雖其盛なること當地を第一とす内地需用の外には主として米國に仕向け日本全國あては六百万圓以上の産額あり原料は經糸には麻糸又は綿糸にて端の經糸は麻に限る並物之經糸百八十本を用ひ染色はアニリン染料模様は染間にて織出す縵は三尺二寸以上を撰振す織機は横機二人掛りと一人掛とあり縦機一人掛あり横機は綾織等に用ひ種類は綾織脊高織ストーフ敷、綴合並等あり堅糸は綿糸とし時々しては麻糸を用ひ堅糸の数は種類に依り差あり唐綾目百五十本綾筵百八十本より三百本畦筵百三十本より百八十本紋筵百六十本より二百二十本並花筵九十本等として兩縁は糸五本を用ひ主として敷物としてカーペットの代用とし稀に壁の腰貼とす乾潔清涼なるを以て北方寒氣の地よりは南方温暖の地に需用多し花苳は幅一ヤール長四十ヤールを一巻とし量目五十斤より五十五斤あり

岡山は東方約四里の間山脈なし即東大川邊より山脈の連あるを見る北は西大川の兩側約一里内外より山脈起伏して美作地方との交通を遮断するを見る西は約四里備中高梁方向より來る大川迄山脈なし流車沿道は玉島以西も、かた驛附近より山路のせまり來るを見る南は一帯の平野約一里にして兒島灣に至る平原の形勢姫路に比して稍中心点の集注するを見る

午前七時宿舍を出て先づ後樂園に遊ぶ流石は名高き天下の名園、幽邃烟雅瀟灑風流人工の妙を極めて其堂奥に達するもの然れ共我輩の管見を以てすれば後樂園や未だ美の全体、具備したるものと曰ふを得ず優美の外宏壯あり雄大あり豪壯あり是等悉く配合の宜しきを得て初めて美の全たき快感を生ず此地即ち優美の風光あるの外「豪壯」と云ふべき分子を欠くふ似たり自然の美や峻岳險峯の天を摩するが如き處怒濤岸を洗つて飛沫玉を散するの處あると共、陽春三月花わらひ鳥歌ふの閑雅なる光景を配して茲に快感の絶頂に達す此美人類に現はれては壯士故國を辞して戰雲の内に入り易水寒き處三尺の秋水を按して立つの壯美とあり金殿玉樓擧止しとやかに翠簾の陰の巨木なく雄なるの優美なる由來日本の庭園や貴族的家庭的の分子足らざるもの皆是あり後樂園や即ち是れ、徘徊する事時次で孤兒院を訪ふ院長石井氏自から案内の勞をとりくまなく院内を視察し得たり吾人の参考となるべき組織立案多かる中に特に注意をひきし

は其院内家屋三々五々として一構内に集め居らざる事なり東京の寄附金よりて建築したるものは東京館と名づけライオン齒磨粉の慈善券によりて成るものライオン館の名あり内ふ年長者一人生徒の内より監督者となり幼童十人程是に同居す院長曰く此年長者にして後來献身的の婦女子ありて彼の可憐なる人の子の母となるものを得ば全然家庭的組織たるを得べしと階上は館毎に修養室あり余思へらく現今中等教育界に流行する寄宿舎制度や其弊の大なるものを家庭的趣味の欠乏となす夫れ高等小學三年程度少年にして初めて軍隊的設備の寄宿舎に入る其規律は蓋し是あらん安ぞ温情の掬すべき家庭的趣味を得べけんや此種の建築にして其監督者に教員家族の適良なるものを以てせば或は其通弊の幾分を除却し得べきか又寄宿舎の三々五々彼所に在る散在するや恰かも一村落の觀をなし趣味の變化あらしめ復雜の中に統一を求むる豈難しとせんや一寄宿舎の殺風景に比して頗妙案なりと考ふ全体を養育部教育部の二とし養育部は男子部舎八棟内二棟二階作り一棟大抵十五人宛各舎に曹長伍長(年長者にして優良なる院兒)一人つゝを置き其舎院兒の世話となす男子幼年部舎一棟平屋作り五室に分ち一室八人宛と室長(年長者)一人宛あり内一人は看護婦の免狀を有す女子部舎三棟平屋作り十一室に分ち一室十人各室に室長一人宛あり該室院兒の世話となす内一室は當部主任の一家族住居す病室平屋作り一棟主任看護婦詰り看病す目下病兒八名醫師は開業醫三町弘氏本院創立以來親切に診察せらる重病者は縣立病院に

入る衣服部平家作り一棟婦人の職員四名寄贈古着の處置并に衣服及蒲團の世話となす食堂平家作り土間、飯は米麥相半ばし(幼年部は米七分)副食物代一人よつき一日三錢づゝ病室は麥を用るす副食物(牛乳代共)一人一日十錢つゝなり教育部には精神教育の方面は公會堂に於て毎朝三十分間講話をなし幼稚園學齡(此孤兒院にては滿八才を以て就學年齢とす)未滿の兒童の爲に幼稚園あり保母二人主として体育を主る學校卒業せるものよて高等學校醫學專門學校中學校及び高等女學校に通學せるもの男八人女三人あり實業教育尋常小學三年級以上の男子は半日活版部(西洋風二階作外活字鑄造場附屬せり)にて勞働す女生徒は半日裁縫編物或は洗濯をさす此事業や組織如何に完全なるも人物當を得ざれば其効果少なきや論をまたすあいかくも完全なる程度にまで維持し發展し來りし石井氏や眞の献身的の人なる哉公會堂に至るや幼年生忽ちむらがり來りて「石井のオトサマ」や々々袖あすがりたもとに取付きしおだれ掛る其風情余は注目多時心腸爲めに裂けんやせり愛なるかな人世や余は懇切なる説明を謝し幼稚園生菓子料として金若干を寄附し去て市西に宗忠神社を觀天候變せんせしを以て早々京橋口の一旅亭に投し茲に四國行きの汽船を待ちぬ時正に午前十一時雨しきりなり京橋は西大川に架する處山陽鐵道連絡線讀高松行汽船の發着する所たり山陽鐵道や瀬戸内海に大坂瀧船會社日本郵船會社の競争線あり他線に比して其勉強熱心の度

も大い、食堂車鉄道旅館、連絡汽船等其設備計畫の一斑を見るべし正午十二時會社附屬の一小汽艇旭丸に乗して西大川を下る雨益急に濛々咫尺を辨せず此間五十分時よして河口三番港に達す波濤荒く風雨益加はる茲に本船に轉乘し瀬戸内海に浮ぶ船の動搖益々甚し余は甲板に出で、風雨を犯し附近の水光を貪取するに急なり其光景や雄大なり豪壯なり余は雨の恐ろしさを感ずるよりも寧ろ壯快興趣湧くが如くなりさ不幸余に此種の風光を活寫するの手腕なきを

四方の山は雨にかすみて行く舟のふへの音高し瀬戸の内海をちこちみゆる漁火かすかにて和田の八十島影けむり行須臾よして

小豆島

讃岐國小豆郡にして寒川郡の正北四里餘の海中にあり東西四里十五町南北三里十四町周圍三十餘里人口五万以上大豆の産出あり郡役所を土庄村に置く全嶋悉く山嶽丘陵より成り北部海岸は斷崖暗礁多く港灣乏しきも南は釋迦ヶ鼻の一岬角突出し東は草加部灣あり西に池田灣あり翠峯碧澗水面に落ち風帆漁艇遠近に往來す岸は白砂青松あり南北兩岸は花崗岩よりなり中央東西に新火山岩噴出す草壁灣の北有名なる寒霞溪あり晚秋紅楓の期來るや碧波紅錦と相映して其景や眞個に幽邃、に達す下船するもの乗り入るもの共に數名南西に向ふて進む男木島女木島右に迎え大

島屋島左に來る惜むらくは風光僅か屋島山の富士形をなすを明認したるのみ午後七時高松港頭に到着し六田回漕店に入る豪雨猛烈ぬれ鼠の姿にて宿舎に入る
四月廿一日、晴

午前七時高松の玉藻城を跡に見て先づ屋島の古戰場見物に出發しぬ、町の中央に「是より左屋島道」との石標ありあなたこなたの曲り角皆其方向を指示す市を離る頃より四國順禮者頗る多きを見受けぬ此風俗たるや西南地方より多く就中四國を盛なりとす思へらく鳥國は舊文明の保存地にして地形の然らしむるや舊風容易く其地を去らず其風俗や稍質樸なるの傾向あり加ふるに日本の大中心点を連接する沿道に當らざるを以て殊に舊風の存するや知るべきなり此日所謂「御接待」なるもの、盛行するを見る道傍一組の飲食物を用意し以て四國巡禮の來るを待つ巡拜者は一錢をも投せずして至る處此「御接待」によりて空腹を凌ぎ以て全島八十八個所の札所を周遊す其服裝たる正に演劇にてする阿波徳島巡禮者の「娘おつる」の形式にして御報謝を要求するもの決して世の非人乞食と同一視すべきにあらず下に目眩き迄の美服をまとい人品亦決して下賤の者のみならず必竟信心旅行ふして容顏玉の如きもの又此行中より何村の長とも言ひたき骨柄の人物もなきにあらず三々五々として道路頗る賑ふ人間精神の單調あるや容易く究理的傾向に入らず不幸慰するの道なきか風俗解しやすからざる複雑の現象に會すればたちまち彼を頼り是を信し茲に一種の他方信仰生ず而して山河自然の風光に

浴して一面自己の鬱悶を慰し煩悩去り難きを忘れんといし或は大願を起して堪忍の試験をなし遂には這般の巡禮となる額にあせして日常余裕なき彼等も余儀なく茲に目の正月口の正月にあり付なり唱名念佛高らかにかよはき女子の二人濱邊の松陰は消え去るなどしほらしき風情亦一雅興たらずんはあらず東に行くに約壹里左方葦の如きは即ち屋島山にて今瀉元村に属す人家の屋根の如し故又名づくくと云ふ麓に一二の茶亭あり登路十八丁敢て急ならず道幅亦廣濶一丁毎ふ石佛を置き丁敷を刻し以て標識とす瀉元村より登ること數丁「阿吽」及六字の名號を刻せる礪石あり僧空海の筆跡と云ふ石摺を寫取したるにや碑面眞黒色なり是亦信者の所爲なり絶頂に達せんとする處數十歩の間粘板岩層々相倚り頗る奇觀なり名つけて疊石といふ

やどりしてこゝに假寝のたゞみ石月は今よひの主なりけり

西行

絶頂に達すれば南面して立竹ものは屋島寺にして南面山千光院と號す四國八十八ヶ所の一として八十四番の札所なり二王門四天門本堂大師堂釋迦堂千体佛鐘樓等あり古より高廿五石を寺領とす寛永中松平氏封を當國に移すに及んで讃岐守頼重、高五十九石餘を増加す寶物と稱するもの種々あれ共取立て、云程のものなし、左に向ふて西條に至る獅子の靈殿と稱する處あり屋島眺望の絶景は此處を第一とす西北は三備地方を雲烟縹糊の間望み南は阿讃の連峯或は波の如く或は劍の如く高松市街は眼下ありて玉藻城近く海岸に突出し埠頭常に幾艘の汽船を横へ豊島雄木雌木の諸島其間に點綴し

瀬戸内海、景 其一

屋島ヨリ西方海面望み

29 181

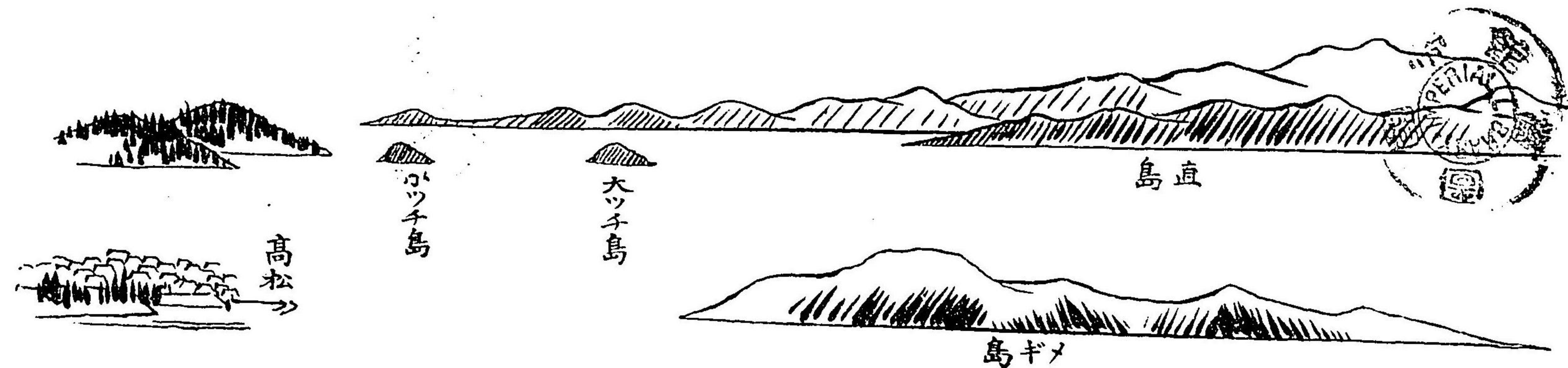
瀬戸内海、景 其二



29

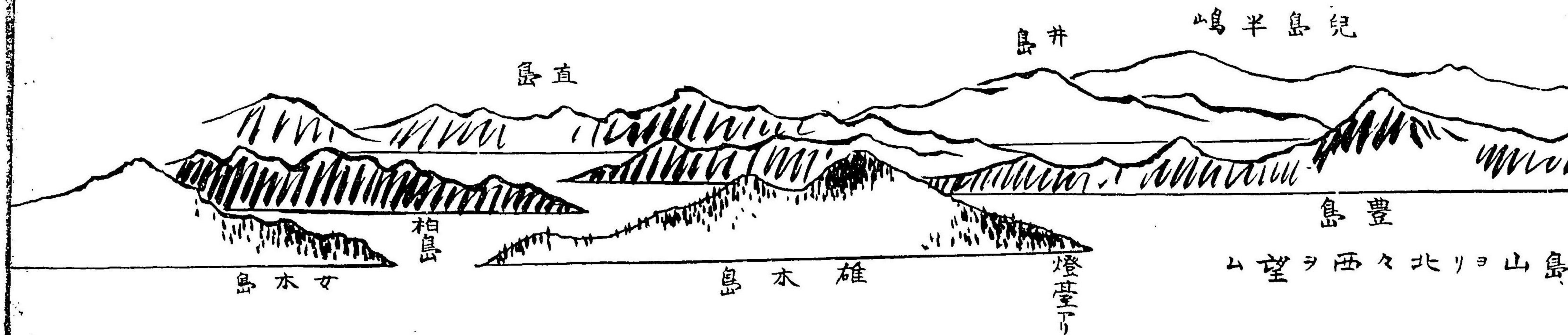
瀬戸内海ノ景 其一
屋島山ヨリ西方海面ヲ望ム

99 (181)



瀬戸内海ノ景 其二

99



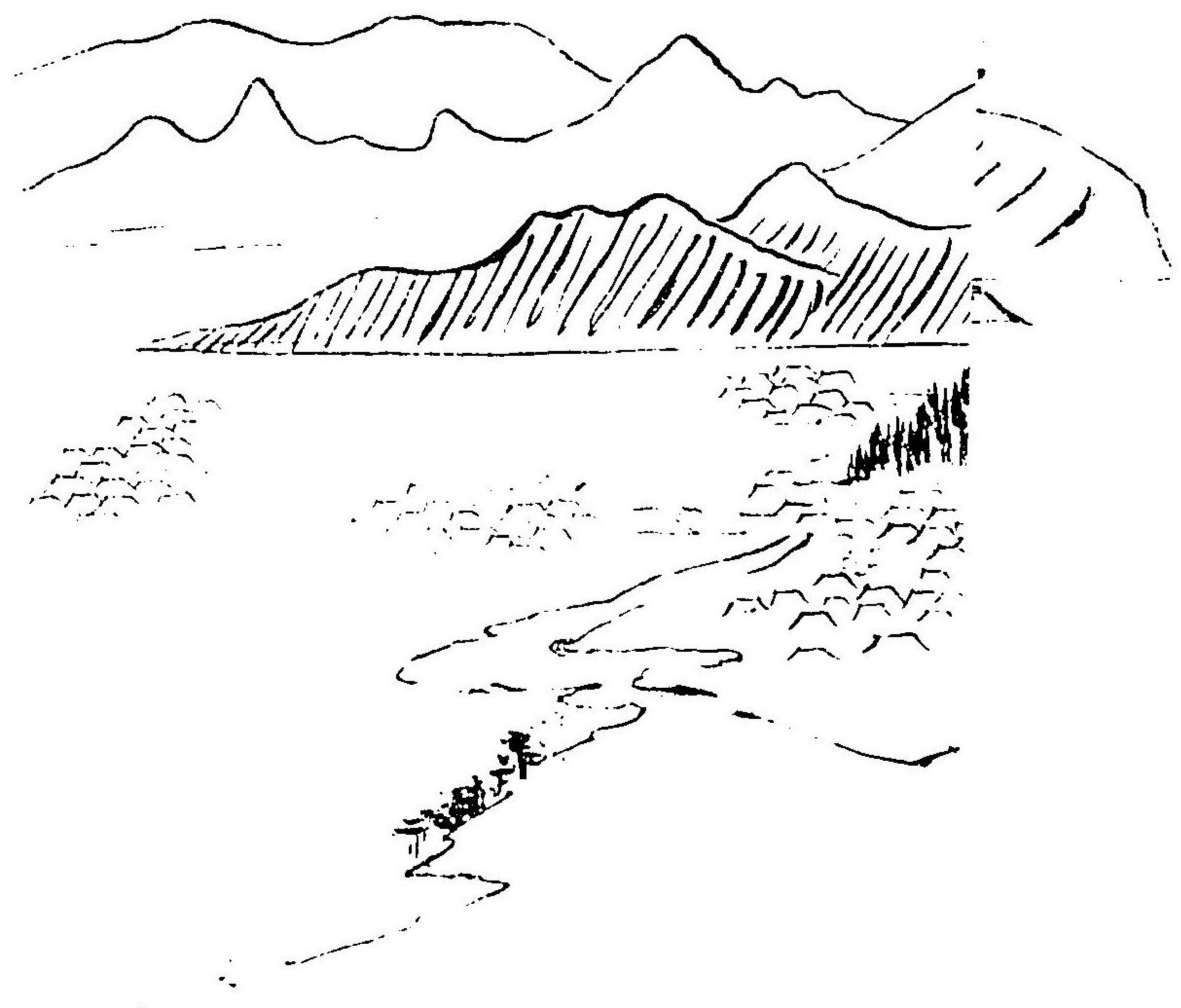
碧沙杏形勢雄大真個に瀬戸内海の勝區たり茶店數棟あり以て旅客の勞を醫するに足る内海の島嶼や悉く花剛岩其外皮の碌落する處必ず白色爲めに層一層の美觀を映發し來る北嶺に廻れば茲に天智帝時代の城跡を存す日本書紀云所謂天智天皇八年十一月築大和國高安城讚岐國山田郡屋島城對馬國金田城云々の處にして蓋西蕃の外冠に備へたるもの今呼て嶽岳と云ふ東に巡れば「談古嶺」と名つくる處に出づ蓋し明治三十年村雲尼殿下御登臨玉趾を此ふ止められ土人遺跡を尋ねられしよりの地名とす源平の古戰場檀ノ浦は皆此下あり東南遙か一山を越えて志度浦を臨み更に一帶の山脈を越えて津田鶴羽の諸浦を見る東北は小豆島播磨淡路島近く目睫の間在り秋天晴朗の日に水雲鬚髯の際模糊一帶舞子の松林を見る事ありと云ふ直下は檀の浦を隔て、五劍山の秀峯を望み北灣口の開く處大島兜島稻木島の諸島恰かも青紙の上に滴りたる墨痕の如し

もろともにあはれば空にしられけり屋島にのこる秋のよの月（高松藩主頼重）
屋島や往昔源平の頃海中の一島嶼たりし處にして桑滄の變は現今の如く半島狀をなさしめたり五劍山は東に、屋島は西に、八栗山南に、恰かも三角形をなせる其間を檀の浦とし其海水僅かに小流をなして屋島山の南を廻りて西方春日川の河口に至る屋島の南瀉元村に相對して八栗山北麓に古高松村あり八栗山と五劍山源氏が峯との間半禮村あり此三山の窪地は即ち古戰場なり屋島北東側宇石場と云へる所の山腹に内裡跡あり

安徳天皇を茲み奉して平家の塵戦したる處とす其他源平の戦址數ふるに暇あらず八栗山に一城趾あり中村宗卜の居城跡古高松村に喜岡城跡あり今其墟を寺とし喜岡寺と稱す高松三郎頼重の據りし處見終りて紀念として屋島燒數個を購ふ明和三年の頃寒川郡志度村より三谷林隻なるものあり種々の陶器を創製せしむ同七年の頃平賀源内と協議して大に改良を加へ京の樂燒の法を學び屋島の土を以て製出するに至る世に之を屋島樂燒と稱す今の戸主林造氏は其曾孫なり一茶店に晝食を濟し直ち高松の栗林公園に遊ぶ

高松市

香川郡の北端より東西廿五町南北十七町人口三万五千北は直ち内海に瀕して高松の舊城高く天の笠の維新前松平讃岐守頼臈居城拾二万石の城下なり松平氏は徳川竹丸(源頼重、水戸中納言頼房嫡男)の後にして寛永十九年頼重以來此地を治す始天正十八年生駒雅樂頭親政の當國に封せらるゝや此地を卜して城を築きたるもの、東京府を去る二百七里高松琴平間貳拾七哩十九鎖の山陽鐵道あり岡山驛發着に連絡す近時三拾余万圓の巨費を抛ち築港を設計し内海汽船の寄港を便ならしむ此地の産業としては保多織なるべし染色せる綿糸を用ゐて製したる縮綾織にして即ち綿織類の一種なり香川縣を各府縣の織物産額の順序よりすれば先づ京都、群馬等を筆頭とし三拾五六番なりと云ふべし産額約二拾万圓以上あるも未だ多額なりと云ふべからず





望山
屋島山ヨリ高松市街ヲ

61. (10)

讃岐の産業としては勿論製鹽業砂糖業等は著名なるものなり製糖業は天保年度より盛大となりたり凡そ砂糖の原料は甘蔗甜菜を主とし他に蘆粟楓樹等あり又玉蜀黍よりも製出す甘蔗は印度の原産にて我國にては慶長元和の頃より支那和蘭より輸入したるを初す宿根植物にして二三四月頃植冬至前後に刈入る其種類甚だ多く肥料栽培に費用を要し従て生産費高し甜菜より砂糖を取ること十八世紀の終りに於て獨逸に發明せられたるものなり日本にては北海道紋別に植て製糖せしを始とす讃州砂糖は即ち甘蔗糖として白下及白砂糖は内地第一たり又此國産三盆白の如きは不純分を含む事多きも邦人の嗜好に適し其價貴し甜菜糖は一種の臭味を帶ふ我國内地の産出は年々減少して明治卅三年輸入高六億四千七百方貫内地産は外國輸入高九十九に對する一の比例なり然れ共臺灣産の五千四百方貫中内地より送りしもの三千六百萬貫餘なれば合計輸入高の八分六厘餘に當るに過ぎず今や關稅改正の結果精糖の輸入を減し粗製糖を輸入して内地に精製するの利益あるの傾向を生えたりと云ふ香川縣や生産費用の廉ならざる爲め容易に擴張の機に接せざるも邦人嗜好上よりせば優に上位を占むと云ふべし

瀬戸内海の鹽業は日本製鹽業の主産地にして十州鹽田の稱あり瀬戸内海は四方陸地より圍まれ鹽水の蒸發多く鹽分強きと降雨少なきとよる殊に播州の赤穂備前の兒島周防の三田尻阿波の齊田讃岐の新濱等は市場に有名の銘柄とす製造法には搗漉法入濱法天日製凍結製枝條架製等あり本邦にて最普通なるは搗漉法にて入濱法は瀬戸内鹽田に行はるゝ法とす品位より云ふときは赤穂齊田三田尻を良とす

高松市中を通過するとき吾人の目に止まりまゝ香賣風俗なり其風小原女の如く頭上に魚籠を戴きたる婦人の往來するもの即是、又一輪の荷車を推し行くも珍らしき心地せ

り其荷車の車も小よ左右に曲れる把手あるものなり言語等には斯に記す程耳新らしきを知らず午後一時

栗林公園

香川県高松市の南端にあり面積十六万五千五百卅八坪余紫雲山西に聳え林叢四方を環る南湖北湖東漚西湖涵翠池芙蓉池の六大水局と飛來峯、芙蓉峯、飛鶴峯、會仙峯、冠松岡鳳尾場等の十三坡とを主景とし園内の勝區凡六十真山を假山と縫ひ遠景を近景に補ふ奥如たり曠如たり東洋園藝の美を極めたる勝區なり昔天正中(凡三百年前)國守生駒氏の臣佐藤道益の居趾なりしを延寶中高松藩祖源英公定めて別莊とし延享四年五代穆公に至りて修治大成せり明治の初定めて公園となし卅二年博物圖書の二館を園内に置き以て今日の觀をなす

に達し東より表門を入りて行く事一丁區を畫して博物館あり舊檜御殿跡なり左に「之字形池あり館前右側は沿ふて屏風松の並樹を經梅林橋に至る橋と西湖と北湖とを連ぬる一小溝を架し傍一叢の梅林あり北湖を望む北湖中前嶼後嶼の二島南北は横はり遙かに東芙蓉峯を望む翠紅綠青色を廻りて其研清をた、かはし邃然たる景趣得も言はれず左に藥園日暮亭あり右に瀛川の巨巖を擁して其下を流る、あり一路究まつて忽ち一廣庭開く渚山の老松翠滴らんとし南、屋低く三重に曲折せる處是を掬月亭とす藤を捲けば一面涵翠池鹿鳴原を隔て、坐して紫雲山の嵐翠把ふべく星斗館を欄を凭れば

南湖の中心楓嶼、大女島、社鵲、嶼仙、嶼の各島を隔て、假月橋、畔紅雲飛來峯を壓するの處俯して小西湖の沈壁を掬すべし小橋緑を斷ちて錦鑑頭を掩ふ處一步は一步より仙境の中に入る水門あり南湖より西湖に流る、一河を扼す南して楓岸、臥龍梅の細徑をよみ更に轉して西六角堂邊到岸梁を渡り津伐梁、良則梁を過ぎて再び梅林橋に出づ泉月亭茶園のある處より西北行れば芙蓉池畔蓮葉玉露涼しく一帶の竹林の瀟洒清新景自から開なり西北貝の口より門を出たるは午後三時過なりき大俗の塵界に出て、此幽境を想へは恰かもあけてくやしき玉手箱一朶の紫雲と消え失せたるの思あり是を岡山後樂園に比す其幽趣其廣大固より彼れの及ぶ處にあらず紫雲山は假山にあらず豪壯の美も自然に配合の妙ありて稍満足し得らる、が如し只彼は山陽中樞の境ありて天下の視聽を聳かすよ足り是は四國僻遠の閑地に位して未だ全く其名聲を發揮せざるもの其價值を決して三公園の下にあらず

午後四時高松發車琴平に向ふ右方横峯雲横はるは稜の松山白峯寺のあたりよやあらん左は阿野の連山起伏して高松市の平原を限り白峯の山脈と其間僅か、國分村府中村等の一峡谷を開きて坂出浦に通ず坂出町は人口一万二千町内阿野鶴足郡役所あり鹽業頗盛大なり高松市を距る五里十町なり宇多津に出れる眼界頗る廣濶北に高見島佐柳島廣島大島牛島與島沙彌島(理源大師出生地)等颯飽諸島點々として内海に浮び南の方讚州富士(飯野山千四百五十尺)の翠峰を望む此地元と細川頼之の城市にして其遺趾尙は

市街の南あり(細川頼之は頼春の子なり正平年中當國の主護となる)午後五時九龜に達す

九 龜 町

高松に亞ぐ都會にして人口二万五千第十一師團第廿二旅團司令部第十二聯隊第四十三聯隊の所在地なり中央に城址あり始め寛永年中山崎家治此城を主として五万三千石を領し三世にして嗣絶中萬治元年京極高和之に代り六万三千石を領す其祖父高次は若狹小濱に治し叔父高忠は出雲松江の城主たり元禄年中高知の孫高成弟高道を多度津に分封す多度津高松と東西相通して交通至便なり
京極家は宇多源氏佐々木源三秀義五代近江守氏信初めて京極と稱す十七代にして高吉に至る高吉子高次(若州小濱城主高次弟高知)(丹州宮津城主)高次子忠高(出雲國守)忠高子高和(實は弟)初め播州龍野に居り後九龜に移る
車窓軟風屬に適しパノラマの如き瀬戸海の風光に飽きて只何となく轟々たる汽車の音に耳を清ます折柄早くも多度津着驛の聲を漸く我に歸れば象頭山は早や目睫の間より東に金藏寺(智證大師生地)西に善通寺(空海誕生地)を見て南々東に馳する内午後六時二分琴平町に達しぬ余も琴平神社に参する程の信心家よもあらざりし人世は奇妙なるものにて矢張り琴平神社に参詣したき野心あることおかしけれ否尋常の信心家となりて信者よ對する琴平社のなす様を見やと市中を徒歩して社頭に近き處櫻屋と稱



琴平町ヨリ西方ニ
象頭山ヲ望ム

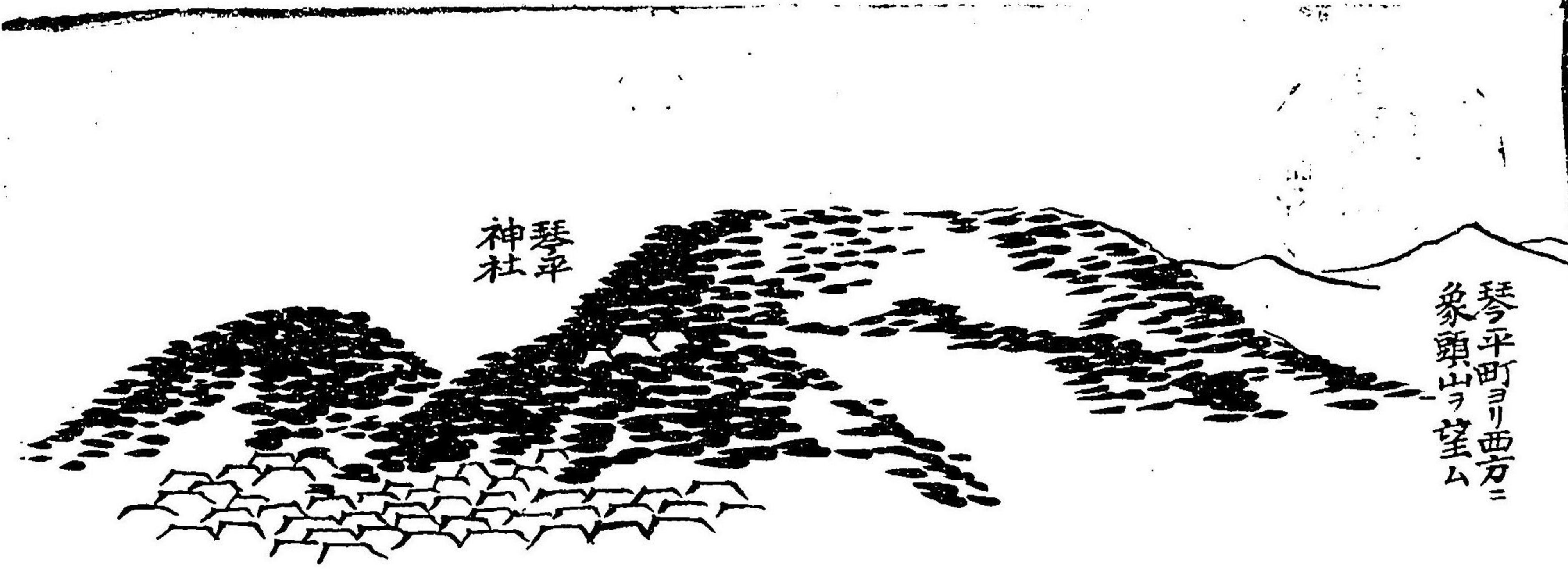
琴平町
稍北方

64 (11)



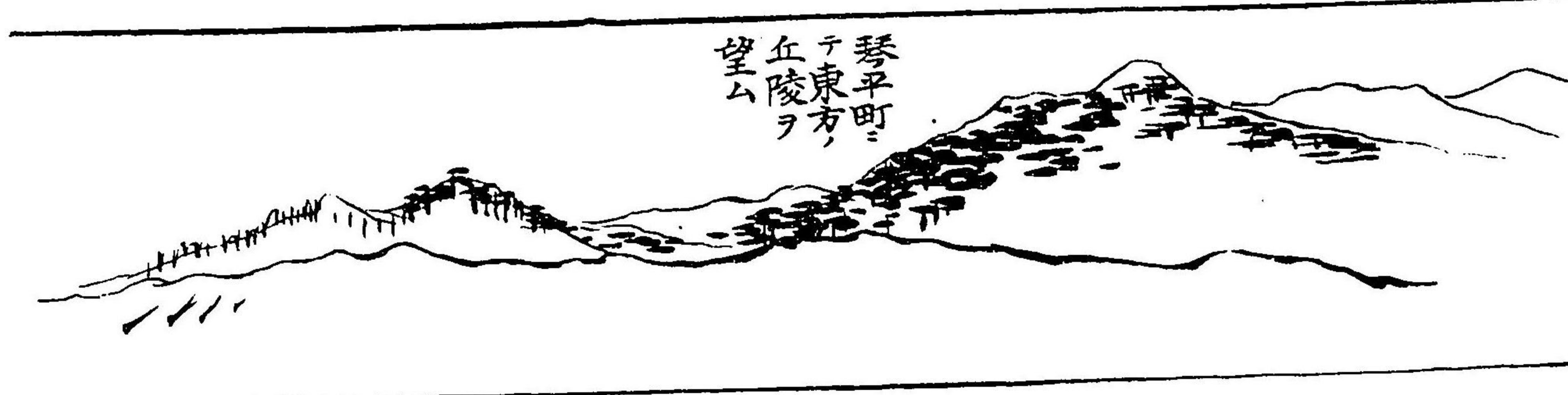
島 粟

03

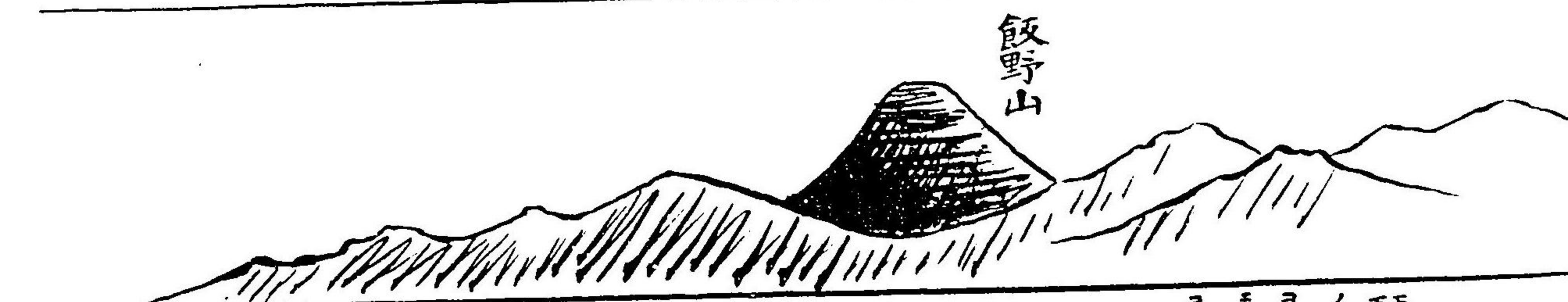


琴平
神社

琴平町ヨリ西方ニ
象頭山ヲ望ム



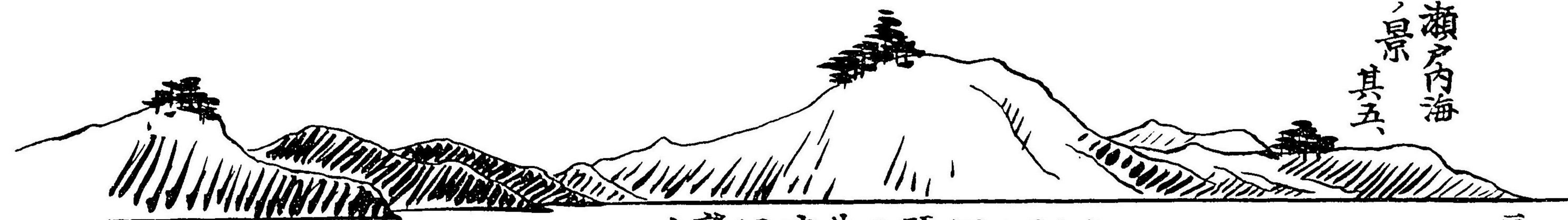
琴平町
テ東方
丘陵ヲ
望ム



飯野山

琴平町
ノ稍北方
ヨリ東方
ニ飯野山
ヲ望ム

(11)
64



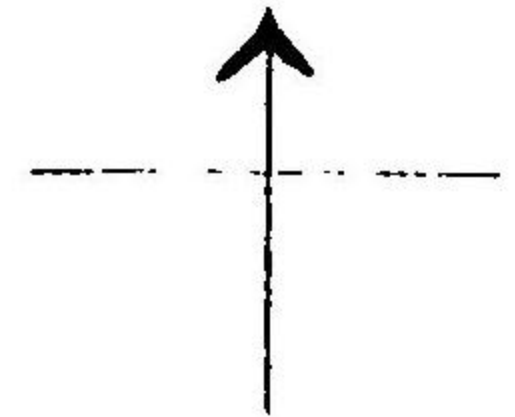
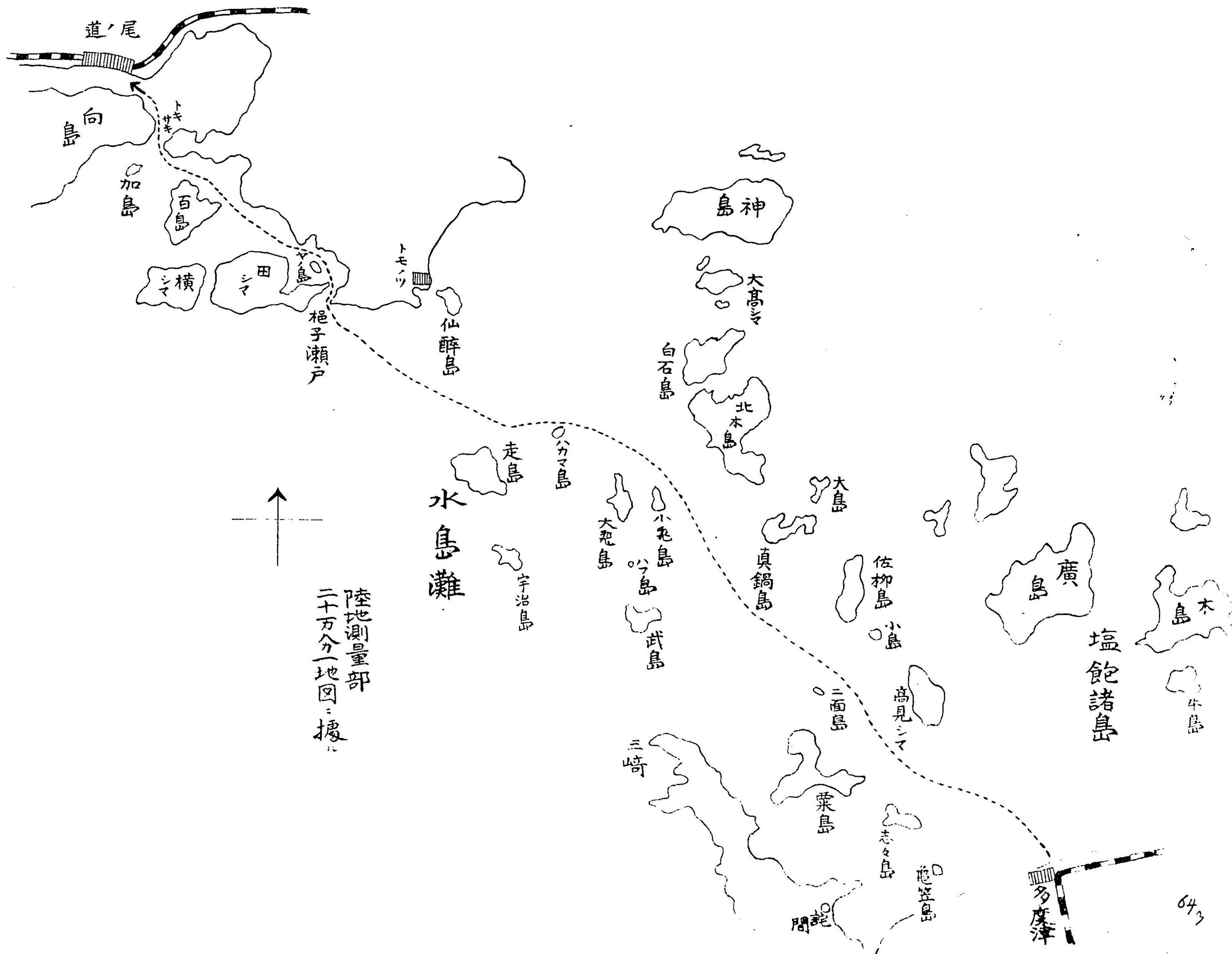
瀬之内海
ノ景
其五

島栗

山望ヨ方北ヲ頭岬ノマクダ

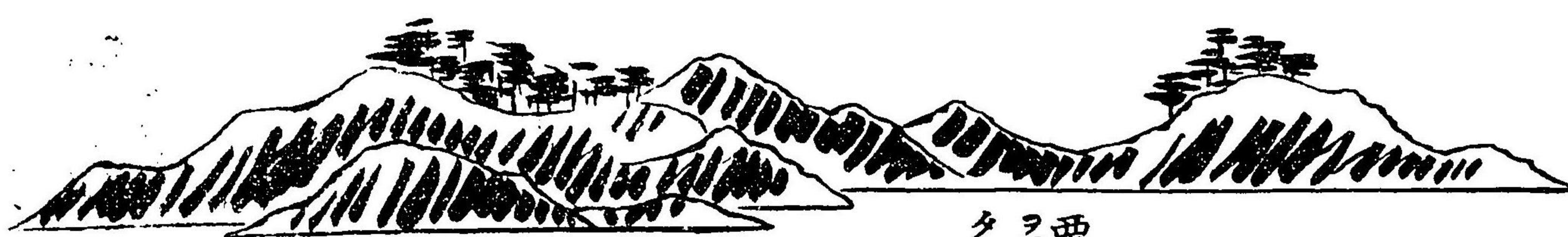
三崎

(13)



陸地測量部
二十万分一地図ニ據ル

瀬戸内海ノ景其三



栗島
ヲ西方ヨリ見
タル圖

瀬戸内海ノ景其四



高見島ヲ
南方ヨリ望

小手島

手島

する可なりの旅館あり先づ幸ひに茲までは神爵も蒙らで安着したるぞ有り難きうつくしき眞鍮製の浴室も身を清むるだゝ金ならではかなはぬを感じつゝ恐れ多けれど参詣は明朝のこと、茲は同家の奥室に一睡の夢を結びぬ此日同乗の客頗多數悉く琴平参詣の客たり思へらく瀬戸海に濱する此地は水難救済を表榜して信者の安慰を興ふるもの蓋し地勢の然らしむる處恰かも成田不動の關東は信者を有するが如きかシエルサレム巡禮のわらんかざり基督教は盛なるべく參宮鉄道の繁昌せん限り國体の安全を期し得るが如く琴平社の盛大なるかざり平民的宗教は衰へざるべし琴平社の恩澤を感謝すべきは先琴平町自身なるべし一神社の爲めに斯くも不自然の山中に一大市街の繁昌を保てばなり其祭神の誰なるやは惜て問はざるも可なり只琴平神社にて可なりとせん琴平社あるが爲に多度津丸龜高松も繁昌し一部の山國生活の人士に瀬戸海の風光を賞せしめ離れたる四國島を本地に關係せしむるの一大神徳あればこそ四國の四國として成立せず優に日本の一部として世の風潮に伴ふ可ければなり唯歴人頭勢欲傾、滿山露氣不堪清、夜深天狗來休翼、十丈老杉搖有聲(日柳々東)

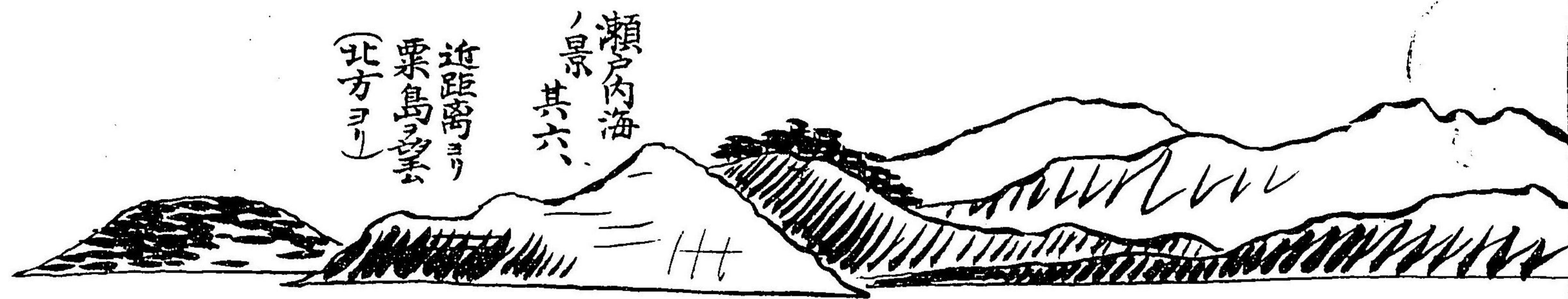
四月廿二日、晴

午前九時宿の案内ふて琴平神社に参す(案内を受けされば内陣の参拜を許可せず何の故たるを知らず蓋し宿の案内を受けて内陣を拜すれば其功德大なるに因るべし)こゝもりとしたる象頭山の麓より九町五間の磴道を登りて鼓樓の邊を過ぎ玉垣石燈籠連な

りて櫻多き所を登る更に二町ふして社前に達す白木作りの本社拜殿高潔なり賽人に第何回目参拜の証とやらを附與し錦の守袋御守札然かも此御守札は神宮殿の本社の奥殿より持來りて附與する有難き御札として余の如き不性者は其保存法に困却したり御守札にも數種あり客人の好みよ任せて買捌くと云ふ案内者曰く此地は見物すべき處にあらざる參詣すべき處なりと蓋し眞面目の話なるべし參詣やら見物やらうこくよ下山し午前十一時四十分琴平を發し多度津に至り山陽鉄道連絡船に乘し備後の國尾の道に向ふ此日天氣清朗はしいまに瀬戸内海の風光を賞するを得たり山國は生長せし我は海色を賞する實に過ぐるの嫌あらんも少しも掛値なき觀賞客たらん事は余の深く期する處たり高見島小島佐柳島(以上讃岐分)を右舷に龜笠島志島栗島を(讃州分)左舷に余は甲板上海色のスケッチを極む一線を畫して島影を眺むれば其位置既に轉し一樹沫し終れば忽然其形を變ず此活動せるパノラマ的島嶼や地積固より狭少なれば翠松の間麥圃多きも岸帷直ちに海浪に接し麥浪の黄色は海波の碧藍と相映し時よ花剛岩の白色の斷崖此間に點綴し草舎蟹屋其間に隠現す航路究まるの如くして開き開くが如くして究まる小島の黄影影ほころびて一道の碧水其間を畫するや大島の翠巒直ちに之を縫ふて其前途を遮る或は洋々たる大海の如く或は漣波細かなる盆地に似たり艦艦時に浪を破つて來り白帆時お雨三一点の青螺に隠る限りなき風光限りなき景趣宜なり歐米人士の世界の絶景を叫ぶや、更に右方眞鍋、北木、白木、大高、神島、小飛、大飛、袴島を望



近距離ヨリ
栗島望
(北方ヨリ)



瀬戸内海
ノ景 其六、
近距離ヨリ
栗島ヲ望
（北方ヨリ）

瀬戸内海ノ
景 其七、
備後鞆、津港
ヲ正南ヨリ望ム

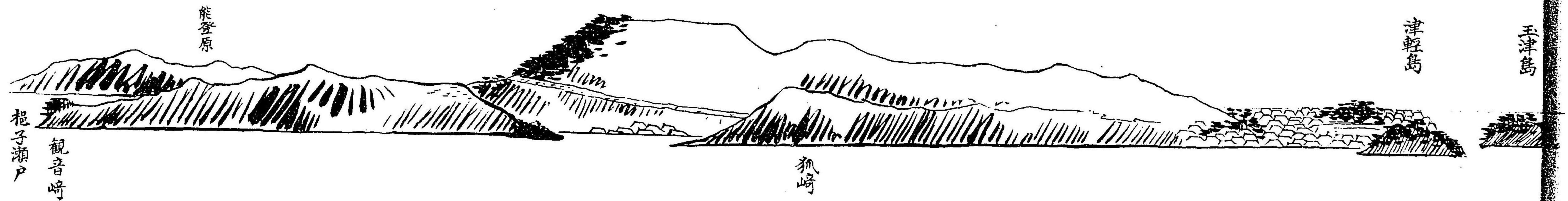
仙 島 群

ツシ
島

鳥石島

玉津島

津輕島



能登原

梶子瀬戸

観音崎

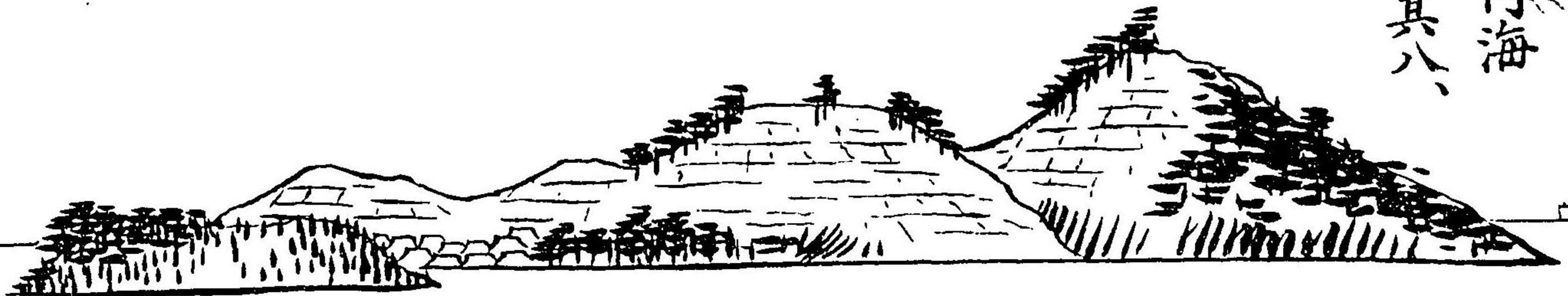
狐崎

津軽島

玉津島

武島正北望

瀬戸内海
景其八



み左方武島、宇治島走島を見て水島灘を經過するや北方遙かに鞆の津港頭仙醉島畫の如きを淡霧の内に望む南の落茫一碧更に一島を認めず内海の感は漸く大洋の感に變せんとするや西方因島能島一帶眼前に展開し來る想ふ源平の瀬戸内海は其勝敗を決するや源家の兵船八百四十平氏の軍艦五百餘艘是等島影に其箆風をなびかせしを、下つて南北朝以後海賊の盛なるや蓋し日本の海軍は基礎を置きしもの、北畠親房は伊勢熊野の海賊瀬戸内海と相應して北朝を困しめ伊豫の能島來島因島の三家や瀬戸内海の最も大なるもの、毛利氏の陶氏を亡すや此三島の海賊と相連結せり陶氏亦宇賀島大島の海賊を招集せり村上大和守武吉は嚴島の戰ふ元就を助けたり細川頼之は村上氏を海賊の棟梁とし南通春の子通種を惣奉行となし幾万艘の船の割符を以て帆別錢を取立て海上の往來を監督せしむるに至りて漸次發達して彼の有名なる八幡船となり倭寇と稱せられ明韓南洋を脅かし大閩の征韓や實に其水軍を海賊の手に取る見よや來島氏が七百の水兵を以て其外征の一勇鎮たりしことを練習練習亦練習數百年來の手腕は一度徳川の初世は海外發展の機を失せしも近くは日清役に將た日魯戰役も世人の如き結果となる瀬戸内海は日本海軍の養成所たりしなり文明の摸倣者なりと彼等々西洋我國今日の活動や深く由來する所あり誰か曰西洋文明の摸倣者なりと彼等々西洋物質の文明が活動の機となりしを見て深く其主動の要素たる精神的練習が幾何の高度に到達し居りしかを知らざるなり文明の真髓豈一朝にして成らんや

一道玄烟漲半空、大輪卷浪蹴蛟龍、豪吟忽破萬里恨、藝海玲瓏碧奪宮。
 田島横島を左に見て桅子瀬戸に達するや一岬角の右岸海上に斗出するあり阿伏兔の岬
 と云ふ岬は岩石よりなり断崖削れるが如く岩上は觀音堂を設く海面より高きこと九十
 二尺廣さ六間四面にして其他堂宇は崖下の海濱にあり輛の津を去西一里元龜中毛利氏
 一字を建立す寛文七年水野氏牢固なる石壘を爲り此堂を建立す險崖數尋の下洶然たる
 海潮岩角ふれ銀碎け雪飛ぶ壯絶快絶、瀬戸に入ればヤノ島前面にあり航行頗る緩と
 なる百島加島を左に向島とトキ崎との間を過るや水夫は鉛錘を投して其水深を測り一
 沈一呼其尋數を呼ぶ其淺瀬多さを知るべし午后六時備後國尾の道港に達す

尾の道港

備後國御調郡の東南海岸ある市街にして大寶愛宕の諸山其後より時ち向島其前に積
 はり港内波浪穏よして汽船帆船の出入多く煤煙常に空を蔽ひ社寺一帶山腹に駢列し
 て眺望頗佳なり只惜む三成川の土砂年々堆積して港内水淺く巨船を容るゝ能はざる
 を然れ共商業の盛なる廣島より下らず人口二万二千を數ふ蘭蓆は此地著名なる物産に
 て海外に輸出す

尾の道停車場に達せしは六時卅分なりき驛内保命酒を賣るものあり輛の津産の名物よ
 て四角形の磯づめなり六時〇一分發廣島に向ふ黄昏時の事とて糸崎三原の海色漸く朦
 朧四日市驛まで日全く暮る廣島に達せしは午后九時十六分なりき停車場前長沼支店に



佐柳島

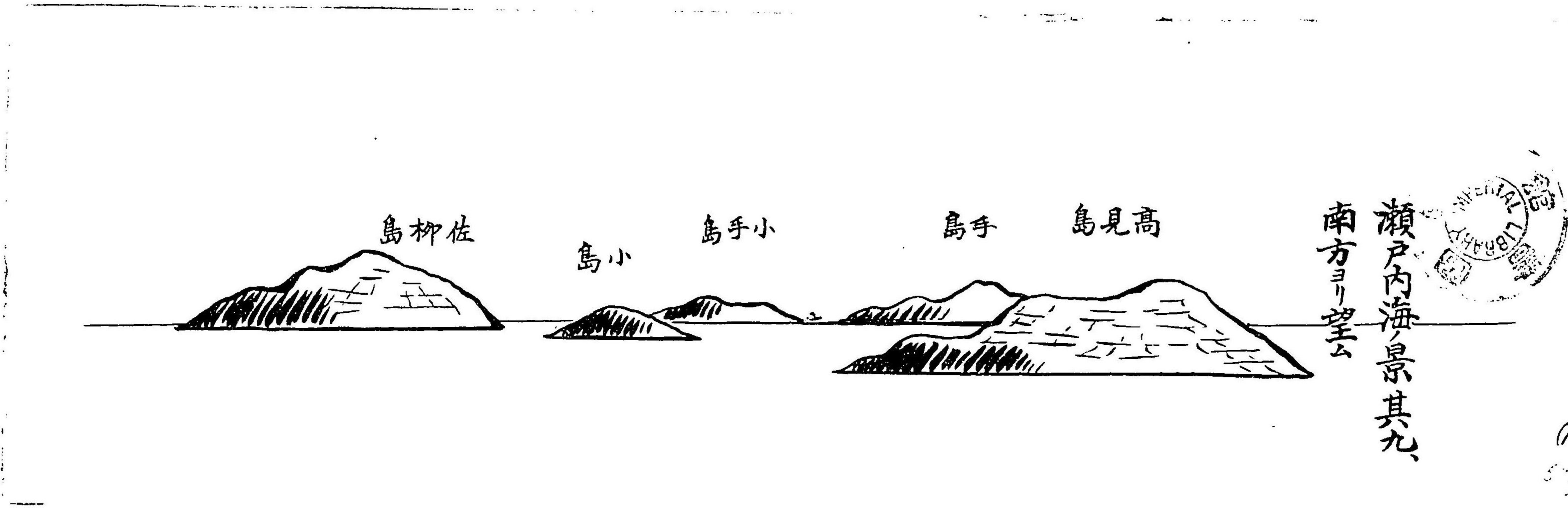


瀬戸内海

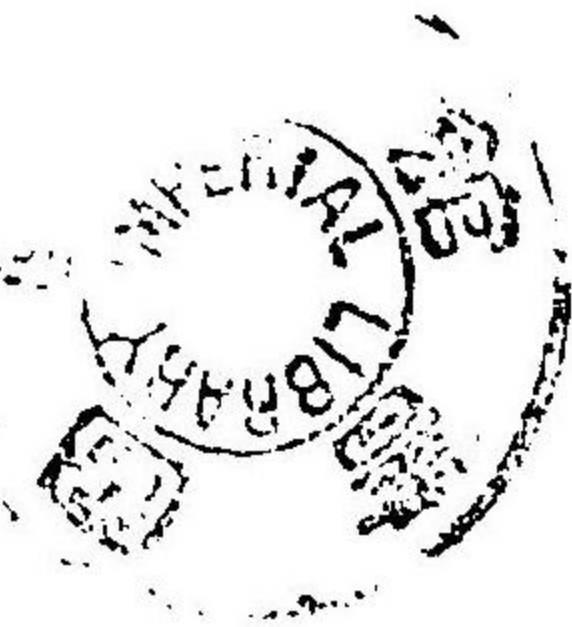
(18)

120

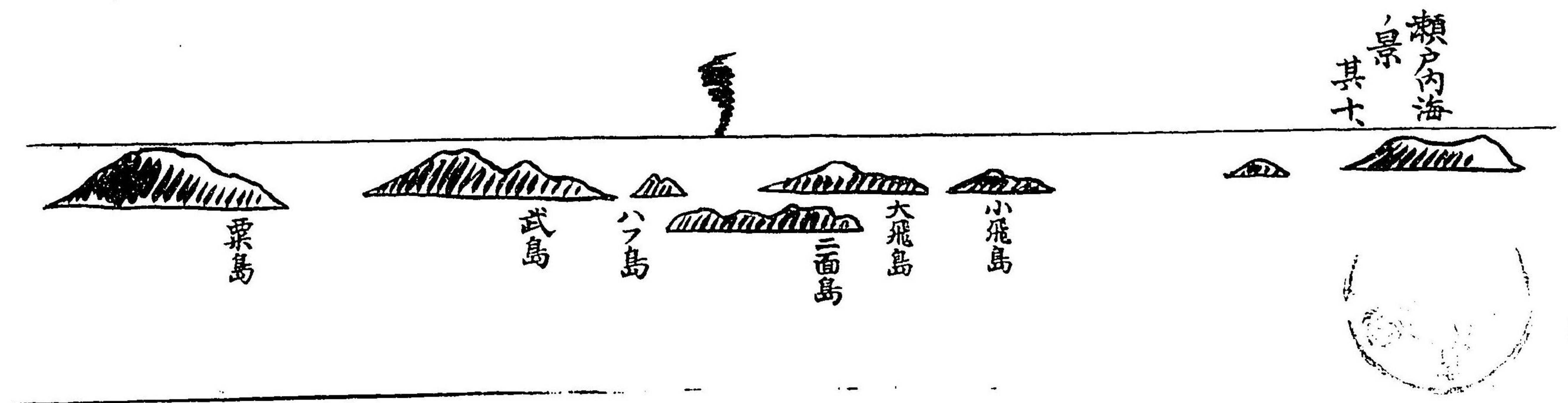
692



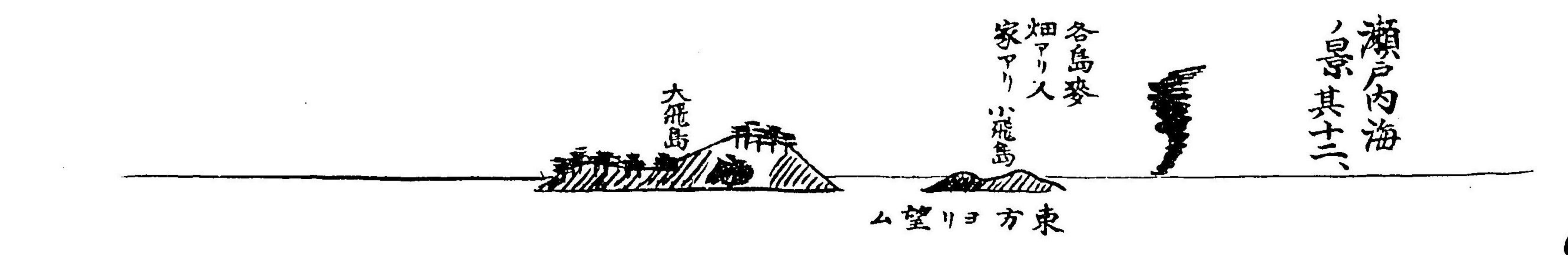
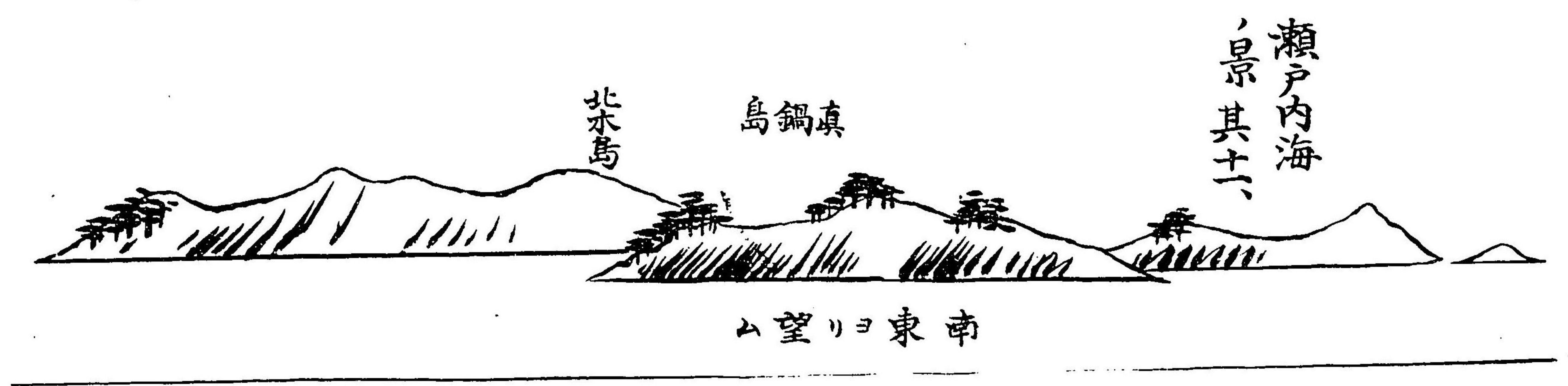
瀬戸内海、景其九、
南方より望む



(18)



(19)



(20)
692

投す

水光山色望風迎、頃刻忽分萬里程、知是客情愁動夕、玻窓魂冷月光清。

長沼支店の待遇は頗る懇切旅舎料頗る廉長途の旅行を慰するに十分なりき

四月廿三日、晴

廣島縣は海外移民の多きを以て聞へ、全國各移民會社の手は依りて年々海外へ渡航するもの四千名内外一昨年末は於て海外に在留するもの三万二千二十四人にして是等の出稼人の同年度本邦へ輸送したる正金實は二百二十九万七千六百六十六圓の巨額を達した。去れば移民會社は市郡到る處に勃興し五割七割といふ如き利益の配當を受け全國各地の移民會社も又競ふて支店若くは出張所を縣下に設置するの盛況に至り是等の諸會社は互に出稼人の募集を競争し一人二十圓の手數料の外各種の名目の下に莫大の利益を占め來りたるが近來移民取扱規則の嚴密となりし爲稍競争の弊を減し特別の契約なき限りは一會社の一箇月取扱人員八名を減したるが尙且經費を償ふて一割餘の配當を見ると云ふ

出稼人の所得は前述の如く廣島縣下の海外出稼人に依りて年々吸収せらるゝ資金の實際高は三百万圓以上に達し益節季及び年末を見計ひ海外より送金するもの多きを爲め各銀行郵便局は該季節は殊々多忙を感じ豫め資金の用意を爲す程にて廣島郵便局のみならず該季節は四十万圓内外の渡金ありと云ふ今一昨年末其筋に於て調査したる金額

二百二十九万七千六百〇〇圓を送金人員並ひは携帶歸國の人員を割當つれば一人の儲金百三十二圓七十錢弱となり更之を出稼総員一頭分すれば七十一圓七十五錢となり其所得金使用方を見るに総額の四分五厘は貯蓄し二分五厘は財産を買入れ一分八厘は負債償却一分二厘は雜費に費消する割合となり、時局前後の出稼人員は其筋の調査未了に屬し實際の統計を得難きも昨年廣島縣廳にて渡航を認可したるは契約移民百三十九人自由移民三千十一人移民取扱ひに依らざる渡航者千三百九十四人合計四千六百五十九人にして之を一昨年の四千九百七十八人に比すれば既に多少の減員を示し特に其人員の旅行免狀下付數にして其内少くも一方は認可后に至て渡航を見合せたるものあるべしと云ふ而して本年に入りては一層減少し各會社共甚せ閑散なりと云ふ時局の爲に却て其移民數を減したるは其内韓國渡航者軍隊服役者等もあるれば實際に於ては其比例あながち減少せしにあらざるべし西南地方は由來人口の過多なる處にして自然の趨勢として移民多きは明かなれ其殊に滿韓の地域に接近したる便あれば此方向に邦人發展の先鋒たるに頗便利なる位置に立つもの云ふべし

廣島市

元淺野氏四十二万六千石余の城下にして今縣廳所在地なり沼田郡の東南に位し東は直ち安藝郡に接し東西約一里半南北一里人口拾二万二千（明治廿八年頃人口八万二千七百余）地は南方海に面し東北部諸處に丘岡あり其他都て平坦にして太田川の下流分れて京橋川、元安川、猫屋川、天満川の數派となり市街の間を貫通して運漕最佳なり河口東南に宇品港あり大小汽船の碇泊に便なり此地上古は入海にして薩摩の類繁茂せしむ其後漸く開け處々に人家を建て鍛冶塚、本塚、在間、廣瀬白島の五ヶ庄をなして天正十七年毛利元就の孫輝元地を相して城を築き高田郡吉田より移りて名を廣島と改め遂に今日の都會をなす東京府を距る貳百卅三里卅五丁尾の道へ二十二里十三町岡山へ四十四里十一町なり此地の人口を吸収すること如斯は其地勢も原因する處あるは勿論なるも其内容の亦他ふ勝る所あるは自然の勢にして即ち學校は廣島高等師範學校、全師範學校、中學校、縣立職工學校、第四佛教中學、商業學校、高等女學校、私立高等女學校、私立廣島女學校、私立明道中學校等あり新聞社に藝備日々、廣島中國、廣島日報あり、其他公私諸團體は商業會議所、眞宗崇徳教社、開教本部、廣島圖書館、廣島育兒院、廣嶋感化院、廣嶋保護院、慈惠學院等を以て其一斑を知るべし市中重なる場所は廣嶋城、二葉山、泉邸、宇品港等なるべし廣嶋城は市の西北部にあり天正年間毛利輝元此地を相と文録元年工を起し三年にして落成す慶長五年毛利氏長門に從り福島正則藝備兩國を領して此地に居ること廿年元和五年淺野但馬守長晟安藝及備後北部の八郡を領し傳へて十二代長勳に至り明治維新となる明治廿七年日清開戦の際 大元帥陛下の大本營を此地に進めらるゝや城内の第五師團司令部は行在所に充てさせられたる所なり

二葉山は廣島停車場の北大須賀村二葉山にあり明治七年開きて公園とす饒津神社（淺野長政の靈を祀る）其内あり
泉亭（縮景園）神田川を隔て、饒津公園と相對し上流川町の北端あり元和五年淺野長晟入國の翌年此地に邸弟を築みて庭園を修め爾後世々の國守其庭地を擴めて修補を加へ二百七十餘年の星霜を経て今淺野家の有ふ屬す反別凡四町幽趣は富むと廣嶋

一 第一なり

宇品港市の南端にあり明治十七年築港の工を起し同廿二年十一月中を以て終る經費三十四万圓沿岸の地延長二千九百二十五間總て六十二万坪あり時の知事千田貞曉有志者と謀りて此大工事を經營したるもの廣嶋の繁榮や種々の原因あるべしと雖も此港の設計當を得て國家の大事と裨益を興へ爲め内外の富力を此地に集注せしめたるの功や非常なるものあり治者の位置にあるもの、眼識の高下は直ちに其地の一盛一衰にかゝる此地廣嶋停車場の外に横川停車場（市の北部横川町）已斐停車場（西端）の二個所あり以て行通の便利なるを知るべし
午前七時より先づ廣嶋市中を見物す停車場を出で、先づ二葉山公園地に至る此地公園と稱するもの比治山（廣嶋ステーション）の南鶴見橋東（江波）市の南端皿山射的場の南ありと雖も稍公園の觀あるを此地とす園内未だ設備完からずと雖も廣嶋の地勢を大觀するは此地を以て第一とす廣嶋や全周悉く花剛岩東海田市（約二里）の北に掲倉山五社宗

山（六六四米）鬼が城山押出山を以て其屏障となし北は可部川の清流可部町の南より來りて沖積層の一區域をなすと雖北濱田と通せんよは可部峠あり東北吉田、三次と通せんよは大林村、向山村等の峽路あり西は三重半を隔て、廿日市の西に經小屋山、折敷畑山（四一四米）極樂寺山（七〇〇米）等の連峯を以てし猶近く市の西端已斐停車場の西銀山（足利時代武田信光五世ノ孫信武安藝の守護となりて此地に治し傳へて三子氏信に至る今城墟なし）大茶白山（四〇〇）見越山、鬼が城山、峯山を以て五日市廿日市の小平地を界す市は可部川の三角州と立ちて南海田灣の西端宇品嶋の傍に良港灣を扣へ遙かに似嶋江田嶋能美嶋那沙美嶋嚴嶋を以て海門を扼す之を戰國時代の形勢に見んか守るよ便攻むるよ不可是を今日の時勢に考えんか吳軍港のある以其一班を知るべし只廣嶋の平地乏しき爲め著しく其發展を許す能はずと雖も河川多きを以て其下流を埋立地とせば恐らくは此地亦小大坂たるやも知る可からず將來日本が大陸地方に事ある毎に此地の繁盛を加ふるは既ふ前例のあるあり廣嶋人大よ奮て可なり公園の風色其設備全からず廣嶋人の經營としてはあまりよ殺風景たるを免れざるも老松の間より望む廣嶋城の壯觀は稍旅客の目を喜ばしむるに足る若し夫れ氣靜かなる夜四十八城樓よかゝる一痕の明月を見れば廣嶋や亦人間のものにあらざるべし常磐橋を渡りて城内に入り西練兵場に出で市中を徘徊して更に八丁堀より淺野家の泉邸に至り來意を通して庭内一覽を請ふ幽境敢て後樂園栗林公園の宏大と及ばざるも亦中國地方有數の勝區たり出で

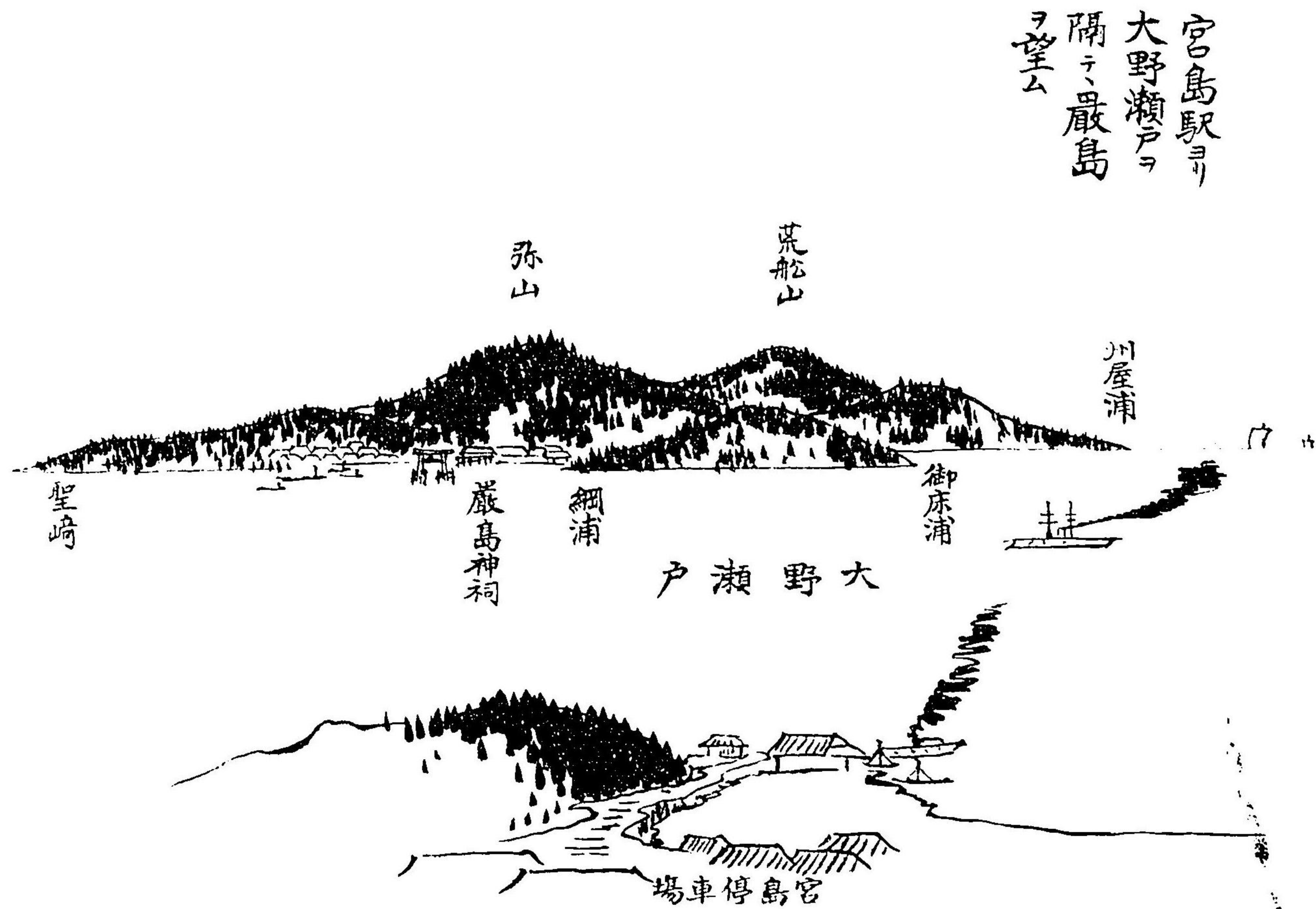
市中書林を訪はんとして得ず苦辛多時漸く一小店を發見す思ふに此地や固より思想の地にあらざる可し靜思默考宜しく山深き處あつてすべし此地の本色は活動みわらん市内の雜沓するに比しては建築多くは舊式にして洋風宏壯の美を見る少なし川流亦淺く水必しも清からず夏期政軍の製來多かるべし市の名産としては

牡蠣

廣嶋城南凡三十里皆鹹池を作り遍く剩竹を挿み遠く望めば水柵の如し即牡蠣田なり大率五六月を以て種を下し翌年八九月苗生す

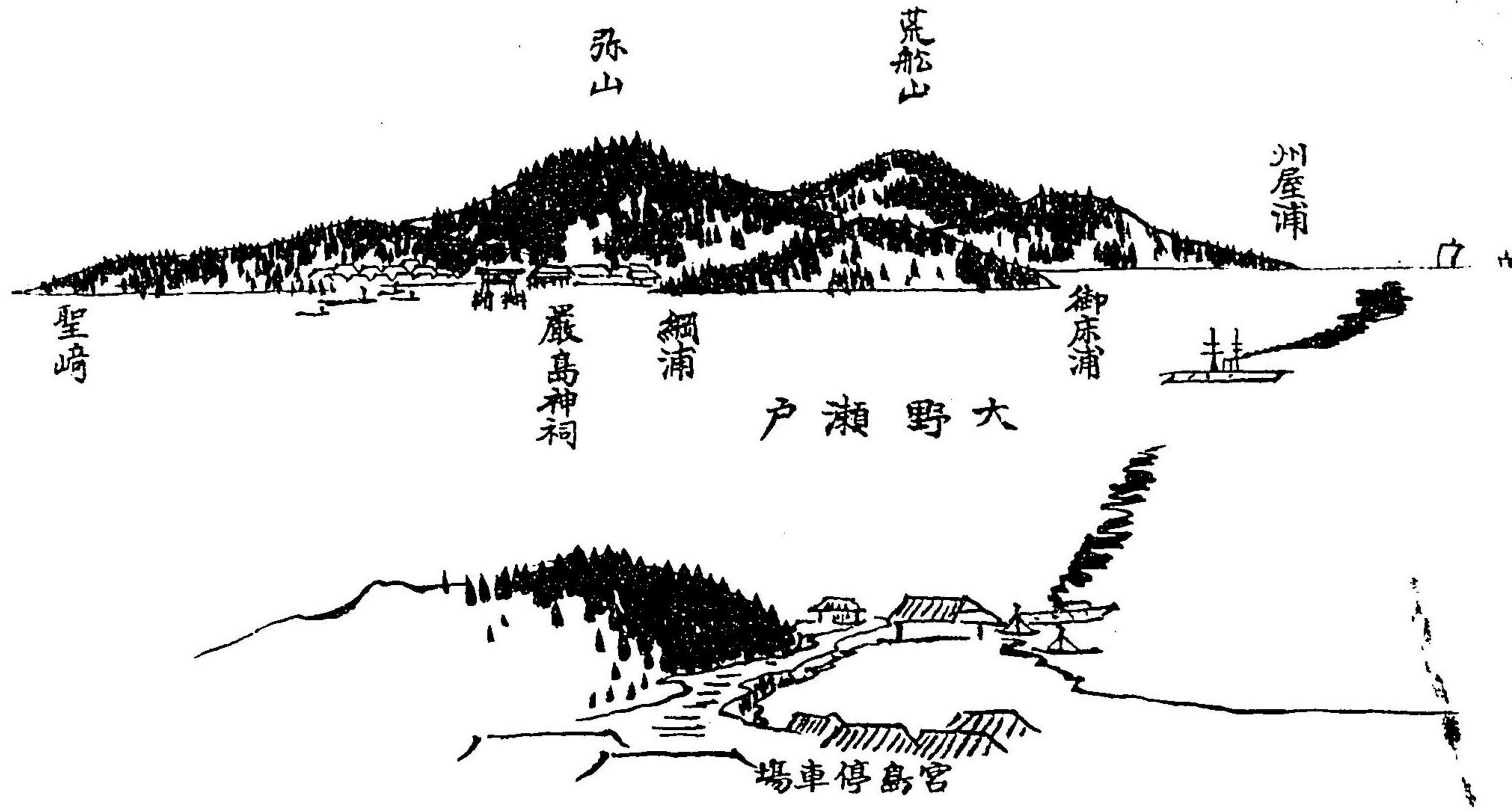
匝地皆壘不碍潮、時滯斥鹵也豊饒、洵々三万六千頃、一夜寒風長蠣苗（星 巖）あり線綿（本縣下の日本綿は内地産よては大坂に次ぐの收穫あるも近來は外國綿輸入盛なる爲め到底十分の發達を爲難かるべし）あり午後二時發宮島驛より向ひ嚴嶋遊ぶ廣嶋市中を散策しては只紅塵の俗境を見るのみなりしも漁笛一聲市街を離れ海岸よ浴よて走るに及んで瞬一瞬に畫中の人となり來りしこそうれしけれ潮頭航道を距る數尺身は正し碧茫々の濤上を走るの感あり恰かも熟練なる手品師に操られつゝあるが如く恍乎として海光に目を奪はるゝ内宮島驛着車の聲も驚きて急速下車して埠頭より走り十五分間にして所謂日本三景の一部を實見すかの運びとはなりぬ時正に午後三時半なりと名よし負ふ嚴島や正は如何

嚴島



宮島驛
大野瀬戸
隔て嚴島
ヲ望ム

宮島駅
大野瀬
隔て、嚴島
ヲ望ム



75

市中の風景を眺めると、昔の面影を多く見出す。此處の町は、思
 はずの地味にあらざる可し。静思默考宜しい山深き處に於て、心
 市内の雑沓するに比しては、建銀多くは舊式にして、洋風宏壯の美を見る。少なし。川流亦
 澄く、水も必しも清からず。夏期蚊軍の襲來多かるべし。市の名産として、

住 業

廣嶋城南凡三千屋。鹽池を作り、通く刺竹を挿る。遠く望めば、水母の如し。即ち鹽田なり。
 大車五六月を以て種を下し、翌年八九月苗生す。
 鹽地色翠不得潮、鹽清斥鹵也。鹽饒、海を三万六千頃、一夜獲取長鹽苗（鹽一担）
 あり。線綿（本縣下の日本綿は内地産）は、大坂に次ぐの收穫あり。近來は外國綿輸入
 盛なる爲、到底十分の發達を爲難かるべし。おもむき、午後二時、廣嶋市街を、向ひ廣嶋と遊み、
 廣嶋市中を散策しては、其紅塵の俗境を見るのみならず、海濱一帶、市街を離れ、海崖と俗
 名で走るに及んで、脚二膝に當中の人となら、來りしとぞ、わかれしが、海濱の道に、大
 勢は正し、嚴島神社の浦上を走るの感、わが心も、昔にも、熱帯なる手品師に、操らるるが如く、
 恍乎として、海光に目を奪はる。内宮、嚴島神社の慶、驚きと、急遽下車して、海濱を走り、
 五分間にして、所請日本三景の二部を實見す。其の運びとは、なり。以時正に午後三時、
 宮島を以て、復と嚴島を正し、如何

大聖木の東にあり、周回六里三三三、南北一里全島花剛岩より成る東北にある高峯を彌山(千三百六十五尺)と稱し西南にあるを荒船山といふ又七浦あり各々神社を安す島と大野との間の海峡を大野の瀬戸といふ市街は彌山の北麓海濱に在り東西二丁南北十町人口四千を有す北灣を嚴嶋港といふ往時は廣嶋へ輸送すべき百艘の貨物は先づ此港に陸上をなし更に舳に移して廣嶋へ送るの例なりしより船舶常々輻湊せしも今や直ちに宇品港へ入り大に出入船舶の數を減せし只有名なる嚴嶋神社あり爲る遊人の杖を曳者陸續絶えず

山陽鐵道渡船橋に着せしより濱の町海岸通を経て嚴島神社に詣ず宿引一群咄々、社境へ入るふ至迄跡をつけうるさき事限りなし嚴嶋神社の國幣中社にして市杵嶋姫、田心姫、湍津姫を祭る古より種々の附會説あり證とすべき文書乏し延喜式神名帳に安藝國佐伯郡伊都伏嶋神社名大神とあり三代實錄に贈位の事二度まで見れば當時祭式の盛なりしを見るべし斯くて平相國清盛安藝守となるや崇敬の心深く更に神領を増し修理を加へければ世々稀なる壯觀となれり名高き海中の大華表(総高八間三尺七寸)屈曲百四十八間の廻廊等は云も更なり回廊の楣間古今名家の揮毫せる無數の書畫中光信の卅六歌仙應舉の鷄兆殿司の蝦蟇仙人尙信の羅生門常信の三福神探幽の經祖仙の猿鹿抱一の山水等筆力の雄健を見る五重塔千疊敷は東小丘上にあり三笠濱一帶の青松長く海中より出し満潮の時に賽客船にて大華表をくぐり來る風光稍愛すべし況んや

夜間百八灯の明燈、藍碧の海波を照し來らんか自ら是れ龍宮の現世、浮び來りしもの正に舊式のイルミネーションに非ずや西して大元、園に至れば大元神社あり清泉の涌き來處、瀟洒たる東屋雅趣ある茶亭樹立深き幽雅の仙境余には嶋中第一の勝地と見へたるが如し陶晴賢の毛利氏と戦ふや此處に陣處を構ふと云ふ（元就の上陸したるは嶋の東岸杉の浦の西南なるが如し）固より堂大の土地古代の戦鬪の小規模なるを知る余思へらく嚴嶋神社境内の景や人工の美を極めざるにあらざる然れ共此地亦失望の一に數ふるの已を得ざるを如何せん嚴嶋や社殿の人工を除き去らば餘す處何物かある自然の山容敢て偉なるにあらざる海岸の出入敢て奇なるにあらざる凡單調日本三景の一たる價値何かにある、是れを和歌浦の風光に比し田子の浦の風光に較べ屋嶋の眺望に思及ば、嚴島必竟言ふに足らず不幸三景の一たる明媚の光景を觀取し能はざるを遺憾なる而も遠く廣島宇品を望み能美島江田島を望まんか形勢雄大海色畫よ、も美お嚴嶋の勝や寧る此間にある鷹目數里顧盼の間にあり若し夫れ多忙にして一顧の閑を得ざるを歎するものありとせんかろは深く憾むに足らざるべし篠崎小竹の句よ海連嚴嶋勝區多盛氣浮來映曉霞は少なくとも實際以上の舞文たるを覺ゆ只比較的に附近の遊覽地として絶好の佳地たるのみ由來日本の紀行文類其實に過るもの比々然り又人文を舞はして理想を主とす是れ實に驚らざる所以なり晚景紅葉谷の一旅舎に投す食後町内を散策すれば店頭宮嶋細工（竹製品）を販賣するもの多し

四月廿四日、晴

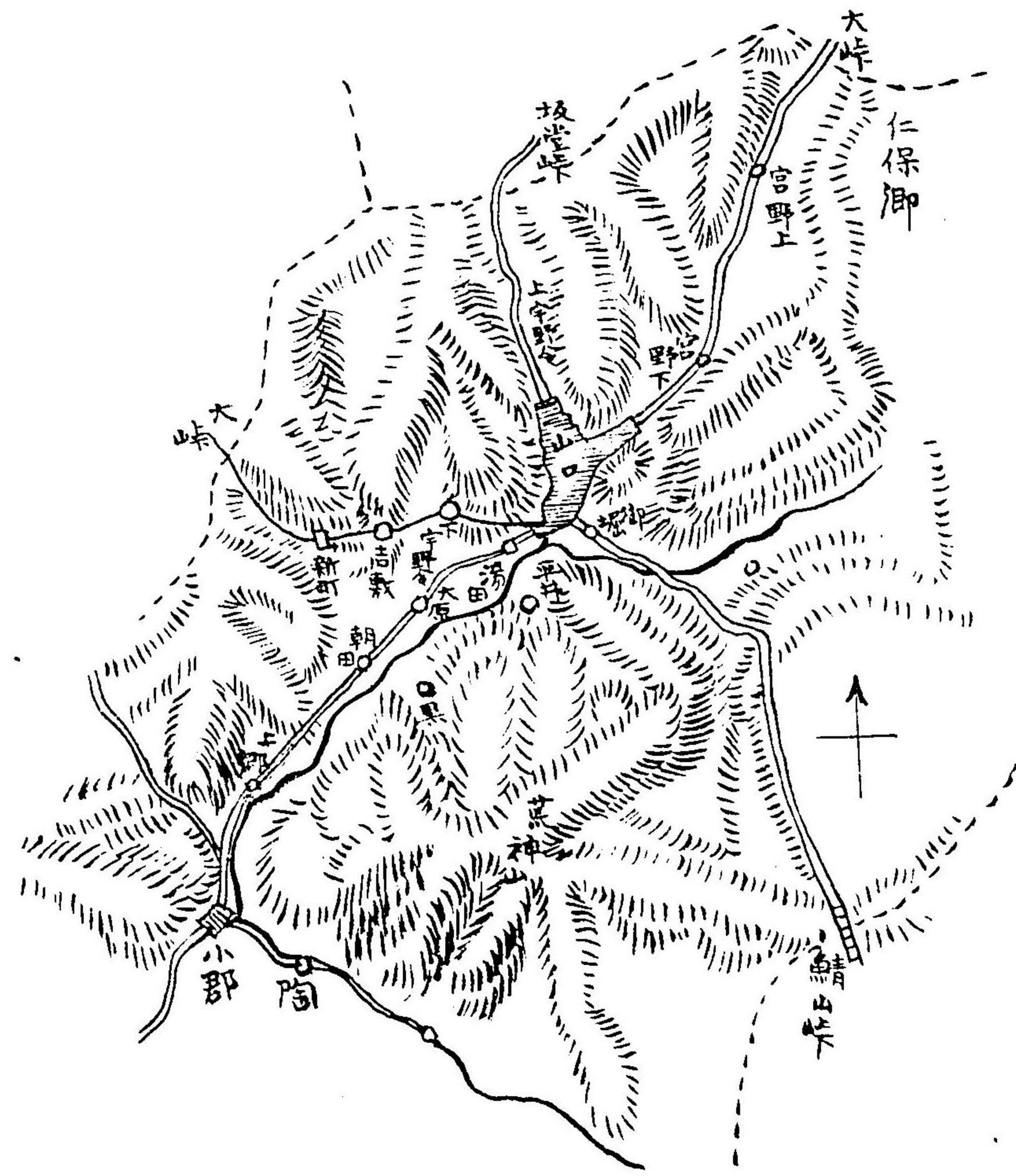
嚴嶋神社境内の風光に失望したる我にせめて彌山絶頂の眺望を豫想し是を山上より眺下したる藝海の風光に償はんものと茲に彌山を攀ぎ進むべく決心せしものから午前七時輕装して瀧町の傍大聖院より登り一の華表を過ぎ進む一町瀧の宮あり白糸瀧あり青葉繁れる間をくぐりて五六町にして茶屋あり宮嶋驛廣島方向の展望によし名物の力餅亦食すべし十八町にして仁王門に至る彌山神社は猶數丁の山上あり僧房一個傍らに清泉湧く屋内よりうら若き婦人の出入するを見る更に大塊の石壁を傳ふて昇れば鐘樓あり巨鐘をかく治承元年平宗盛の寄附する處絶頂は近づくと從ひ巨岩怪石磊々として或は自然の屋を作り或は疊拾敷を敷くべし頂上平地なし樹木鬱蒼眺望自由ならず茲に第二の失望を來し意氣大に沮喪す流汗を拭ふて静寂の間に携えたる夏蜜柑を喫すれば好味好味又何をか問はん忽ち下界より一群の女子老弱合せて三十有餘一老漢の先達に導かれて新四國八十八個處の巡禮をなすに會す蓋此嶋内の神社佛閣多數あり至る處所謂札番號の貼付を見る信心登り盛あるかな漸くにして樹間寸隙の眺望を許す處あり事要塞地帯に關す謹で其記事を略す午前十時半下つて神社に歸る十一時廿六分發の汽車に投せんとす連絡線既發して彼岸あり直ち一船を賃して急遽其後を追ひ忽ち停車場に達す直ち乗車山口より向ふ岩國（慶長五年より吉川家の居城）柳井津（柳井縞、甘露醬油あり鹽田多し）徳山（四万石毛利元利城下）三田尻港等を経て小郡に達せしは正に

四時なりき雨少しく降る腕車を馳せて山口に入り坂戸屋に投宿す

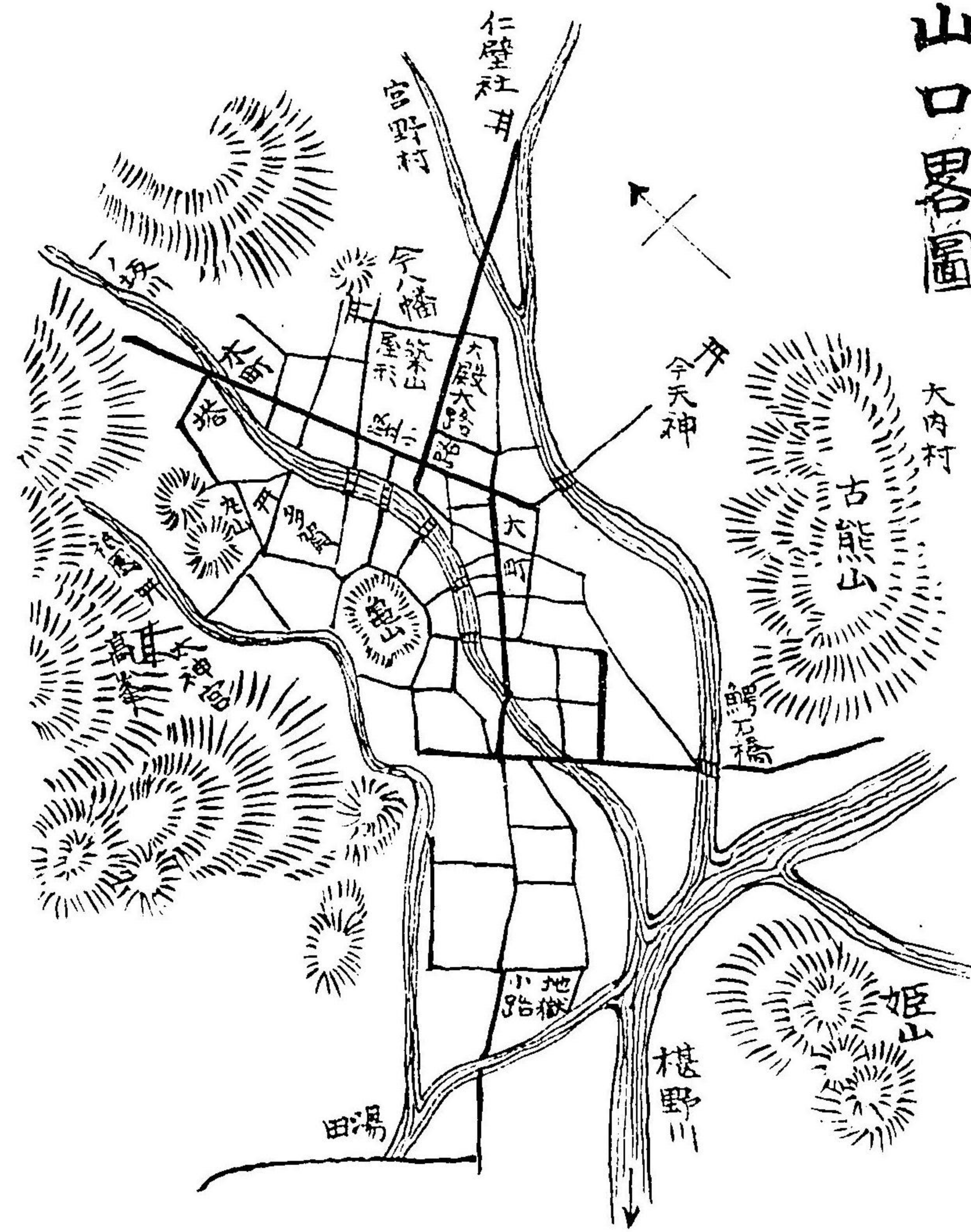
四月廿五日、雨
 山口縣に入りて先づ吾人の注意を惹起するものは蓋し明治の新天地に國家有用の人材を供せるの事實なりとす所謂薩長政府なるもの一部の名譽は此山深き谷合の擔ふ處西南地方の一偉觀たるを失はず是を地理的原因より見んか長防の地や東洋風雲の發生地たる支那朝鮮の境に近く古より大陸地方に交通の便あり維新前より西歐諸國の出入多く馬關港頭早くも泰西文明の刺撃を受け加ふる大藩の勢力門下有用の器多く風雲の機熟するや茲ふ龍蒸虎變忽ちにして天下の樞機を參ず是を歴史的關係を見んか中古大内氏の興隆小京都の觀をなし朝鮮明國樹合の船を掌り學藝夙に西南の中心点をなし世に山口版なる書籍の印行を其一班を示すもの又西歐ザビエーの一行早く泰西の思想を傳へ加ふるに近世長藩の史上の位置は海門を扼する半島の地勢の好影響を受けて字内の大勢を達觀せしめ數百年來此地の智識が世界的思想の涵養に適合し居りしもの妙はしかく維新の導大線よりて其發展の機に到達し來る人材の輩出豈偶然ならんや政權に成功したる山口は正に如何の現況あるか吾人の山口を訪ふ所以茲にあり

山口市

山口は山間ありて東は鯖山峠荒神山の連嶺に圍繞せられ鯖山トンネルを経て東南宮市三田尻に通し北は大峠を界して石州津和野街道に通し坂堂峠を経て長州萩町に



近附口山一分万廿

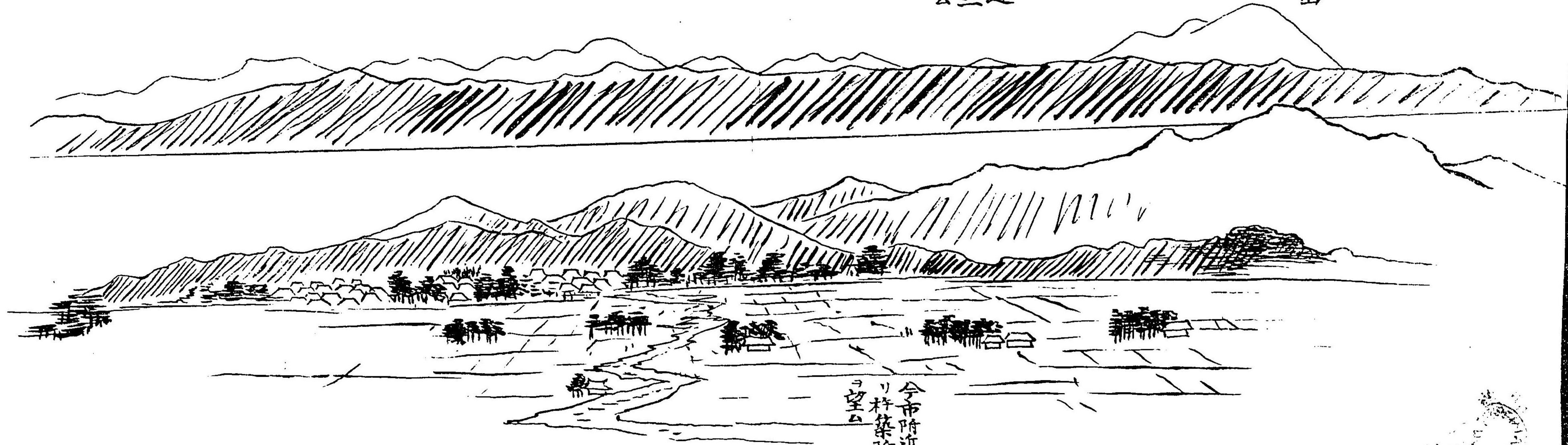


山口畧圖

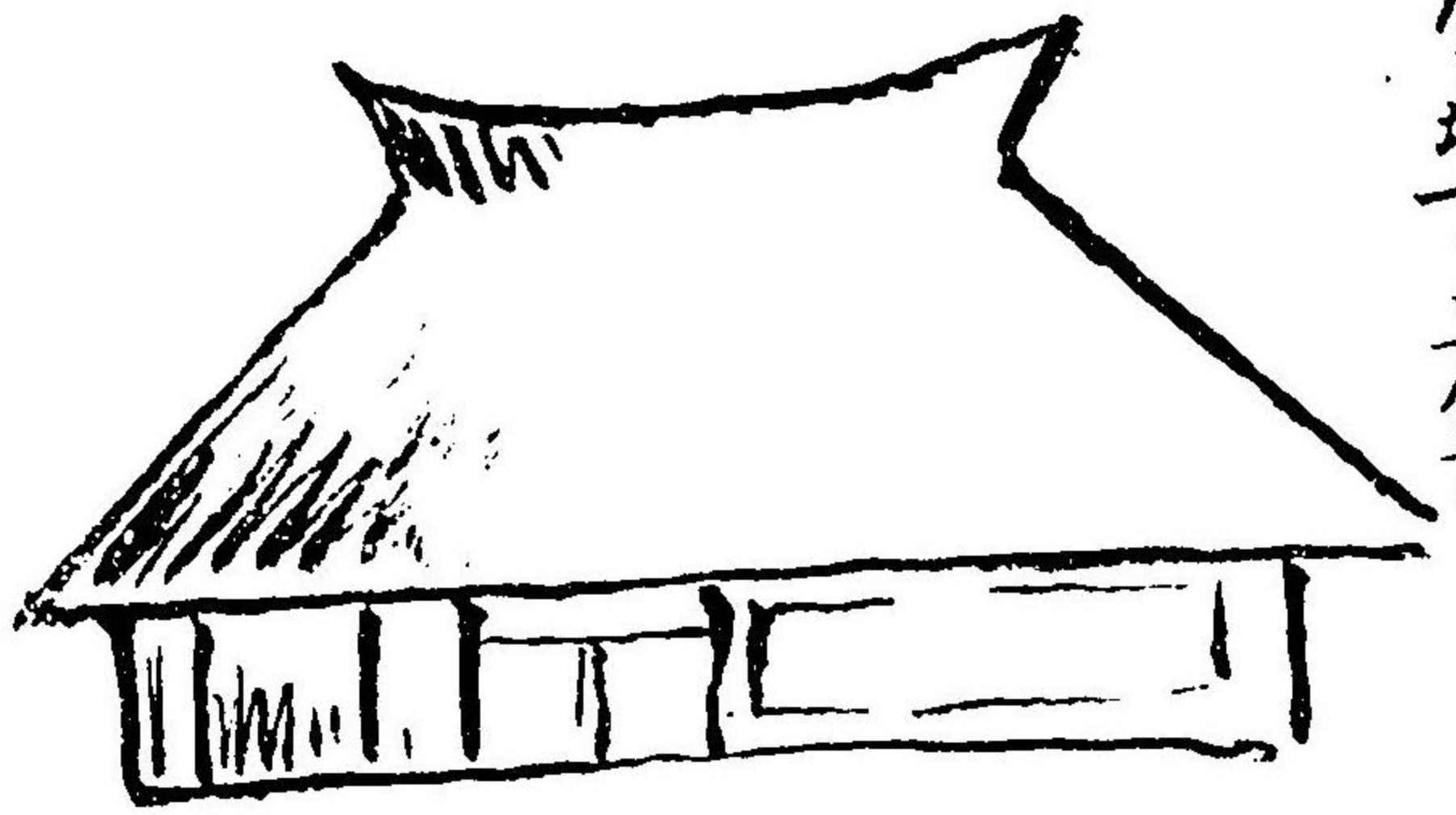
7/1

村集附近
三瓶山
瓶山望云

三瓶山



今市附近
リ村集附近
望云



出雲地方農家



出雲地方農家



城山(全上)あり鼓山北にあり南天神山(共五百尺)等あり其他丘岡起伏して障隔多く僅る西南の一方のみ少しく開けたり椹野川(防長國界なる物見岳より發す長七里)其間を貫流し山口市内より於て一の坂川の小流を受け相合して海に注ぐ其河口より小郡港あり然れ共水常淺く砂泥堆積して小舟だも通し難し昔時は同港より山口の鰐石橋のきは迄舟楫の便ありたりし由なるも今より見ればおぼつかなし西方下の關への大道は二の川の堤に沿へり方便山の山脈は概して赭山禿亢たるも爾余の山は椎櫟、松、柏等繁茂して薪炭の料頗る饒多なるのみならず花剛石の石材を出す處少ならず一帯の沖積層地土壤は膏腴なりとは稱すべからず氣候は頗る不順なり一年中日温度の最大較差攝氏の二十度及び事あり温度一日の較差三十に及ぶ年中攝氏三十度以上の日は稀よて氷點下の日却て多し平均十四度内外なり北風常に吹きすさみて天曇りがちなり平原の長さ南北凡五里東西廣き處も一里よ過ぎず上古此國は四國あり其一たる與之岐國は即ち此平原を主とす今も郡名を吉敷と謂ひ又山口の西隣に吉敷村あり内に一古墳あり吉敷國造の遺墳ならずやと思はる今博士谷本氏の調査せるものに據りて此地沿革の一斑を記すべし山口の名は固より舊くわらはれず但夙より官道の一驛たりしを并は右吉敷村の邊に朝倉八幡宮といふあり往昔八幡太神の神靈を豊前宇佐より京師に勸請せしとき途次茲に宿泊したりし跡ありと云ふよて察せら

るべし又山口町の東郊に式内仁壁神社あり通稱三の宮と謂ふ頗る古社にて舊史にも其名見たり同しく山口町の南郊に吉田村あり平清水八幡とて大同四年の鎮坐其寶殿は當時の舊物其まゝ遺存すと言ひ傳へたり況んや山口の町名も早間田と云ふが今も残りたるをや早間田と早馬田にて驛出の轉訛なり想ふに上古は國道今の如く海道にあらず山口より仁保通の山道なりしは非ざるか山口町の名大に世に著はれたるは大内氏の玆地に居を卜したりしを始めてす抑も大内氏の原と多々其氏ふて朝臣姓なり百濟王聖明の第三子琳聖の後なりとぞ推古天皇の十九年投化し其船此國に着したれば遂に止りて玆に居る子孫當國の介或は權介を世襲す山口町の東郊に大内村あり長者山あり是世々居館の趾なり御堀村の名亦是を示すみ足れり大内村氷上山興隆寺の山腹に營窟なるものあり宛然古墳なり同寺は琳聖太子と由縁淺からず太子の冠劍今猶存す此古墳やがて太子のものならざるか琳聖の遠裔弘世南北朝の時にいで、周防長門石見の守護職を補せられてより權勢漸く強大となりしがこの人始めて山口に移り住む是を山口繁榮の濫觴とす弘世より九代義興に至り周防長門石見安藝筑前豊前六ヶ國及肥前國の一部をさへ領して天下の巨鎮たり其私財を献して朝廷の節會を再興し奉り又亡命の將軍を扶助して京師を回復したりしなどは今更、喋々を用ゐず義興頗る意を政治に用ゐたりしと見え大内氏の諸法令等其今日に遺存せるものは多く義興の時に成れり子義隆文弱にして武將たるに適せず榮華極まりて終ふ逆

臣の爲めに亡されたり而も義隆の時を以て實に山口繁華の頂巔なりとす當時山口の繁華は京都に亞がりと云ふ曾に繁華の次ぎのみならず其實天然に人工に京都と相肖似したる處又模倣したる處頗多し先づ山河風土略相似たり山岳の向背だに京都に髣髴たりと云況や弘世の移りてより勉めて京都を模寫せんとせしをや當時山口町の廣袤今詳に考へ難きも人家凡二万余軒とありしならんと云之を今日山口町の戸數に比すれば五六倍の多きを見る去れば其境域も從て廣からざる可からず今の湯田町の前後迄は延長し居りしならん并は今日山口監獄署の在るはとりに地獄小路なる古町名のこれより古の牢舎ありし趾なれば名づけたりと牢舎が市街の中央にありしとも思はれねばなり南は鱒石川を限りしは嘗て此川を境して合戦せしことありしと云ふを以て知らる北は今の木町邊を限らざる可からざること土地自然の形勢なり東も三の宮邊を限りとせしこと猶今の如くなるが如し今之を概測するに豎三拾七町横二拾五町あり但今日は町筋の左右は多く田畑にして裏町ある所少し懸ふよ今の町裏田畑の所當時人家櫛比充實せしならんか山口の町名今存するもの五十四、曰く大市、中市、米屋町、道場門前町、下豎小路、上豎小路、西門前、立賣町、堂の前、圓政寺町、道祖町、下小路、石觀音町、下金古曾町、上金古曾町、八幡馬場、野田町、築山町、木町、圓小路、松田殿小路、飯田町、女郎屋町、後川原、片岡小路、栗本小路、新馬場、錢湯小路、久保小路、今小路、中川原、相場小路、松の木町、馬場殿小路、御局小路、北野小路、米殿小路、相良小路、新町、早間田町、今市、今道、

鰐石町、大附町、新橋町、奥小路、荒高町、糸米小路、田町、中讃井町、下讃井町、湯田町、湯屋町、伊勢門前なりこの外徳大寺殿小路、千石小路、鷹ヶ小路、犬ガ小路、鈴木殿小路、中野殿小路、隨徳小路、南昌寺町、藏元小路、唐人小路などは僅かふ口碑に存して今知る者鮮し就中小路を稱するもの廿七、誰か京都を想起せざらん（一書には山口町を洛中に準へて一條より九條迄の名を寫せし由）、清水、鳴瀧、吉田、平野、嵯峨、清瀧、松尾、拇尾、高倉など郊外遠近に散在せるは皆京地の風流を摸せしときの遺名なるべし尙且篠目村には將軍の森とて洛東の將軍塚をさへ寫せしと云、大内氏の居館を築山屋形と稱す門前を大殿大路といふ今龍福寺の在る所なり東西凡そ三町南北凡そ二町もありなん又一通路を隔て、背後に今も猶築山と云ふ所あり是は當時の園囿なりしと云ふ又龍福寺の左に千石小路の名あるは當時倉庫のありし處なりとか居館には固より城廓を構ゆる事なく築地のみなりしなり築地の間に公家町凡そ五十屋敷ありしなぞかけり彼の月郷雲客の亂を避けて此國に下向せしものは是邊に住みしよや將軍義植の居館は右築山殿の東北凡そ三町許り江良村と云ふ閑靜の地に設けられたりと右居館園囿の宏壯なりし事はさこそ想ひやらる延徳の頃殿中見物禁止の壁書と云ふものあり「殿中見物の仁事、堅固御禁制之處、勳知音之族、以密々令許容、至宿御坐鋪邊之條、以外之次第なり、於自今以後、雖爲御庭、不可入見物之者也、慥雖爲出仕祗候之人、於外様衆者不可見與、若於背此旨者、可有殊御成敗之由、所被仰出也仍壁書如件、とあるを見れば其宏壯な

りし事を想像するに妨なし市街は固より武家町と町家とふ別たれたりしなり義隆の時になれる「大内殿有名衆」云ものなり國衆五人親屬家來十一人奉行三家老五人小奉行十二人小坐敷衆二十五人侍大將并先手衆百四十二人御伽衆二十三人などを始めとし尙外に小臣外臣固より夥しかりしならん又右有名衆の御客衆として二條關白尹房、持明院基規、冷泉大納言爲和、日野中納言晴光、一條兼冬の五人を記し又今客として二條家の大夫岡兵部及俗人園、壹岐の二人を注せり此外一時下向滞在の人固より少なからざりし幾内の商人も多く來住して衣服器財悉く都より劣らざるものを嚮きたり風俗の頽廢せし事は文明十八年四月廿九日の制令中「一夜中大道往來之事、先御代御禁制事悉畢、異相不審之者等、專可加制止也、但旅人事者糾其宿可許往來也一薦僧於下猿引事可拂當所并近里事、一路頭夜念佛停止之事一巡禮者當所之逗留可爲五ヶ日也、過五ヶ日者不可許容事云々あり又長祿二年五月廿二日の御禁制「一夜中大道往來の事、一辻すまうの事、一路頭に於て女をとる事一夜中湯田の湯へ入事などあり山口に五社といふあり高嶺太神宮、祇園社、多賀社、今八幡宮、及式内仁壁神社なり其構造多くは樓門より床を構え宛かも京流清水の社に似たり當時の建築見るべきもの今多くを殘さるるも瑠璃光寺の多寶塔は香積寺の名どりとして層輪夕陽と相映し今昔の感よ堪えず應永年間大内盛見其兄義弘菩提の爲に建立せしもの舊記に徴するに總費目二百二十九貫二百八十九文豊前國祖を之よ充て永正十五年に建立したる高嶺太神宮なり

内宮外宮悉く伊勢大廟を摸し式年の造營今第十四回目とす今八幡は石清水、仁壁は加茂にも應じたらん又祇園の祭禮の如きは山鉾等の高大なる今猶他所に類稀なり氷上山は山口町の東郊にあり山口周邊の山岳皆内方に向へるにこの山のみ獨り背きて聳峙せること比叡山にさも似たりと茲に日吉山王及妙見社を營み又延暦寺になぞらへて天台宗興隆寺を起し堂塔の數一々列舉し難し百餘の僧坊五百の衆徒其隆盛れさ、檜山にも譲らず維新前迄持續したるも偶火を失して灰燼となる正平年間大内弘世京都の織工を招聘し糸米小路に織舎を創む應仁の亂京都兵燹まかゝりて荒廢し西陣の機業未だ開けざりし時より方りて山口は實ま之が專權を握りたり其他大内塗あり文質共に愛すべし藝術に於ては雪舟茲に居り宗祇も茲に宿し儒學には土佐の南村梅軒あり天文中朱學を唱へ清原氏亦侍講たりき義隆の好學は大内藏板の聚分韻略を出し義隆漢文の自叙あり又朝鮮に經書を求む耶蘇教又嘗て此地に盛行し聖フランシスコ、ザビエーは天文十九年より此地より日本西教史に據れば千五百五十四年より山口の市人のみにて二千餘人の洗禮を授けられたりと斯くも山口の盛大なりしは大内氏に實ま國勘合印を所有し又朝鮮貿易に従事したる爲にて又領内石見の銀山を發掘したる故にもよれりと云ふ右は山口中古繁昌の一斑なるが天文廿年陶氏反して義隆父子を弑し毛利氏の兵茲に来るに及びては大内時代の榮華一夢の如く不自然の成立は漸次此山間の小都會を衰弱せしめ寒寂なる一市街地と變したり文久三年藩主毛利敬親（毛利の稱は祖先が相模國の毛

利莊を領せしより起る）阿部郡萩城より茲より移り城きて居るに至りて稍其觀を改め以て明治維新に及ぶ人口一万七千東京を去ること二百六十九里餘京都を去百卅八里赤間關を去る十八里餘なり

余が宿舎なる坂戸屋の女中他の女子を呼ぶよスーマ、ヨーマ等の語を以てす其所以を知らず頗る異とせしにスーマはスーサン、ヨーマはヨーサンにてヤマのサを略せしを解し得たり飛彈國高山にては人を呼ぶよ同一の言語を以てす言語の變遷上注意の價値なきか電燈なく電話なく、しんとしたる睡れるが如き市街の事とて余は熟睡のあまり午前七時半頃漸く旅寢の夢よりさめてさて市中見物よとて小雨のそぼ降るを犯して先づ街頭に立ては第一着に余の注意を呼びしを町内書林の多き事とす然も東京諸新聞も廣告せる新刊行物續々既に古本となりて店頭にさらさる是あかな山口縣や幽靜閑寂の此山口は正に思想の地たりしなり見るべきの商品さく飾るべきの物質的文明機關なきも由緒ある山口町は此大なる精神界の一大繁榮を有す英雄出所山水好天真爛熳たる偉人は多く此種の山中に出づゲテ曰はすや智能は閑靜の地み成形し品位は社界繁雜の中に熟すと山口縣の天下に重きをなす所以豈偶然ならんや嘗て余故外山博士の藩閥の將來を讀むよ國內人口比較して中等教育以上の教育あるものの比例は日本帝國中山口縣第一位あり世人徒らに藩閥の破らざる可からざるを云ふ然も實質に於て斯の如くんば事實上天下の權力は教育ある人士の多き地方に落ち來る必然のみ山口縣や輕

んす可からず天下具眼の士何ぞ人材を養成せざる西の方七八町にして龜山公園あり町内を眼下に見、四時の風光共に宜し公園の地形亦防長の二州形とれり午砲の据付あり銅像五基丘上より立つ贈從一位毛利敬親陣羽織馬上の像其基石の四側に贈正四位益田親施全福原元佃全國司相全清水親知の像あり舊徳山藩主從三位毛利元利東帶の立像舊岩國藩主贈從三位吉川經幹鎧直衣立像、舊豊浦藩主贈從三位毛利元周狩衣立像舊清未藩主贈從三位毛利元純甲冑立像是なり想起す元治元年七卿の長州落ち幕府の長州征伐明治維新薩長島羽伏見の活劇如何に長州人が英氣亂發活動の縦横なりしかを然も山口町に來りて此丘山に立てば淡夢春雨に洗はれて新緑滴らんとす何等の好コントラストを師範學校山口高等學校山口中學校防長新聞社等其東側を繞る、高嶺城趾高く北より登り右方より山口縣廳を臨む縣廳は元治元年敬親卿が萩城より移りて館せし遺物なり夫れより縣廳の左より出て高嶺大神宮詣す其北より法泉寺の古戰場あり義隆最後に本寺に入り賊を防きたる處今は只銀杏の大樹一株を存するのみ東北第廿一旅團本部第四十二聯隊兵營あり夫れより龍福寺に大内氏居館の跡を訪ひ歸りて宿に此市の名物を問ふ曰く「死せんべい」大内塗と何ぞ活きたる人物を以て答へざるや阿々正午十二時山口町を去り垣をたる花剛岩砂の道路を走ること約四里小郡停車場より午後三時發の汽車にて馬關に向ふ小野田（セメント生産地）小月長府等を経て馬關より着し税關前錦波樓に投ず汽車汽船の響き旅客の雜沓山口の靜寂と正反對あり

赤間 雜詩

頼山陽

長街如帶蕪波光、面々青山護萬樁、莫怪潮頭駛於箭、厓門一出是玄洋。
文字關頭澹夕暉、彌陀寺畔雨霏々、水濱欲問前朝事、唯有輕鷗背我飛。

四月廿六日雨

赤間 關市

豊浦郡の南端に位し南に一海峡を隔て、豊前と對す東西一里廿三丁南北廿一丁人口四万三千（明治廿八年頃人口三万七百餘）地勢は北に日和山廣嚴寺山火の山等の丘陵を負ひ前は長豊海峡と瀕し東は壇の浦より西は彦島に連り壇の浦の浦を早瀬の瀬戸と呼び豊前企救郡明神崎と相距る僅かに五町廿八間とす港灣の廣さ東西一里餘南北十五町深さ三仞より十二仞に至り能く巨舶大船を容る山陽鐵道九州鐵道の連絡港に加ふるに滿韓地方或は支那東洋西洋の航路に當り交通の便利なると西南地方に冠たり潮勢頗る早きこと大河の流るゝに似たり、朝鮮に對する特別輸出港として輸出品としては石炭、米、食鹽、棉布、石油、磁器、陶器、鉄器、魚油、燐寸、木材、砂糖、素麵、醬油、昆布、紙、大麥、麥酒、洋酒、綿縮、玻璃器、地蓆、木炭、煙草等輸入品は米、豆、乾鰯小麥、人參、牛、石花菜、海羅、大麥、油糟、獸骨、五倍子、酒類等なり貿易額六百万圓以上

此地有名なる赤間關硯を出す原材は勿論此地の産出ふからず遠く厚狹郡厚狹市（馬

關の東北東凡八里)の東北にあり、該市より凡一里半宇平沼田、白椎木、等の地に産する者は紫褐色の凝灰岩として時々綠色を介在せり、理密にして質硬からず故に其堅硬ある部分を選んで所在是を採取す大抵農業の余暇之を製するを以て其製法巧ならず其性甚善良ならず其粗なるものは日光に露すときは破損すと云ふ而して其赤間關に輸贈する者は其裏面に「赤間關」と刻せり坑の深さ大低五間乃至廿間前後にして北四十五度内外に傾斜し必ず蠶岩と互層す平沼田の南半里宇森廣村は産する者二種あり一は土俗紫金石を稱し他を縞石と云ふ前者は平沼田等所産に比して硬且理亦密なり紫色にして綠色を狭む後者は赤間關硯中尤も善良なるものにして赤間關硯の有名なるものは皆原料を此地より仰く其質緻密堅硬にして紫色綠色の縞目を呈し甚だ美なり其質硬きの故を以て其柔かき部分を採用するも其製造甚だ困難に従て其價格も廉ならず故に採取の時季一定せず大抵注文を應じて其原材を輸贈し此市に於て製造す

朝來雨模様にて大に失望したれど勇を鼓して市中見物を試みぬ先づ市の東端壇の浦平氏滅亡の古跡を問はばやと狹長なる市街をつき切り、漸く壇の浦の海濱に立てば雨は益降り來りて遠望に適せず壇の浦は後ろに火の山を負ひ西に御裳裾川の清流を控へ前は早瀬の海峡を隔て、近く豊前の明神崎と相對す別段自然の風光は異なるものはあらねど只平氏滅亡の跡なるのみ只潮流の流るゝ急なるを見るのみ御裳裾川の流末は平安騎奢の夢さめて波濤の底に消え行れし平家の一門や如何なりけん祇園精舎の鐘の聲

や實に諸行無常の響あり、人間誰か盛衰なからん濃霧天の幔幕をどぎして水天の界を知らずかざせる傘の雨滴只誰なすを見るのみ猶少しくは詩的に味ひ見んと欲せしに左りといなさけなき雨空かなと我獨り不平に満てる折柄傍らに此濱街道を往返する舟太郎馬車より殺風景なる喇叭の音は用捨もなく余の耳元に響き渡りて興味索然たり若し夫れ濤聲の遠來のひびきか但しはよせては返す漣の砂子を洗ふ音ならましかば少しは趣味もあるべきに平家の滅亡の跡は、はしなく余の興味の滅亡となり終りしを遺憾なる、踵を轉して阿彌陀寺町に至り赤間宮に至る官幣中社にして安徳天皇を祭る此地昔より毎歳二月廿三日より廿五日迄私祭を執行し稻荷町の娼妓等粧を凝して參詣するの古例あり聞くからく文治の役平家此地に滅亡するや官女の流落して物賣となり或は娼妓となりしもの多く其言語又一種優婉にして其賣物の呼聲なども興あるものなりしと恰かもよし此祭典の事とて雨中準備し忙しかりし明後日は例の娼妓の參詣ありとの事なり由緒づきの神詣なれば致方もなけれど古より聞えたる濤穢の地風俗畫に見たる彼の船乗共の沖合に碇泊するを見ては一群の娼妓小舟に乗して是に近づき頻りに一夜の春を買らんとせしは此地著名の事柄なりしに星霜廻り來りて和船の影かすかに黒船滿港の今日となりてはさすがに左る忌はしき風俗もあらざらんが所あらなる祭典の風俗亦奇とすべし宮の西側は平家一族の墓あり平經盛平知盛平教盛平二位尼平景經平忠光平有盛平清經平資盛平教經等を數ふべし平教經は一の谷にて討死の由吾妻艦にあるの

みか、義經の鎌倉へ差出せし進状に此大立物たる教經の名なし、一の谷戰死疑なしとは川田博士の嘗て論せられしもの此碑面もあまり當にはならざるべし日清戰爭に有名なる春帆樓其西にあり平家滅亡の記念たる赤間宮側に戰敗國の講和を議す李爺は不知滑稽なるか李鴻章當時の旅館引接寺は更に其西外濱町にあり次で東して龜山八幡宮に至る一小丘山海岸に接して華表あり石階の上樓門あり左右回廊を繞らし正面に拜殿あり境内露店多し眺望第一とす正午宿舎に歸る午後は外出せず

四月廿七日雨、馬關滞在、韓國行船便を待つ午前讀書午後停車場附近を散策す夕食後海岸に出れば雨稍晴る對岸門司港の燈光は馬關港頭の燈光と相映し殊に停車場の電燈數個頗る強力數條の螢光線を海波黒暗の内に浸し赤黄色の燈火は其間を點綴して波濤の上一下に連れて煌々たり正に一種大規模のイルミネーションなり

四月廿八日雨稍晴、

午前讀書此日郷里より電報來る午後韓國行船便ありとの事なれば準備に時を移す程もなく午後五時出帆と決す因て直ちに乗船す船名木浦丸大坂商船會社船なり噸數七百九拾九噸船長乙種三宅某なり乗客滿載寸隙なし余は初航海の事として甲板上に風光を貪りて室に入らず午後六時出帆す岩流島産島六連島も過ぎ行きて沖島にかゝる頃より風波漸く荒く甲板上行に堪えず對馬の南に達する頃怒濤艇を撃ちて動搖頗る激甲板上一人去り二人去り遂には我一人を海灘の暮色に對す蘇茫たる海色漸く水天の際を抹し去

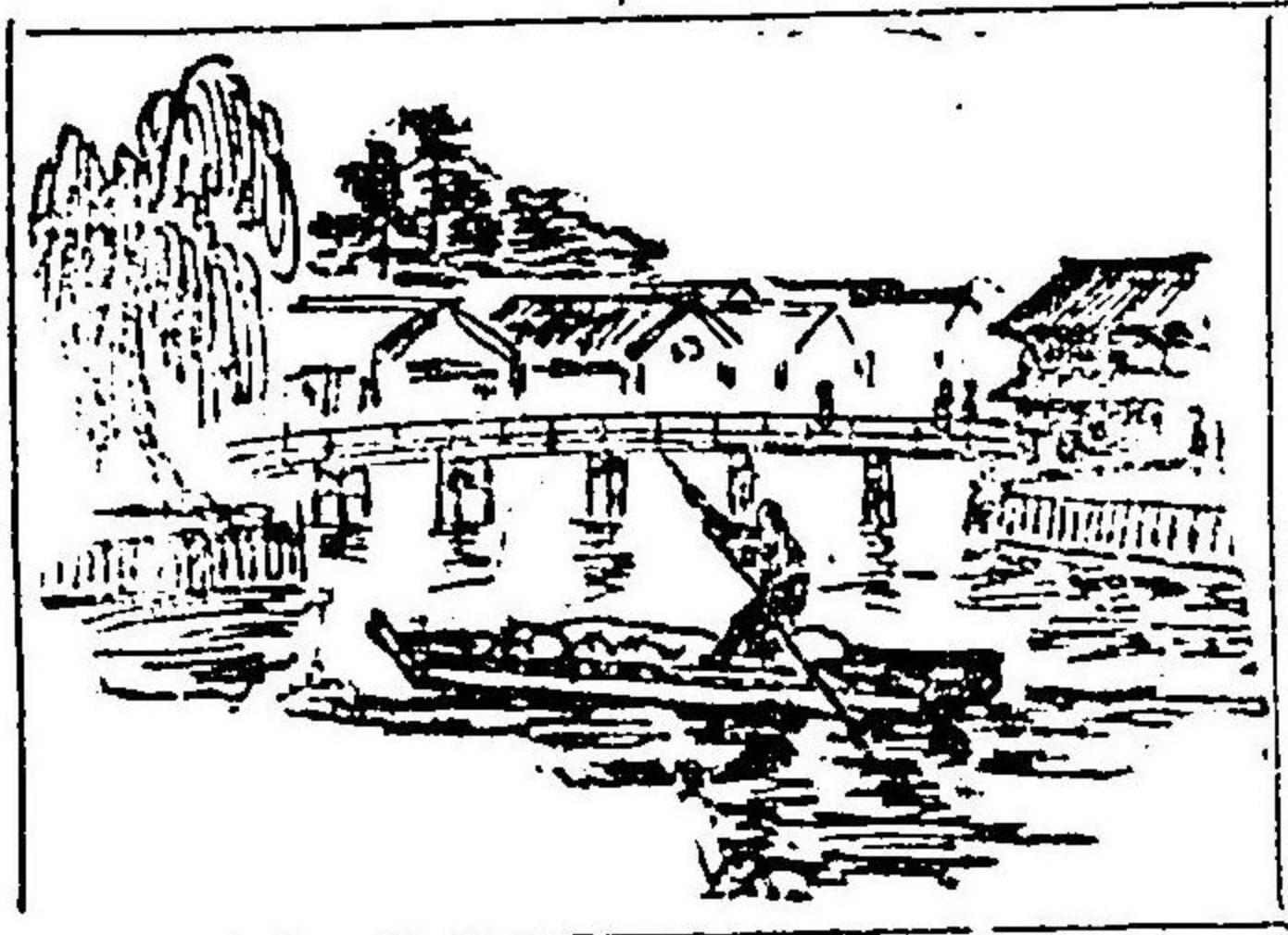
りて船内電燈明かなるの處黒雲忽ち大空を覆ひて光景慘憺たり想ひ起す去年六月十五日常陸丸の遭難、東方かすかに火光の隱現するは角嶋の燈臺か忽ちにして船波浪の絶頂に上り忽ちにして九仍の波底に下る瓢々亦翻々恰かも木葉の搖ぐに似たり我も遂に堪へ得ずして室内に入れば彼隅此傍呻吟嘔吐目も當てられず余は更一步を轉して甲板上影暗きベンチに凭りて冷風を面をさらし瞑目一番夜半十二時に至りき漸くにして船の動搖稍おさまる蓋對島の東側に在ればなり船尾室乗客三五甲板に來る余は此間室内に坐を占め遂に天明に至れり對島を去て亦もや動搖初めの如し翌午前五時北方に一島を見る是を絶影島とす曉天の殘月弓の如く朝霧模糊たる港頭あり須臾にして釜山港東水道に入る一帶の連嶺淡く灣をめぐり龍頭山下翠深き處燈火點々たり見渡せば埠頭微かに白衣の客の東西に奔走するを見るやめて錨を下す響き着港を報する汽笛乗客下船の用意船内漸く雜沓午前六時警官來る船客を調査す余は茲に初めて韓山の一端に足跡を印するを得たり松本旅館に投して先づ一浴を試む

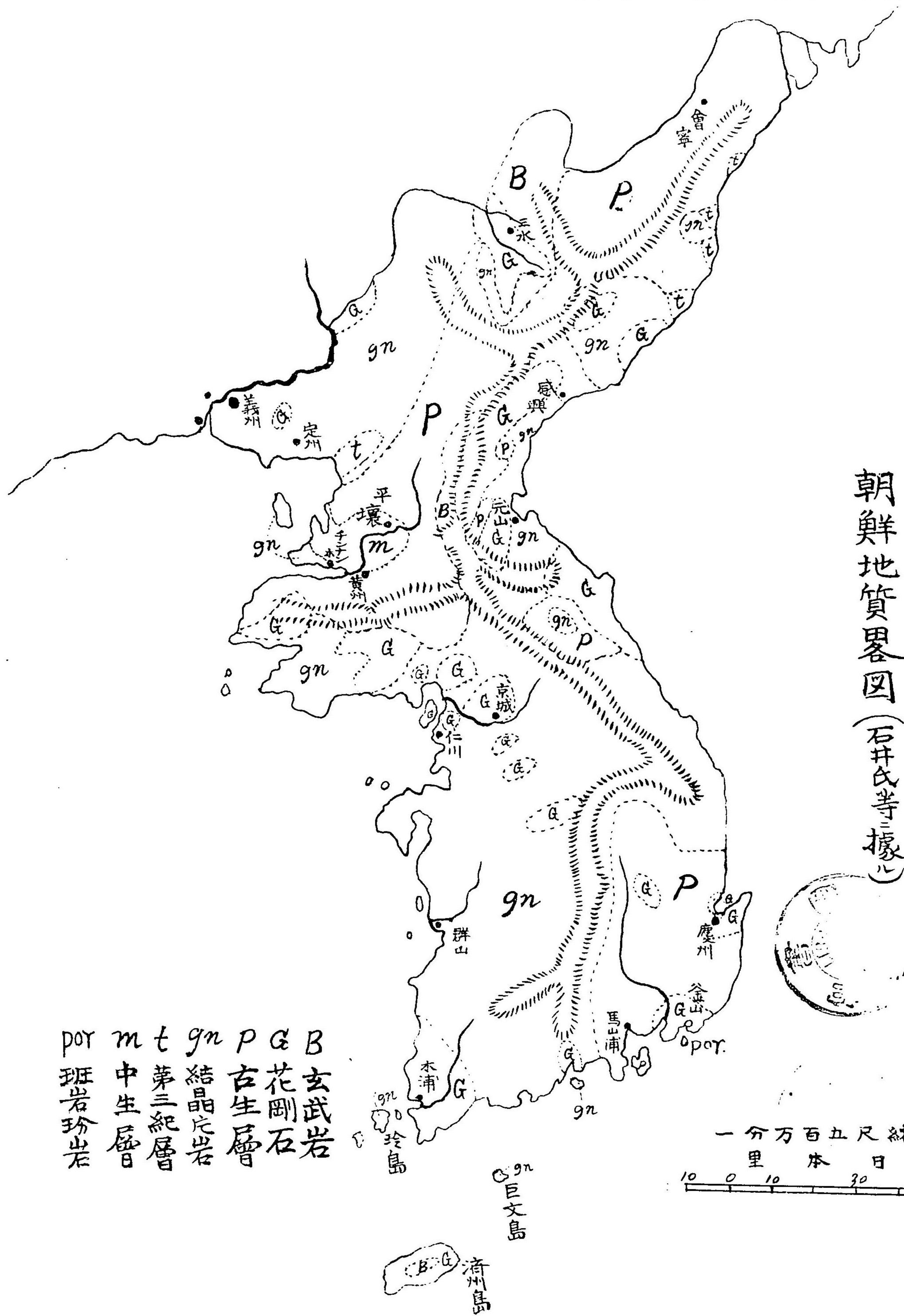
客あり余を勸めて曰く君の西遊頗る好し只君の觀察する處徒らに死せる山河に専らとして生ける人物も重きを置かざるは何ぞや天下至る處名士あり君ついで其所見をたゞかば益する處蓋し多からんと然り益する處多からん然れ共不幸余は所謂大家を訪問して大家の言説を謹聽する程に自から大家たる能はず自然の山河豈死せるもののみあらんや自然は沈黙せる大雄辨家なり余は此大雄辨家の前より常に耳を傾けつ

あり一片の古碑も古今人物の盛衰興亡と語る余は自然の大なる偉人に日夕面語しつゝあり何ぞ名士なきを愛へんや客唯々として退く

四月廿九日朝投錨釜山時正午前五時曉色未明

怒濤洗夢氣象雄、浩々海門通玉宮、清曉影搖白衣客、龍頭山邊月如弓。





韓半島縦貫記

四月廿九日晴、釜山居留地本町二丁目松本旅館投宿

釜山港

慶尙道の東南端にあり南に絶影島横はりて海門を扼し釜山灣其北より灣内水静よして大艦巨舶の碇泊し便なり釜山鎮は灣の北端にあり古館城趾あり小西行長名譽の跡とす約一里灣の西岸より沿ふて南に下れば草梁停車場あり京釜鉄道現今の終極点なり四屏山の山脈其西方より連亘し海岸一縷の新道を通す伏兵山其南にあり樹木なき裸山にして日本人の墓地あり更し其南に翠綠滴たらんばかりの龍頭山あり居留地の市街は其四周を圍る居留地の西戸天馬山脈兀として西水道に逼りて絶影島と相對す此地四周多くは秃山にして樹木の在處は僅かに西水道の韓人部落に矮少なる松林を見ると龍頭山全部及龍尾山の一小丘(居留地東南清正公を祭に老松の鬱蒼たる草梁の西部四屏山山腹に少しの松林を見るのみ韓國にては此地は猶樹木ある地方に屬す絶影島居留地附近草梁迄は地質大凡班岩玢岩として釜山鎮の北部は花剛岩の露出多し邦人の在留するもの一万余人あり馬關を距ること百二十二哩我對島を距る事僅かに三十哩に過ぎず古の新羅地方より屬し嘉吉三年以來我國と互市の規約を定め其後對

島の宗氏専ら日韓の貿易をなせり我國へ米大豆牛皮砂金等を輸出し我國よりは綿布絹布燐寸玻璃器等を輸出を壬辰の役には金海と共に我海軍の根據地となり當時第一征の加藤浮田小西第二征の毛利浮田及水軍等皆此地より侵入せり

午前七時市中見物として出發す第一銀行支店の前を経て海岸郵便局前より波止場に出づ波止場は居留地の東南にあり日本郵船會社商船會社日韓商船會社第十八銀行、三主堂醫院居留地役所第五十八銀行等其附近にあり清正公廟の傍に電燈會社あり更に南海岸に近く水産會社魚市場あり辨天町に出で、龍頭山に登る辨天町は居留地第一の大街にして龍頭山の東西に互る龍頭山の中腹に辨天社あり鬱蒼たる老松山を覆ひて内地にも稀なる幽境とす絶頂は龍頭山神社あり釜山の風光を賞する此地を第一とす形勢雄大蓋し内地に見る可からざるの好景地たり山を下りて西麓に至れば茲に朝鮮時報社あり大谷派本願寺別院あり商品陳列所あり其建築頗る壯麗南海岸に近く朝鮮電信局あり西に日本郵便局あり更に海岸を西すれば釜山精米所日韓精米合資會社あり是を歩を轉て龍頭山の西北麓に出れば日本駐劄隊兵營あり兵營の北通り東西に貫くものを大廳町と云ふ町の西端に憲兵首部屯所あり兵營の西北に公立小學校高野山大師堂本派本願寺あり兵營の西北に公立小學校分教場釜山倉庫會社巡査合宿所等あり日本領事館警察署商業會議所は波止場龍頭山の間にあり市中白衣の韓人三々五々本町邊に露店をはり朝鮮人日用の雜貨を販賣す目あふる、韓人の大半は是れ悉く勞力者にして日本人の使役



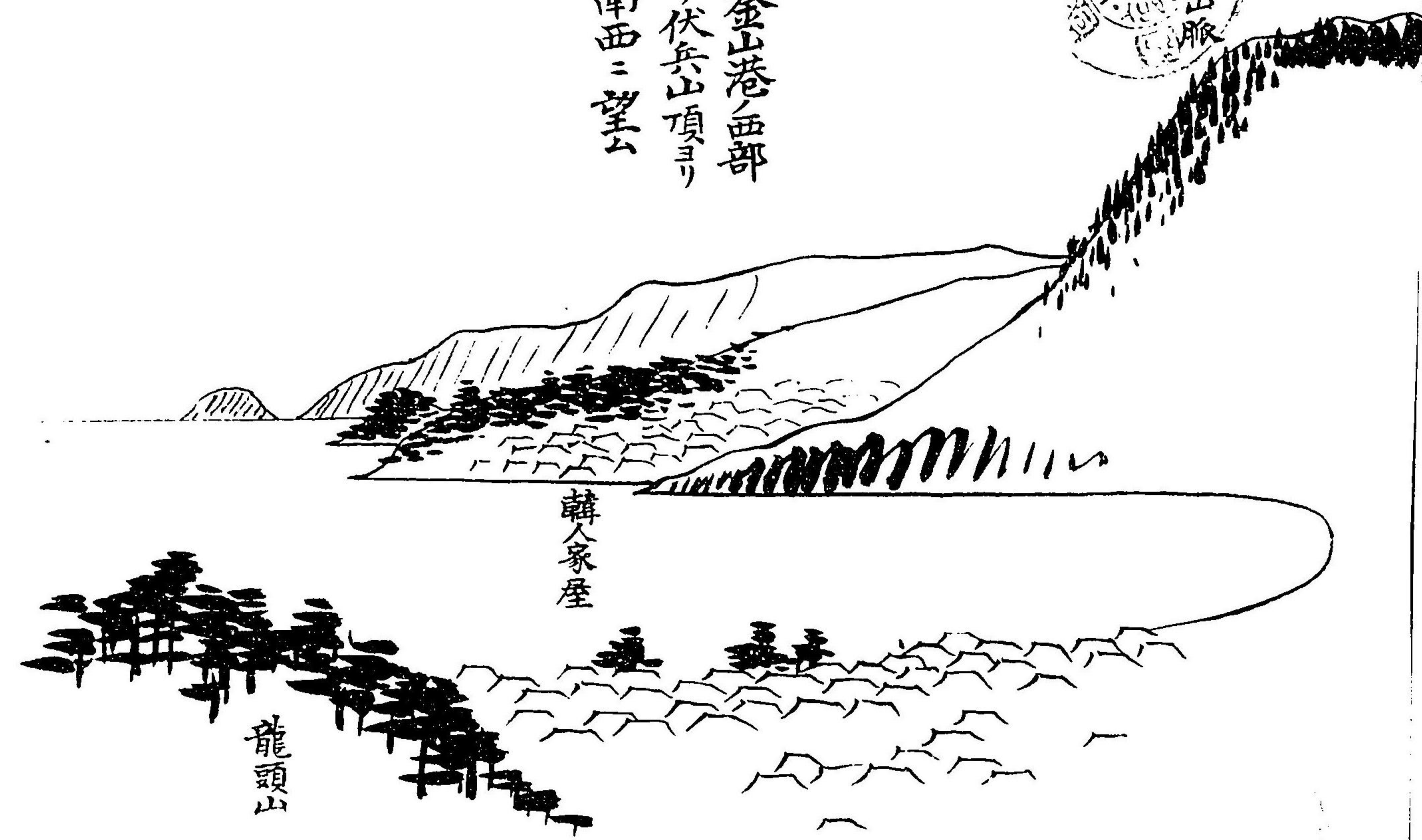
東口

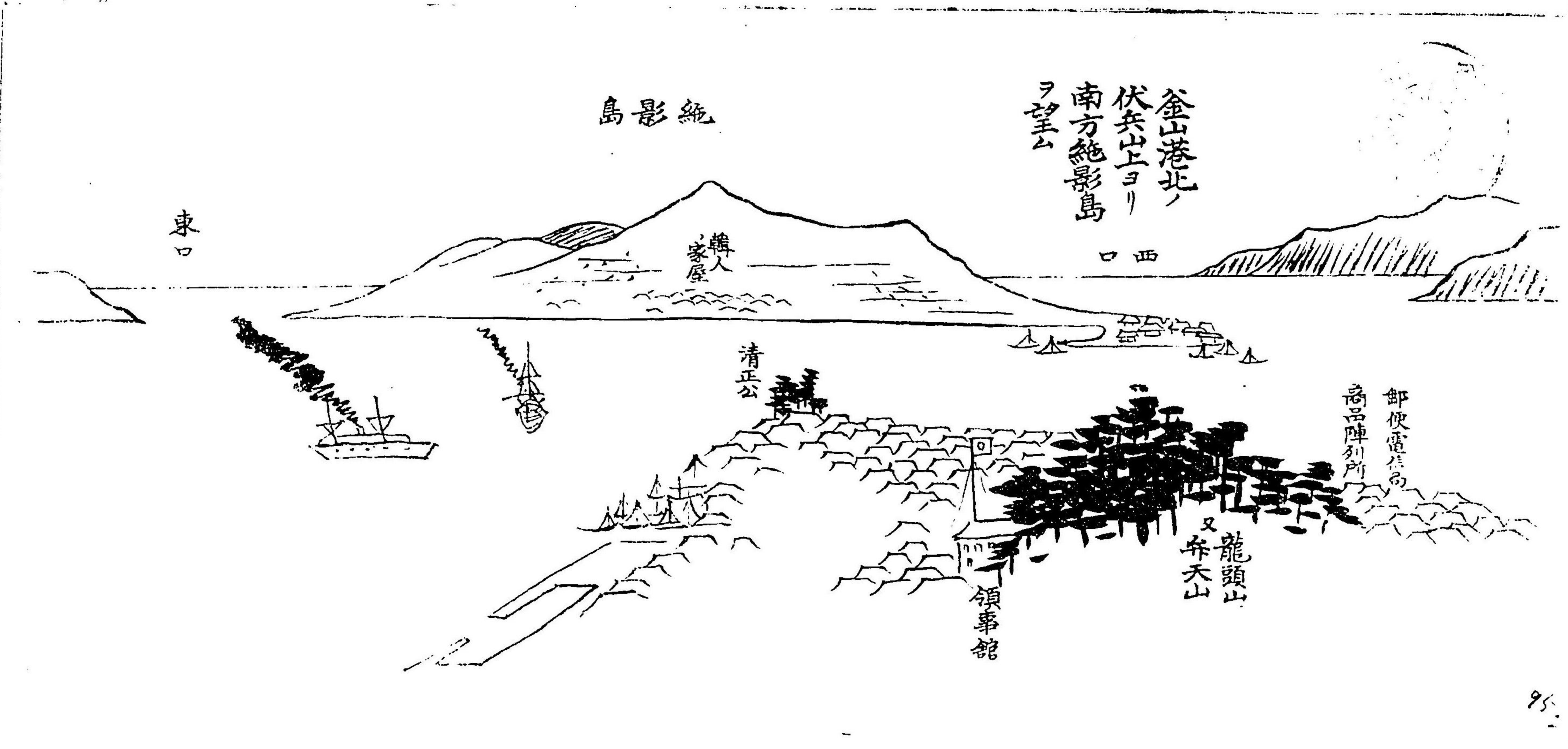
天馬山脈

龍頭山



釜山港西部
又伏兵山頂より
南西ニ望ム





絶影島

釜山港北
伏兵山上ヨリ
南方絶影島
ヲ望ム

東口

韓人家屋

西口

清正公

郵便電信局
高麗陣列所

龍頭山
又
弁天山

領事館

に任ずるもの其境遇や憐むに堪えたり居留地市街を離れて東海岸を行く事拾數町伏兵山の東北より小丘あり海關山と云ふ海關山の突角海岸より南方一直線波止塙燈明臺に至る處迄は悉く近時の埋立にして其間に防波堤を廻らして船舶の碇繋し便にす海關山の西部一帯山腹は各國居留地にして未だ建築多からず僅かゝ露國領事館敷地其他二三ありのみ草梁に至る新道を進む更に數丁海岸に英國領事館敷地あり山脚に東萊監理署あり是より北支那人居留地にして道の兩側肆店櫛比稍繁盛の觀あり居留地より廿七八町にして草梁停車場に至る日本人の旅舍商店韓人家屋等既に宿驛の形を成せり思ふに韓國の縦貫鐵道東清鐵道に連絡し山陽鐵道亦連絡船を釜山より延長するの曉は如何に此地の盛大を増すべきかを、然も規模宏大多々益辨するの地位其前途頗好望なり水道電燈電話の施設完備し居留地の有形資産一千万圓以上を達す韓人の風俗もつきて實際の大畧を述べんよ韓人の家屋は皆八尺四方を一間と唱へて八尺の材木を以て部屋を組立るものにて其大さも日本内地の材木よりは勿論細小なるもの大抵手頃の松丸太を削りて自然木のまゝ組立つるなり爲め其内極めて狭く少しく大なる家も此室二個と家族の寢室一個別に厩所を置くに過ぎず斯る狹隘を加ふる例の温突は床下より温氣を與へ家根は藪葺周圍は土と石との土壁にて厚く、空氣の流通極めて悪しく其内三人乃至五人を住ましむ温突の上にはアンペラを敷き蠅蚊此間を徘徊す簞笥の如きものには美事なるものあり衣服の制は一定し居りて先頭髪を結ばすして後に長く垂れ居

四月卅日少しく、雨

午前八時半草梁發の流車を投せん爲め旅舎を出たるも雨天の爲め赤土混りの泥濘なる新道を徒歩するとなれば一里足らずの道程を約一時間を費し漸く京釜鐵道の初乗を試むるを得たり明日よりは京城迄直通列車を運轉するとの事なりしも余は大邱府一泊の豫定にて出發せり

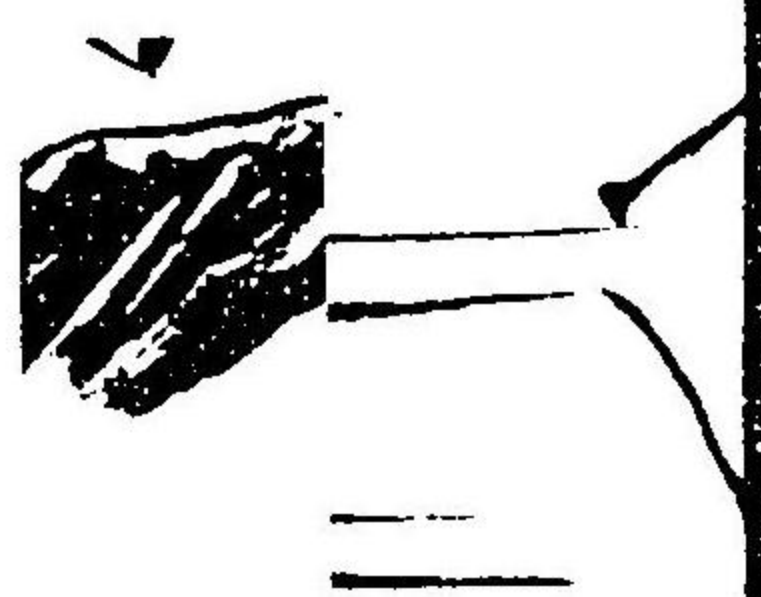
京釜鐵道貳百六十七哩九

大邱府迄七十七哩五約四時間

草梁大邱間驛名

草梁、釜山鎮、龜浦、勿禁、院洞、三浪津、密陽、楡川、清道、慶山、大邱、

京釜鐵道客車は内地より大に、會社は食堂車を列ねて乗客飲食の便をはり車中ダイニングカーの印を附したるボイを使用して上中下の區別なく運轉中に賣歩かしむ東萊縣に温泉ありとの事なれど流車の線路あらず遺憾なりき朝鮮國は温泉も富む然も其温泉や多く新火山岩の間よりせずして花崗岩の間より湧出し熱度高く多くは物を煮得るといふ此地亦花崗岩地に湧出し熱度高し冷却するに非されば全身糜爛すと云ふ故に崗石を以て造りたる桶に汲み冷却するを待ちて入浴すといふ八時卅七分釜山鎮に達す朝鮮に於て鎮は縣より小なるもの人口約七千日本人の定住するものあるも其數を知らず午前九時二分龜浦に着、龜浦は洛東江に臨み貨物の集散する處西は洛東江を渡りて金海府(古任那駕洛の地)に通する大道に當る、鐵道を依らざる時は東萊より此地を經



94



四屏山

草梁
停車場

釜山鎮

釜山港
埋立工事
新市街地

外國人家屋

釜山、草梁、通下道路

釜山伏兵山上より北方釜山
鎮草梁ヲ望ム

伏兵山

過するなり壬辰の役加藤清正等は釜山東萊より東して機長縣に出で小西行長は東萊より梁山郡(郡司所在地通度寺と稱する寺院あり新羅善德王の創立なり)散院關より大邱に向ふ只浮田秀家の軍のみ龜浦より金海府昌原府を経て北昌寧縣美山府に向ふ再征のときも此地を過ぐ人口約五千あり停車場内より韓人の洛東江の鯉を賣るものあり長さ壹尺五寸大なる籠に數十尾を數ふべし曰く日本貨壹圓と一兵士あり鐵道沿線を警備するもの後備廿四聯隊久留米地方の出身なり紙幣五十錢を出して稍發的に購得たり車中事情に通するもの曰く大抵目今七拾錢位のものならんと要するに安價と言ふべし九時廿六分勿禁に至る洛東江は瀕するは前驛と同じ兩岸花崗岩砂流れて堆をなす花崗岩や良好の土壤を構成するの分子に富む河岸一帶麥圃の壤々たるを見る即ち是此地同胞の定住者二十人を數ふ九時四十一分洞院着邦人十數名あり此地附近より粘板岩珪岩石灰岩等の古生層を見る九時五十六分三浪津着同胞八十有餘名韓人千名と稱す此地金の毛利秀元の進軍したる處人口一千邦人約百名官衙市場等あり我憲兵守備隊あり同乗者中より韓人の日本を行きたるものあり彼京都、大坂、神戸等を知り日本語を知ること邦人の如し爲めに種々の便宜を得たり余が話頭を轉して韓人の不潔に及ぶや彼韓人不潔

ならずと主張す韓服の粗なるを言ふや彼我帽子の粗なるを言ふ如何に貧國あるも將た亡國に近きも自惚心は強きものかな此精神や導きて愛國心の根本たらしめ得ざるか十時四十分楡川驛着寒村にして言ふに足るものなし十一時十六分清道郡着、人口二百邦人の有無を知らず勿論五人十人の定住者あるべし適ま人ありて曰く此國の郡司たる位置も必ずしも低からざるも韓國官吏登庸法たる皆金錢よるものなれば任期僅かに十日間の郡司ありと云ふ以て其腐敗の程度を見るべし慶山縣着は三時七分大邱に着せしは正午後卅一分なり慶山大邱は小西行長進軍の道路にして三浪津附近より此地の間地質は古生紀なり京釜鐵道や多くは進歩的なれ共只一考を要するは米國流とやらよて内地の改札掛の如く停車場にて切符を改めず乗車中を檢査し下車驛を出る時も亦切符を改めず乗車中取集むるなり利害如何の者にや大邱府東門外達城館より泊し午後大邱府を巡覽す沿道特に驚きたるは山岳一樹の生するなく全く突んたる岩石なること、是なり従て三浪津に洛東江を去てより水道の潺湲を見たる事なし否沿道の山間時、岩石の崔嵬たるものあるも溪間一水の流るゝを見ず蓋し韓人や濶突に使用する薪材の多量なる爲め至る所の樹木(大概松)を伐斫し盡すも植林事業に至りては毫も彼等の念頭になきもの水源の涵養や邦人と雖も聞々其思想なきものあり況んや韓人や林學者ドクトル、ミユツトヒ氏の研究に基きプロフェツンドクトルウェーベル氏の算出したる所に由れば外野よ於て蒸發する水分百よ對し林内より蒸發する水分の割合は次の

如し

林種	蒸發量	殘留量
ふな	四〇、四	五九、六
とうひ	四五、三	五四、七
あままつ	五八、二	五七、七
新植地	九〇、三	九、七

之に由て見れを無林地よあつて空しく蒸發し去る雨水も林地よ在ては其五六割を殘留するを知る尙落葉苔蘚の存するあらば殘留量更に二割を増加すれバプロフェツンドクトルウェーベルマイエル氏の己に實驗せる所たり此く殘留したる雨水は其一部を樹根より吸收し去らるゝと雖も其他は全く地中よ滲入し岩石の罅隙よ潛伏し集合して流動し漸く滲溜して再び地表に湧出し遂に所謂泉源を形成するものとす而して林内雨量の殘留量や高山に登るに従ひ愈多きを加へ遂に八九割に至るは實驗の証あする所又高山に至るに従ひ雨量も亦益々多きものなれば山岳の森林殊に高山の森林は多分の雨水を地中に保有し以て水源を涵養するの作用あるものとす韓國よして水流の饒多なるに至らば水田の増加山水の風致水カ電氣の利用其他工業の發達より終局に至つて韓人有の不潔も茲に一洗し得べく山川の景趣にして一變せバ人心の變化美的思想の發達を期するを得べし韓國根本の改良や植林よあつて植林にあるかな由來韓國よ新火山岩の發達

を見ず爲に火口なく火口湖なく全土未だ湖水あるを聞かず其風光や單調ならざるを得ず西和田久學氏の探險に據れば威鏡道の威葛嶺京城元山間の鉄嶺慶尙道北部の鳥嶺等には頗る巨大なる材木あり洛東江の水源を探險したる某技師の談に韓人の斧斤を深く洛東江の水源まで乱伐して多くは禿山たらしめ居れり依て霖雨の候は當りては雨水忽ち河身に流出し兩山の谷間に汎濫し大石其間に磊々たり樹木も悉く瀾葉樹にして針葉樹林は皆無なれば今日の儘なるときは水源倍々涸渇するに至るべしと云ふ分水嶺や多くは鬱々蒼々たるものありと鉄道沿線に見るもの僅かふ松の一種を見るのみなれど江原道の金剛山(日本河内の金剛山は此山名より来る)の如き敢て高からざるも其森林の鬱々蒼々たるは著名なるものにて白雲木シデ、イタヤカイデ、マユシ、ブナ、ハリギリ、ドロヤナギ檜、紅葉、モミ、シラバ等を數あるを得べく紅葉の如きは殊に多くコルツ柏、ハンノ木等も見得べく其種類や決して少なりと言ふ可からず韓國の禿山之濫伐の決果なり地質豊植樹に適せざらんや日本の幽邃なる樂土を去て無味單調なる此地を履み天の皇國を幸するの大なるを想ふて皇國靈氣の四海に英發する所以を感し不思大日本の前途を祝福するの光榮を擔ふ

大邱府

嶺南慶尙北道觀察使の任地にして北緯約卅五度五十分の地にあり人口約三万五千邦人の在留するもの約二千以上戸數二百七八十益増加の趨勢あり京城を距ること六十里釜

山を距る二十八里道内四十餘郡と全羅、忠清、江原諸道の大郡邑に對する中心市場よして八公山府の東北を繞る臥龍山其西に連なり琵琶山南にあり西北と東面に曠野を望み其廣袤東西約五里南北二里の平野の中心に立つ琴湖江東より來りて此平野を貫流し西方三里にして洛東江に入る城郭あり二百年前の築造にて高さ約三間周圍二十町四門を設く城内の中央に鐘路あり(韓國大都會は鐘路なるものあり鐘樓ありて韓國時間を報ず我國の午砲の如し)商店櫛比するも大体より言へば田舎風の家屋の三々伍々群るが如く我内地の如く軒端相接するもの多からず春秋兩期の大市場あり春は二月秋は十月一ヶ月を期して開市せられ八道の商賈來集し其取引高四五万圓乃至六七十万圓に及ぶ毎月例市は東西兩門外に開かる西門外は二七の日東門外は四九の日其般賑雜沓他市邑に其例を見ず輸入品の重なるもの食鹽、石油、燐寸、金巾、木綿、綿糸、藥材等合計二百余万圓輸出品には米豆牛皮、骨、荳子、五倍子、其他穀類にして合計價格二百萬圓是等商權全く韓人により觀察府は城内の中央にあり慶尙北道四十一郡を統轄す此地にて最も注意を惹くべき建築を米佛宣教師の教會堂經營すとす東山の丘陵上に韓洋折衷の會堂を見るは佛國宣教師の經營にかゝる佛國會堂北方邱陵の高所にあるものは米國宣教師の經營する處なり規模宏壯眞個に全都會堂を壓するの概あり北門内の古寺院を利用して本派本願寺の報恩講并ひに明如上人三回忌法會を執行するを見る臨時の設備未だ宗風を競争するを得ず此府達城山あり公園の設計中なり目下植樹中にて松、柳、躑躅等既に一万五

千株余を植付たり日本人の居留地は多くは東門北門の間の停車場西側にして北門内東門内西門内至る處に雜居せり停車場附近は多く日本風の新築家屋にして中には瓦葺白聖塗の家屋もあり然らざるも蕪菁日本風にて人口二千以上を算すと云ふ大邱郵便局第一銀行支店大邱實業新報社あり居留民は六千余圓の豫算を以て種々の費目を負擔し専ら同胞の活動を講究し居たり城壁の上多數の韓人の終日漫歩するを見る余が宿泊せし達城館の如きは豊後より鑛泉を持ち來りて洗湯を兼ね和洋料理旅館を開業し頗る繁昌の様子なり大邱實業新報によりて慶尙道の人情風俗を記せば本道の人民は他道に比して稍勤勉貯蓄の觀念あり又古來學問を勵むの地と稱せらるゝも日本人よりみれば固より論するに足らず一洞(一村)の洞主(村長)にして眼に一丁字なき者あり境陔の地に至ては漢字を知る者極めて少なく大抵諺文にて日用を便する程なれば教育の程度も推知するに難からず人民は比較的巧慧なれ共多くは目前の利に趨りて遠大の計を知らず最も射倖心に富めり故に紙牌骨牌等の賭博到處に行はる老人を尊ぶは寧ろ東洋の美風なるべけれど韓人の如く極端なるものはあらざるなり我國は老ては子に従ふと云ふの警語あり老人自身も亦謙退して自分は既に年老たり願はくは愚息と協議せられよと故ら外交を避けて家事に干渉せざる風なれ共韓國は大ひ然らず村治もまれ紛議もまれ事大小となく何れも老人ならざれば決定する事能はず一家の主宰者も老人なれば一村の主宰者も老人なり一郷一郡の事亦復然らざるなし故に韓人を懷柔せんと欲せ

ば先づ老翁を籠監せざる可からず老翁を籠監せんと欲せば先づ幼兒を愛せざる可からずと老者は年七十に至りては官府の賑恤を受くるの權あり幼者は五六歳に至るまで上衣のみを纏ふて袴を着せず腹部以下を露はすと余の見たる處よては幼者の服装あながち然らざるが如し如何にや

五月一日晴、大邱發京城に向ふ

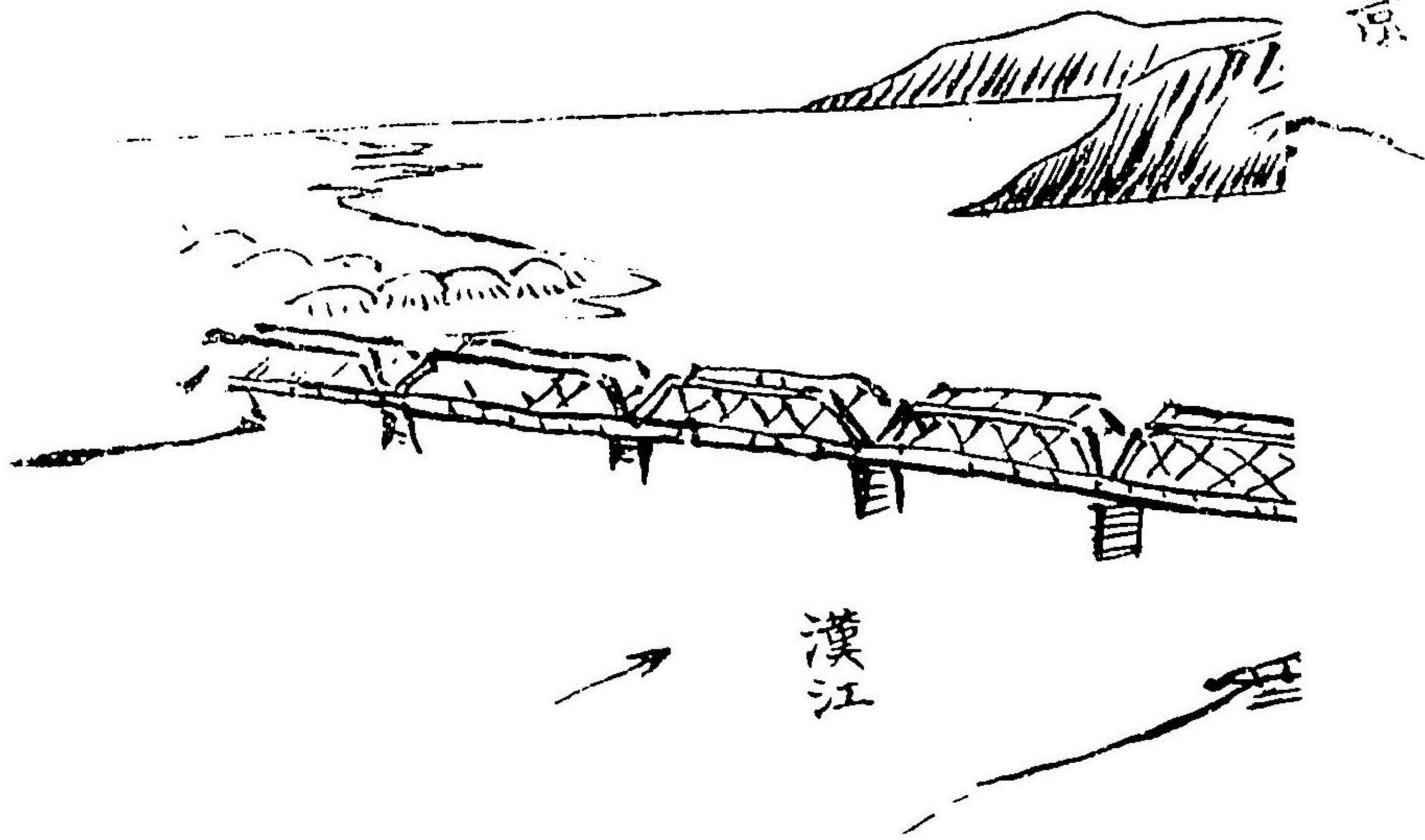
大邱京城間停車場

新洞、倭館、若木、金鳥山、金泉、秋風驛、(以上慶尙道、黃澗、彌勒、永同、深川、伊院、沃川、増若、太田、坪村、新灘津、馬尾浦、美江、内板、鳥致院、葛巨里、全義、小井里、天安、稷山、成歡、平澤、(以上忠清道)西井里、振威、鳥山、餅店、水源、富谷、軍浦場、安養、始興、永登浦、鷲梁津、龍山、南大門、京城、(以上京城道))

午前八時三十分大邱發新洞を経て洛東江を渡る倭館、若木、金鳥山の諸驛何れも寒村にして特に言ふに足るものなし(金鳥山は南星州より秋風驛まで通する大道にして星州に金鉄の産出あり)秋風驛に達せしは十一時卅四分なり(地圖上秋風嶺は高山峻嶺の一部なるべしと想像せしむ只山間に寒驛たるの外特に異状を認めず壬辰の役浮田秀家進軍の線路たり此以西忠清道全部の地質は片麻岩結晶片岩等の太古紀に屬す)午後三時太田に着す、地寒、なれ共江景地方への分岐点に當り西公州を控へ南鎮峯に通す東北は清州の金産地文義の金産地、遠からず廣漠たる平野にして邦人の居住する

かの頗る多く、旅舍、商店等所在に散見し、將來有望の驛たり、天安驛の西には温陽郡の温泉地あり、稷山縣は金礦地にして邦人の發掘に従事するは世人の知る處昔の慰禮城にして百濟國の始祖温祚の國都たりし地なり（太田、全義、天安、稷山、の四驛は壬辰の役再征の際毛利秀元全州より此地方に進軍したる處なり）成觀驛は明治廿七八年の日清戰役に大島旅團の激戰したる處平澤縣の東に松崎大尉戰死の安城渡あり安城郡又其東にあり金産地す水原府は華城と稱す京畿道觀察使の所在地たり城壁周圍一里余一條の清溪市街を貫きて南流す城上の諸名樓は其堅緻壯麗稀に見る所なり永登浦に着せしは午後八時十五分なり此地仁川行の乗替地にして停車場附近は頗る雜沓せり鷲梁津龍山の間以有名なる漢江あり一大鉄橋を架す白砂一帶の堆積するを見る漢江の水流此地以上は稍河水の流下するを見るも以下は洋々海の如く潮の干満此地に及ぶ冬期結氷するも夏期は小蒸氣船韓船河口より往來し往時鉄道の開けさりし頃は仁川地方より京城に入るの門戸として船舶常に輻湊したりと云ふ京義線は龍山驛を基点とし停車場の區域廣大亞鉛葺の假建築數棟並立てり午後九時廿五分京城南大門着邦人の京城に入るものは南大門驛より下車するを便とす所謂京城停車場は西大門附近にして我居留地に至るには殆んど市中を横断せざるを得ざれを余は南大門下車京城居留地旅館旭館に入りしは午後十時なり此日車中同乗の韓人中二人の學生あり一人は慶尙道慶州府より來る一人は忠清道天安よりす共々京城官立日語學校生徒にして内一人は該校二年生との事

龍山停車場風景



27